自然主義盛衰史

正宗白鳥

自然主義盛衰史

一

徳田秋声の記念碑がその郷里金沢に建設されたそうである。島崎藤村の記念堂がその出生の地木曾山中に建設されたそうである。これ等の文学者が尊重される時代になったのであるか。往年の自然主義作家でも、傑(すぐ)れたるものは世人に敬意を寄せられる時代になったのか。藤村も秋声も、よわい古稀を過ぎるまで生存して、その長い

生涯の間執筆を怠らず、最後まで殆んど創作力の衰えを見せなかったと云われている。二氏は、自然主義作家のうちで最も完成した、代表的作家であるように、文壇に於て認められている。それで、この二氏の死によって、自然主義文学も一先ず結末を告げたように私には思われるのである。自然主義の感化は深く広く、以後の文学に浸潤しているようであるが、既にその表面的の役目は果して引下（ひきさが）っているのである。終戦の間際に逝去した二氏によって、それが鮮かに分るようである。終戦後の文学の方向は見当がつかないのであるが、この雑然たる間に

も、新たな文学の芽は萌(も)えかかっているのかも知れない。これからの文学は、時代の激しい変遷につれて、どういう経路を取るか、未来の事は誰れにも分らないのであるが、在来の自然主義文学が復活して勢いを揮うことはないに極っている。

私は自然主義作家群の一員として、文壇に生存を続けたような形になっているのだが、この部面の重なる作家は殆んどすべて逝去した。私の知友は全く無くなって、私一人、世に残されているような佗しい感じに襲われている。先頃上司小剣の葬儀に列して、ことに痛切にそれ

を感じた。藤村秋声秋江は、終戦前、まだ東京空襲なんかの無かった時分に逝去したので、終戦後、面目一新した時代に、相会して旧を談じ、現在を語り、「お互いによく生きて来たものだ」と、共同の感慨を洩し合った相手は小剣一人であった。その小剣も突如としてこの世を去った。こうなったら、文壇に於て私が腹の底まで打解けて話の出来るような相手は全然無くなった訳である。

秋声の記念碑、藤村の記念堂について聞くとともに、私は、花袋秋声生誕五十年記念祝賀会の光景を思出した。月日の経つのは早いもので、あれから殆んど三十年も時

が経過しているのだ。その時は最初の世界大戦後の好景気時代で、私は郷里滞在半年の後、東京へ帰ろうとして、借家が見つからなかったため、夏から秋にかけて、伊香保や軽井沢で生活していた。高原は秋闌（たけな）わになるとともに寒さが迫って来るので、私は下山して、本郷の菊富士ホテルに一先ず身を置くことにした。そして毎日空家捜しをしていたが、その時、文壇では、花袋秋声五十年祝賀会が計画されていたのであった。菊池寛が最初に思いついたのではないかと、私は今でも思っている。当時は世間の好景気の余波で、文壇も物質的に潤いだして、

過去の文壇苦労を知らぬ新進作家は、自然、朗かな気持で元気よく世に生きるようになっていたので、世間に対する示威運動のつもりで、先輩の祝賀会を催すことになったのであろう。俗世間が文学の尊厳を認めないことに対する不平の爆発見たいなものであった。永井荷風が、この二氏の祝賀会や翌年の藤村五十年祝賀会について、「当人たちがいやがるのに、無理押しに会をしようとする若い連中の行為は、平生人間の自由を説くに似合わない不都合なことである」というような意味の事を云ってケチをつけたが、これは荷風式へそ曲りの見解であって、

藤村は兎に角、秋声花袋は一応は、謙遜して、極(きま)りを悪がって辞退したかも知れなかったが、つまりは喜んだにちがいなかった。悪い気持はしなかったにちがいない。

私は無論発起人のうちに名を列したが、実務にはたずさわらなかった。しかし、祝賀演説者の一人として指名されて、他の発起人から強要された。私は演説は不馴(ふな)れであり、甚だ好ましからぬものであったが、十目の見るところ、私が文壇を代表して先輩二人のために一言の祝辞を述べるのは当然であると断定されていたので、私は目をつぶって直ちに承諾した。それに、自然主義は毀誉(きよ)

褒貶(ほうへん)の激しかった間に幾年を経過して、自然淘汰を経て、時代の篩(ふるい)にかかって、純真なるものが残っていて、新時代の新進作家達によっても、自然主義の代表作家が祝賀されるようになったのだから、私も多少の感激をもって、祝辞でも述べようかと思ったのであった。

東京にはいつまで待っても、適当な空家が見つかりそうでなかったので、私達夫妻は、中央公論社長の勧めに従い、氏の別荘のある大磯へ行って、氏の案内によって、旧い空家を一軒見つけて、一先ずそこに落着くことにした。大正九年十月の下旬であった。移転後、たびたび日

返りの東京通いをしていたが、祝賀会出席の外に、朝日新聞新築披露会出席のために上京した事が、今も記憶に残っている。朝日の会は帝国ホテルで開かれた。当時は飛ぶ鳥も落すほどに威勢のよかった首相原敬が、来賓総代の格でテーブルスピーチをした。彼が大阪毎日新聞の社長として、朝日に対抗していた思出話をしたのであった。どうしても朝日にはかなわないので、思切って、或手段を講じて人気を取ろうとしたのだが、それも成功しなかったと、微笑を洩らしながら、咄々（とつとつ）とした口調で述懐した。その或る手段とは、人気のある芸人に授賞する

ための投票募集であったのだと、朝日の記者が私などに耳語した。原敬については、体軀頑健精力絶倫の大政治家として、来会者のすべてが敬意を払っているように私の目に映った。この披露会と前後しての、「花袋秋声生誕五十年記念祝賀会」である。私はかの原首相と比較してこの二人を見たのであった。

演説会場は有楽座であった。私は、「有楽座に於て」という題目の下に、取留めのない雑談をした。肝心な秋声花袋については殆んど何も口にしないで、私自身の文学経験をしどろもどろで吐露したのであった。桟敷には

徳富蘇峰翁が坐しているのを、ちらと見ながら、年少の頃蘇峰中心の民友社文学に心酔して、後年それから離れた次第を、無遠慮に述べたりした。後で聞くと、翁は、「演説がなかなかうまいですね」と、傍人に語ったそうである。

有楽座の演説が済むと、築地の精養軒で宴会が催された。和(なご)やかな太った顔した花袋と、気むつかしそうな痩せた顔の秋声とを正面にして、大町桂月、有島武郎、柳原義光、小川平吉などが左右に並んでいたことが、私の記憶に残っている。政治家小川平吉は文学にたしなみが

あって参会したのではなく、富士見高原にある彼の別荘を、何かのつてで花袋に貸していたのを縁として、この会に顔出してたのであったらしい。この山荘の事は、花袋の作品にたびたび書かれている。「山荘にひとりいて」と題された作品などには花袋の趣味がよく現われている。それ等の参会者は、司会者の指名によって、みんな簡単なテーブルスピーチをした。当時の年長の文学者は、こんな会合は見くびって誰れも出席しなかったが、ひとり大町桂月は、物に拘泥しない、瓢逸（ひょういつ）無邪気な文人であったので、参会して祝辞をも述べた。伯爵柳原は、「こ

れが有名な政治家や実業家の祝賀会であったら、招かざるに大勢が集って来る」と慨歎して、文学芸術の無視される社会は沙漠のようで、住むに堪えないと云ったりした。有島は、「文学者は、生れると同時に文学者としての途に上っているようなもので、花袋秋声は完全に生誕五十年に達している。他の社会の五十歳の人とはちがっている」と云ったような、印象ふかき祝辞を述べた。

私は、早目に会場を出て、雨の中をひとり新橋駅へ向った。途中、与謝野夫妻の通っているのを一瞥(いちべつ)して、あの人達も参会していたのかと疑問を起した。新橋の停車

場の待合室には、意外にも妻が私を待っているのを見た。私には無断で、後から大磯を出て、有楽座の演説を聴いて買物などして時を過したのだそうだ。その頃の私達は、故郷にても住みづらく、大磯の仮寓も薄ら淋しくて、身心が落着かなかったのであった。

花袋秋声にしても、人生五十を無事に経過し、祝賀会をされたとは云え、自己の文学について安んじてはいられなかったにちがいない。時代の流れは、彼等をも沈没させんとする勢いを示していたようでもあった。彼等を祝賀した青年文学者は、彼等に取って代らんとする意気

を示しているのであった。

私は、第一次世界大戦後の日本文壇の一事件たる「五十年祝賀会」を思出すとともに、日露戦役後の文壇劃期的事件でもあった自然主義勃興の光景を回顧するのである。当時私は読売新聞の記者として、文学美術に関する部面を担当していた。この新聞には、毎日文芸欄が設けられていた上に、月曜附録というものがあって、二ページ全体を文学美術の評論や種々雑多の文章で埋めるのであった。私はいつとなしに、自己担当のこれ等のページに、自然主義推讃の論文を掲げるようになった。それで、

田山花袋主宰の「文章世界」島村抱月主宰の「早稲田文学」と、私の担当していた読売新聞の文芸欄とが相呼応して、自然主義宣伝の根拠地になっているように世間からは思われていたらしい。これについて叙述する前に、私は自分が次第に自然主義に接触して、蒙を啓(ひら)かれるに至った経路を回顧することにしよう。

硯友社文学が衰頽して、中村春雨、田口掬汀(きくてい)、菊池幽芳と云ったような作家の「家庭小説」と名づけられていた作品が文壇にはびこっていた時分、小杉天外の作品が異色を呈して、一部の批評家から注目されていた。彼は

ゾラなんかを学んで写実主義を標榜(ひょうぼう)していた。「楊弓場の半時間」とか題して、浅草の楊弓場の光景を手帖を持って行って写したのを発表したりした。書下しの「初姿」と「女夫星(めおとぼし)」とは、沈滞していた文壇では、注目すべきものとされていた。私は、一度抱月に連れられて、鶏声(けいせい)ケ窪(くぼ)に天外を訪問したのを縁として、幾度か氏と接触し、小田原に移転した氏を、箱根の帰りに二度も訪ずれたことがあった。氏の机の上にゾラの「金」の英訳が載せられているのを見た。読売に連載された「長者星」を構想していた時分であったと思う。その時、「人間は

これだ」と云って、氏は握りコブシを突出して力を説いた。長編「コブシ」を書いた時分であったと思う。「食物欠乏の時には、親子兄弟でも食物の奪い合いをするものだが、それが人間の本性だ」と云って、それを是認するような口吻を洩らした。私も同感であった。「長者星」を書くについて、作者天外は、日本現代の富豪の真相を知らんとしたのだが、大隈重信が彼の望みを容れて、安田と森村とに紹介の労を執ったそうである。同じく成功した実業家であっても、彼等二人は致富の態度が異っているのを、大隈は見ていたのであった。安田家森村家の

当主ではなく、その部下の誰れかに会ったのではないかと、私は推察していたが、どちらにしてもただの形式的会見などで、真相が分るものじゃないと、私は考えて、そんな真似をする気にはなれなかった。「コブシ」や「長者星」は、自然主義勃興後の新聞小説であるが、正統的自然主義とは相容れないで、通俗小説の境地に留まるように見倣されていた。しかし、天外は、硯友社風の遊戯的文学に満足しないで、人生の真相を見んと努力したのであった。「自然は自然である。善でも無い。悪でも無い。美でもない。醜でもない。ただ、或時代の或国の或

人が、自然の一角を捉えて勝手に善悪美醜の名を附けるのだ」と、人生を観じたのは、気宇大なりと云っていいのだが、作品はその人世観に添わないで、自然が自然のままに映っているのではなかった。

私が読売新聞社に入社した当時（明治三十六年）天外の「魔風恋風」が掲載されていた。紅葉の「金色夜叉」以来の読者受けのした小説であった。その年の秋、団十郎が死んだ。紅葉が死んだ。菊五郎の死んだのは、その年の春であり、樗牛の死んだのは前年であった。劇壇も文壇も旧人を送り新人を迎えんとしていた時であった。

島村抱月の洋行はその頃の文壇の一事件であり、私に取っても感銘の深い事件であった。抱月は、早稲田の秀才として世間に知られ、坪内逍遙には甚だ信頼され、股肱（ここう）の臣といった有様であって、その洋行は、早稲田の内部に於ても、全文壇に於ても注目されたのだった。日露戦争前のその頃の日本の経済力の微弱であった事を、抱月の洋行費を思出すにつれて、私はいま回顧している。当時はじめて大学と名乗るようになった早稲田大学に、京都の富人藤原某が、二万円という破格な金額を寄附したのであったが、寄附者の意志に従って、その二万円の利

子を学資にあてて、秀才抱月を洋行させることになったのであった。それで抱月は、学校の命を奉じて京都の寄附者へ御挨拶に行ったのだが、その次手（ついで）に、知人に誘われて、大阪の文楽座を見物した。そして、その感想を、早稲田の少数の同窓だけで催した送別会の席で述べた。「夕霧伊左衛門」を観たと云って、夕霧をあやつった紋十郎を讃美するとともに、昔、伊左衛門に扮して絶妙の誉れのあった京の俳優坂田藤十郎について語った。藤十郎か伊左衛門かと云うように、その役になり切っていた芸の極致を説いた。氏は、洋行直前に、日本の伝統的至醇（しじゅん）

の芸術に心酔していたのであった。「西鶴論」や「近松の芸術及人生」論に於て現わされているように、日本の文学を検討して、その優秀なる芸術美を鑑賞していた氏は、近松と意気投合して古今無類の舞台芸術を創造した藤十郎の姿を、現代の人形芝居「吉田屋」の一段によって、遥かに想望したのであった。氏は、日本芸術を無視し、蔑視して、一図に外国の文学芸術に憧憬して留学の途に就いたのではなかった。

日露戦役前の事であるから、文学者の洋行というと大変な事のように思われ、文壇全体の送別会が紅葉館で催

された。赤門稲門牛門というように、党派別の形を取って、不断小ぜり合いをしていた時代であったのに関わらず、この送別会には、硯友社の紅葉をはじめ、上田敏、登張竹風などの帝大派、天外や独歩なども参会して、文壇全体の珍らしい和やかな会合であった。そして抱月の数年間の欧洲留学中に、樗牛死し、緑雨死し、紅葉死し、戦争は勃発するし、文壇は混沌としていたのであったが、そういう手頼(たよ)りない形勢を見るにつけても、「抱月が帰って来たら何か目ざましい事をやるであろう。西洋から、新しい珍らしいものを背負って来るであろう」と、多く

の人に期待されていた。逍遙は、何か企てようとしても、「島村が帰ってから」と、指折り数えて、彼の帰朝を待受けていたそうだ。「新小説」に寄稿していた「滞欧文壇」には、欧洲の文学消息、演劇消息が伝えられていたが、彼地の名優アーヴィングや、ビヤボンツリーなどの所演の舞台光景を細叙したものは、前例のないもので、殊に面白く読まれた。戦時中、日英同盟のよしみで、英国人が日本に好意を寄せている有様を、筆者自身涙ぐましい思いをして伝えていた。「大きな熊めが、小さな日本を引摺り廻そうとしている。だが、そうさせるものか、

ジョンブルが附いている」と云ったようなロンドンの流行唄が伝えられたりした。しかし、花袋から聞くところによると、藤村は、「島村君は考え方が堅くるしい人だ。それが英国へ行くのだから、ますます堅くるしくなるだろう」という意味の批評をしていたそうだ。これは藤村式の勿体ぶった皮肉であるが、適評であったかも知れない。

兎に角、抱月は、日露戦役の終った時に帰朝した。明治三十八年の九月である。いい時期に帰って来たのだ。私は個人として、また読売新聞記者として横浜の埠頭に氏を迎えた。氏は長い間の海上生活に疲労していて、多

数の出迎え人に話をするのが懶(ものう)いようであった。新聞に出すための帰朝談は聞けそうでなかったので、私は拠(よんどこ)ろなく、汽車の中で耳に触れた雑談を種として、「抱月氏の写真術」という題で、氏が彼地で写真術を学び、技術が甚だ上達しているという事を書いた。「あなたのお留守中、私は何らしませんでした」と、私が云うと、「何故です？」と、氏は訊返(ききかえ)した。「何をしていいか分らないから」と、私は心の中で答えていただけであった。「我等何をなすべきか」を、この聡明な新帰朝者は知っているのであろうと思い、私は帰朝後の氏の作品を読み、

氏の談話を聞こうと心掛けた。

文芸家協会の設立、早稲田文学の復活、抱月の帰朝を機縁として、早稲田は活動しだした。新たな早稲田文学の創刊号には、帰朝後最初の堂々たる長論文「囚われた る文芸」が巻頭に載せられた。西洋文学概要とも云うべきもので、文体は在来の美文調なのだ。私など、はじめから敬意をもって熟読したのであったが、「我等何をなすべきか」について教えられるところはなかった。続いて発表された「ルイ王家の夢の跡」にしても、「沙翁の墓に詣づるの記」にしても、文章からして、すべて旧め

かしい美文調で、新味はなかった。「山恋い」という創作も発表されたが、思いつきが近代小説らしいだけで、読者の胸に迫るような真実味を欠いていた。堅くるしい人が英国へ行って、その気風に感化されて、ますます堅くなったという藤村の批評が考えられた。氏が沙翁を追慕したり、ヴェルサイユの宮殿の建築美に心を奪われたりしている間に、日本の文壇に於て西洋近代の思想に触れて、新しい文学の道に進むような気運が起ったのだから不思議である。氏は西洋で学ぶよりも、日本で学ばねばならなかった。抱月は、「囚われたる文芸」に於て、

欧洲古今の芸術の趨勢（すうせい）を叙したあとで、「時は国興り、国民的自覚生ずるの秋（とき）なり。東西洋の感情には、根柢に於て、到底容易に混ずべからざるの相違あり。この感情の発揮たる文芸は、さればまた、東西別彩として存するも当然の事ならずや。文芸若し終には世界に統一せらるべしと云わば、それにても可ならん。只その前に当って、先ず十分に自家を発展せしめんと要するなり」と附記しているが、文芸が世界的に統一されるとか、東洋には東洋の文芸が起るべきだとかいうような、空漠たる議論は、当時青年であった私などには、何の刺戟も与えなかった

のである。

抱月は元来温和な人で、学生に対する態度も穏かであったが、闘志は可なり強かった。我党の勝利というような事もおりおり口にしていた。同級で相携えて文壇に出た後藤宙外が、硯友社に接近し、紅葉の門に出入するようになったのとは、処世態度が異っていた。抱月宙外の二氏は、私などの先輩で、早稲田出身中の最初の文壇人であったが、その述作のうちで、最も明らかに私の記憶に印象を留めているのは、抱月の「文士無妻論」と、宙外の「田園生活論」である。妻子のための生活の悩みを、

抱月は早くから体験していたのであった。宙外も都会より田舎の方が生活費の嵩張(かさば)らないことを、所論の眼目にしていたのであった。両者とも筆者の実感に基く所論だから、読者の同感を呼ぶのであった。当時の文学者という文学者は大抵貧乏であったのだ。抱月が帰朝後、住宅を薬王寺前に新築したので、西洋帰りで有名になったから、金が儲かったのかと思っていると、それは、友人の銀行員の世話で、銀行から建築費を借金したのだと聞かされた。貧乏苦と云う事も、その人を自然主義に共鳴させる動機になるようであった。帰朝直後には元気であっ

た彼も、家庭が面白くなかったのか、学校の講義に気乗りがしなかったのか、倦怠感に襲われていたらしかった。対談しているうちにも欠伸(あくび)をよく洩らすようになった。貧乏苦とともに、人生に対して欠伸をすることも、その人を自然主義に共鳴させる動機になるのであった。

それで、抱月は門下の片上伸相馬御風などと共に、早稲田文学をひっ提げて、花袋天渓或は藤村等の自然主義運動に参加し、自然主義に理論付けることに努力したのであった。博文館発行の「太陽」の編輯者たる長谷川天渓は、早稲田出身の論客であったが、抱月に取っては、

花袋や藤村とは融和し得ないところがあった筈だ。彼等は抱月の真価を認めていないであろうと、私は推察していた。「破戒」が出た時には、早稲田文学は、同人を挙(こぞ)って推讃につとめた。「蒲団」をも好意を以って迎えた。藤村の異色のある短篇の「壁」に対しても、抱月が讃辞を呈したのであったが、藤村はその批評を喜ばなかった。抱月はそれを聞いて、「だって、褒めたのだからいいじゃないか」と云ったそうだ。それを、誰れかがまた藤村に伝えたのだが、すると、藤村は、「人のものを褒めさえすればいいという量見だからいけない」と云ったそうだ。

坪内逍遙系統の早稲田派は、あの頃の新進気鋭の青年文学者にはあき足らぬ思いをされていた。私が学生時代に或同級生に伴われて、田山花袋を牛込喜久井町の新家庭に訪問したことがあったが、その時、国木田独歩が来合せた。花袋も独歩もまだ不遇の文学青年であった。それで盛んに文学談が出たのだが、二人とも、早稲田の学風、坪内逍遙の文学態度に反対した。ことに独歩は、眉を挙げ、唇を尖らせ、談論風発の勢いなので、はじめて会った私などは気押されてしまった。早稲田の記実主義は、凡庸無力に安んずるのだからいけないと云うのだ。

「詩人や小説家を理解するには、その作品だけでなく、その実生活を知らなければならぬ。彼等の伝記を予め読む必要があると、坪内先生が云っていた」と、私などが云うと、独歩花袋は口を揃えて、「そう云う必要はない」と云う。「世が落着いて豊かな平和時代にならなければ、傑(すぐ)れた詩や戯曲は現われない」と、早稲田の教室で聴かされた事を話すと、「そんなことはない。英国でも、国家が繁栄した時代のテニソンなんかよりは、まだ混沌としていた十九世紀初期のワーズワースやシェレー、キーツの詩が傑れている」と、独歩は反駁した。彼も早稲田

に学んでいたのだが、常識的学風を嫌って、死生の問題に心を潜(ひそ)めていた話などした。私は、この時はじめて会った独歩については、威勢のいい駄弁家だと感じただけであった。

花袋独歩の対早稲田観に次いで、思出されるのは藤村の言葉である。後年、私が大磯に転居する前、東京で空家捜しをしていた時、通り掛りの足休めに、飯倉片町の藤村宅に立寄ったことがあったが、その時は氏も暇であったのか、人懐しかったのか、私を誘って、近所の鰻屋大和田へ行って、午餐を饗応した上、数時間の閑談に耽

った。氏と二人きりでしみじみ話を取かわしたのは、この時だけである。借家話をすると、「それなら家を新築したらどうだ？」と云って、「今、飯倉に手頃な空地があって、知合いの大工がその空地に家を建てるように私に勧めている。しかし、私は自分の家を持ちたいとは思っていない。あなたがお建てになっちゃどうです？」と勧めたりした。当時の私には、新築の意志もなかったし、資力もなかった。それは、余談であって、ここに転載する必要な言葉は、彼藤村の一言の人物評である。

「私は坪内さんは、いい意味の通俗作家だと思います。

極くいい意味の」と、藤村は持前のおだやかな口調で云ったのであった。私は謹聴しただけで同意不同意を口にしなかった。岩野泡鳴は、逍遙も鷗外も漱石も二流作家であると、自己流に断定していたが、泡鳴の荒っぽい大言壮語は珍らしくなく、無邪気なところもあって、笑って聞いていられた。しかし、藤村の批判は、私などの耳に重々しく響くのであった。花袋でも独歩でも、鷗外には重きを置いて、逍遙を稍々（やや）軽視していた。芥川の遺稿のうちに、「憐われむべし老桜痴、更に憐われむべし、老逍遙」といったような感想句があったのも、私の心に

留っている。此等文壇の知識人の所感が正鵠（せいこく）を獲ているのであるか。私は必しもそうは思わない。紅葉より露伴、逍遙より鷗外という知識人の間の定説に私は必しも同感し得ないのである。

「没理想説」に関しての鷗外逍遙の論争は、明治文学史に特記すべき、文壇最初の論争であって、今回顧しても、甚だ興味があるのである。明治二十四年十月の早稲田文学創刊号に逍遙が「マクベス」の評釈を掲げるについて、自己の沙翁観を述べ、「シェークスピアは、殆んど万般の理想を容れて余りある大詩人であり、見るものによっ

て、その相を異にし、その味いを異にする自然そのもの、造化そのものの如きおもむきがあり、言葉を換えて云うと、シェークスピアの偉大なる所以（ゆえん）は、所謂（理想の見えざるところ）すなわち、（没理想）であるところにある」と云い、「没理想の詩の無限の興味は、実にその度量の大洋の如き所にあるなり」と云い、また、「祇園精舎の鐘の声、浮屠（ふと）氏は聞きて寂滅為楽（じゃくめついらく）の響なりといえども、待宵には情人が何と聞くらん。沙羅双樹の花の色、厭世家の目には、諸行無常の形とも見ゆらんが、愁いを知らぬ乙女は、如何さまに眺むらん。要するに造化の本

意は人未だこれを知らず、唯己に愁いの心ありて秋の哀れを知り、己に其の心楽しくして春の花鳥を楽しと見るのみ。造化の本体は無心たるべし。さて、シェークスピアの傑作は、頗(すこぶ)る此の造化に似たり」と云っている。これに対して、鷗外は「この世界はひとり実であるばかりでなく、また想のみちみちたるものである。よく理性界を見、無意識界を見るとき、そこには先天の理想がある。例えば、孔雀の羽のいろいろは、その根から受ける養いが同じなのに、色彩の変化は一本ごとに殊(こと)なって居り、その相殊なる色彩が合して、渾身の紋理をなすのが、

先天の理想の然らしめるところであると云うが如きである。又ここに鐘の音を聞くと仮定せよ。それは人に依って無常とも聞え、楽しとも聞える。しかし、その声の美に感ずるは一つである。又ここに花の色を見ると仮定せよ。それも人に依って悲しくも見え、めでたくも眺められる。しかしその色の美に感ずるは一つである」と云い、更に一歩進めて、「この声この色をまことに美なりとは、耳ありて能く聞くために感ずるにあらず、目ありて能く視るために感ずるにあらず、先天の理想はこの時暗中より躍り出でて、此声美なり、この色美なりと叫ぶなり、

これ感納性の上の理想にあらずや」と云っている。先天の理想が無意識界から躍り出ることなんか云って、幼稚な当時の読者文壇人を煙に巻いたのであったが、それは、その頃の独逸の学界に幅を利かせていたハルトマンの無意識哲学に若い心を動かされた鷗外が、その哲学を借りて来て、気取った議論を立てて、ひとりひそかに面白がっていたのであろう。英国の十八世紀文学ぐらいによって西洋の文壇を伺っていた逍遙の及び難いところであった。

しかし、小理想のうようよと出没していた明治二十年

代のあの頃、没理想の大を説いたのは面白い。逍遙は、常識的であり通俗的でもあったが、案外直観の傑れた人であったと思う。「小説神髄」の所説にしても、「没理想論」にしても、甚だ不徹底であるが、物の真相に触れんとしたところがあった。記実を志し、有るがままに物を視んとした態度は、後年の自然主義と相通ずるところがあった。鷗外が十九世紀末期の思想や文学に接触したように、逍遙が早くから欧洲の近代文学に接触していたなら、自然主義系統の文学に身を入れていたかも知れなかったのだ。談理派の鷗外は後年、自然派作家の影響を

受けて、多くの記実的作品を製作し、逍遙はむしろ談理風の作品を続出した。

後年の逍遙は、かつての樗牛一派のニーチェ主義をにがにがしく思ったと同様に、抱月はじめ早稲田一門の自然派讃美を不快に思ったかも知れなかったが、早稲田出身の青年文学者が自然主義に迎合するようになったのも、逍遙の「小説神髄」「没理想論」以来の、自然の経路を取ったようなものだ。「坪内逍遙には叛逆性がなかった。叛逆性のない所に真の芸術はない」と云ったものがあった。そこが通俗作家たる所以であると云われそう

だ。しかし、逍遙は旧文学に反抗して、「小説神髄」などを書いたのだ。当代の演劇に反抗して、文芸協会の演劇事業に努力されたのではないか。大久保余丁町の坪内邸には踊り舞台が設けられていて、毎日三味線の音や、踊りの足拍子が近隣に聞えていた。無論遊戯三昧ではなく、新舞踊新演劇を建設するための、真面目な研究であったのだ。しかるに近所の陸軍少将某は、それを文学者の遊蕩的所行のように見倣(みな)して、つねに非難していたそうだ。それで「反逆」とは、そういう単純な芸術方面の意味ではなく、時代の道徳宗教、或は政治問題社会問題

などに関して云うので、逍遙はそこに何等の反逆精神を持っていなかったと、非難者は云うのかも知れないが、しかし、そういう意味の反逆精神を発揮した文学者は明治時代にあったであろうか。明治以前にあったであろうか。鷗外漱石紅葉露伴に無かった如く、西鶴にも芭蕉にも近松にも無かったのである。彼等元禄時代の三傑も、徳川封建政治封建道徳に従順に服従し、圧制の下に何の疑いも抱かず、ニーチェの所謂奴隷道徳に安んじ、家畜の群の一員たるに甘んじていたのではないか。文学に反逆性の乏しかったのは、古来の日本文学の特色なのである。

自然主義には最初から反逆性が含まれていたか。その作家と作品は、日本伝統の文学とは異り、社会に対し国家に対し、多少の反逆性を発揮したのであったか。それを検討するのも興味ある事である。数十年前、私は逍遙邸に伺候した時に、「先生、文学は要するに技巧だけのものではないでしょうか」と訊ねると、「そうさ。二葉亭も先日来た時にそう云っていた」と答えられた。二葉亭は、ラスコルニコツフのように、よく「考える事」をしていたものだ。次ぎから次ぎへと、皆んながかりで、ああも考えこうも考えしても、詰るところは、「人生如

何」を突き留めることは出来ないで、技巧だけで終ったのではあるまいか？

二

詩人島崎藤村が小説を書きだしたのは、彼の芸術観の変遷に由るのであろうが、そればかりではない。実生活を顧慮したためではなかったかと、私は推察している。当時、詩では生活費は得られなかったのであった。新体詩というものは大抵無原稿料で雑誌などに発表されてい

たのだ。青少年の間に心酔者の多かった藤村にしても、作詩によって得る所は極めて僅少であったようだ。彼が新作を「新小説」に寄稿した時、原稿料を請求したら、その発行所春陽堂で異様に感じたらしく、例外の事件として来訪者に噂したそうだ。それほどに詩は金にならなかったのだ。文士は貧乏と極っていても、小説なら、まだしも生活の資が得られるのであった。小諸義塾の教師として赴任した藤村は、その年結婚し、その翌年長女を生んだと、年譜に記されているが、そうすると、家庭の将来の事が案ぜられたにちがいない。その翌年（明治三

十四年）に、三十歳という而立（じりつ）の年に「旧主人」と題した小説を試作した。これは「新小説」に掲載されたが発売を禁止された。続いてぼつぼつ幾つかの短篇を発表した。小説によって身を立てんとひそかに企てていたのであろう。これ等の作品のうち、「水彩画家」が最も傑れていて、文壇の注意を多少惹いたようであった。

「鷗外さんはこの小説を褒めなければならん筈だ。それを何とも云わないんだからね」と、花袋は、鷗外が後進作家を推薦しないことに対しての不平を、その頃私に向って洩（も）らした。しかし、鷗外は新作家の作品を一々読ん

でいたかどうだか、分ったものじゃない。鷗外に認められるか否かは別問題として、この小説は作品の芸術価値以外に世間で問題視されたのだ。それはモデル問題なので、水彩画家丸山晩霞が藤村に対して強烈なる抗議を述べたことによって事態が明らかにされたのだ。「旧主人」は、藤村の先輩であった「女学雑誌」の主筆巌本善治をモデルにしたと聞いていたが、藤村は小説界に乗出さんとするに当って、はじめから作品にモデルを用いんと心掛けたのであった。それも旧作家の漠然としたモデル使用の態度とは異り、西洋画家がモデルを用いるような事

物に密接した態度を採らんとしたのであった。作品に新味ある所以であった。ところが、「水彩画家」について、晩霞の云う所によると、表面は晩霞らしく読者にも思わせるような叙述描写をしながら、内容は作者たる藤村自身の行動心理を写しているのであった。後日の藤村の傑作「家」のなかに、一つの異彩ある挿話として叙せられている事件――平凡な夫婦生活の寂しさから、芸術的理解ある或女性に対する思慕の情にからんだ事件を、さも水彩画家晩霞の事件らしくして書いているのであった。人をだしに使って自分の事を書いているというのが、晩

霞の憤(いきどお)る所以であった。

藤村のやりそうな事と思われるが、しかし、あの頃は、まだ「私小説」と云ったようなものが発生していなかったので、自分の事をさながらにつけつけと書き立てる決心は、新時代の藤村でもまだなし得なかったのだ。これを思いついて、これを敢てしたのは田山花袋であったのだ。これは後の事だが、藤村はまた「並木」という短篇に於て、友人戸川秋骨と馬場孤蝶を描き、モデルにされた方でもこれに対する感想を述べた。此等の小説はまだ自然主義小説と呼ばれてはいなかったが、作者の意識し

ないうちに、自然主義的作風は起りかかっていたのである。「予は自然主義者なり」と、藤村自身は公言したことはなかったように私は思っている。公言しなかっただけでなく、西洋の自然主義作家と云われている小説家の作風を学び、それに習わんと心掛けたこともなかったのではないかと、私は思っている。無論西洋近代の評論や作品は読んでいて、それ等によって啓発されていたのであろうが、特に自然主義を喜んでいたとは思われない。ただ真実を写さんと志したことから、かかる作品を製作することとなったのであろう。

明治文学史上劃期的の大作「破戒」は、日露戦争中に執筆され、戦後に自費出版されたのであったが、これほど前景気の盛んな小説は、かつてなかったように、私には印象されている。「若菜集」や「落梅集」の作者たる詩人島崎藤村が、信州の山を下って東京の郊外住いして、貧乏生活をしながら長篇小説を書いているという噂に、当時の青年文学者は敬意をもって耳を傾けた。破天荒の作品が出現しそうに予想された。田山花袋は、藤村の新作の狙い所をさまざまに臆測して、羨望に堪えぬような口吻(こうふん)を洩らしていた。自分もこの気運に乗じて何かやら

なければならぬと、心を砕いていたようであった。そして、いよいよこの新作が、「破戒」という魅力ある題目を振り翳(かざ)して市場に出ると、文学的熱意に富んだ文壇人は、争ってこれを読み、互いに是非の批評を下した。「早稲田文学」では、抱月はじめ、社の同人、私なども加わって合評をしたが、誰れもみな讃辞を呈したのであったと、私は記憶している。紅葉門下の花形であって、新時代の空気に触れんと焦慮していた小栗風葉も、早速一本を購って、熟読玩味して首をひねったようであった。この頃読んだ夏目漱石の「書翰集」のなかに、森田草平に

宛てて、「破戒」を激賞しているのを、私は珍しく思った。「普通の小説家のように、人工的な余計な細工をしていない。そして、真面目にすらすら、すたすた書いてある所が頗るよろしい。夫(それ)から気に入ったのは事柄が真面目で、人生と云うものに触れていて、いたずらな脂粉の気がない」と云い、また、「明治の小説として後世に伝うべき名篇也。金色夜叉の如きは、二三十年の後は忘れられて然るべきものなり。明治の代に小説らしき小説が出たとすれば、破戒ならんと思う」と、大変な褒め方をしている。表立った批評でなくって、門弟宛ての私信

でそう云っているのだから、掛引きも遠慮もない純粋性の批評として面白い。まだ自然主義騒ぎが文壇に起らなかった時分であったから、漱石も、党派別に捉われないで、無心にこの新作を鑑賞した訳である。その頃の漱石の作品に新鮮味が豊かであった如く、「破戒」も清新な文学にちがいなかった。日本の新文学はここらからはじまったにちがいなかった。

しかし、この作品は、藤村が天賦の才能をすなおに発揮したものではなかったように、私は今思っている。西洋風の本格的小説であるが、作為に富んだ真実味の乏し

い作品ではなかったか。多くの讃美的批評のなかに、山路愛山は、「この小説にあらわれている或眺めは西洋風だ。信州の光景ではない」と、例を挙げて非難していた。むしろ作者の愚を罵倒していた事を、私は薄々記憶している。藤村は、かねがね千曲川の流域を写生したりして、地方色表現の用意を充分していた筈で、「破戒」に現われている自然描写は旧套（きゅうとう）を脱して、真実と新味を現わしているらしく、私などには思われるが、しかし、作中人物には、人間性が深刻に活現されているようではない。むしろ、花袋の「田舎教師」の方は、平凡人をあたり前

に表現しているに過ぎなくても、実際の人間らしい人間が一層よく現われているのではあるまいか。

長谷川天渓が、あの時すぐに指摘していた如く、「破戒」は、ドストエフスキーの「罪と罰」に類似しているのである。「罪と罰」は、明治二十年代に日本に渡来した近代の欧洲小説のうち、新進文学人の間に特異の印象を留めた特異な作品であって、藤村は自分が取扱わんとする特種の題材を、このロシア小説の刺戟によって斬新強烈に生かさんと試みたのではあるまいか。今までの小説になかったような異様な、しかも深刻らしい場面を表

現せんと思いついたのではあるまいか。しかし、「破戒」と「罪と罰」とは表面に似ているところがあるだけで、本質は似ても似つかぬものである。後になって、日本の自然派文学の「思わせ振り」や「似而非深刻づら」を嫌った漱石が、「破戒」のわざとらしい拵え事染みた小説を一図に推讃する気になったのも変であった。

しかし、「破戒」から進んで行った藤村の文学生涯を、私は今日から回顧してますます面白く思っている。彼藤村は小説は上手でない。思想も深くはない。人柄が必ずしも傑れているとは云えまい。独歩とはすべて反対の、

運鈍根の方の人物である。それに関わらず私は、自分が見て来た過去の文学を思出すと、まず藤村に目が注がれるのである。私は彼の文学を特に好んでいるのではない。彼の文学を特に傑れていると思っているのではない。それに関わらず、私の自然主義文学回顧は、藤村を中心として回転をつづけそうである。

「破戒」の主人公丑松が、板敷の塵埃のなかに額を埋めて許しを乞うようなみじめな自己告白振りは、作者の空想の産物であるが、それは、ラスコルニコツフが、愛人ソーニヤの云った言葉「四つ辻へ行って、みんなにお辞

儀をして、地面に接吻なさい。そして、大きな声で世間の人みんなに、（私は人殺しです）と仰(おっ)しゃい」と云った言葉を思出して、広場の真ん中に膝を突いて、土の面に頭を屈めて、歓喜と幸福を感じながら、その汚い土に接吻したというドストエフスキーの空想振りとは、読者に与える印象が著るしく異っている。そして、藤村は、告白に達するまでの丑松の躊躇煩悶をさまざまに臆測したのであったが、そこには、人間心理の観察の深さも、人生に如何に関する洞察の深さもあったのではない。そして、後年の彼の体験に基く作品「新生」に於てこそ、

懺悔告白の真実感が現わされたのである。その告白振りは、甚だ冴えないのであって、作者の影たる岸本某をして、ドストエフスキー作中の人物にも、トルストイ作中の人物にも成し得なかったのであるが、そこに一箇の人間としての真実性のあることだけは確かであって、「破戒」に散見する作られたる心境描写言行の叙述の及ぶところでない。「新生」の作者ほどの偽善者はないと、芥川は云っていた。「猫かぶり」「偽善者」と、泡鳴はおりおり私などに向って、藤村の罵倒をしていた。しかし、社会問題的小説、人道主義的小説、本格的小説とも云わ

れそうな「破戒」と、猫かぶり小説、偽善的小説、ねちねちした私小説とも云われそうな「新生」と、相並べて、どちらが我々に感銘が深いであろうか。

私は、自然主義幹部のうちでは、藤村とは深く交わらなかった。何時も離れて見過ごしていたようなものだ。しかし、「破戒」から「新生」までの文学史上の藤村には、深き親しみを寄せながらこの稿を続けようと思っている。藤村は、「花袋秋声五十年記念会」に於ける演説のうちに、二氏の文学生涯を艱難（かんなん）な道を辿ったもののように云っていたが、これは彼自身の体験から押して他人

の心境を想像した結果なので、折に触れての彼の感想や、作品のあれやこれやを読んでいると、人生行路の艱難、文学者生活の艱難が絶えずそこに現わされているようである。「艱難の化身」であるようだ。

知人をモデルに使った「水彩画家」、大いに小説的工夫を凝らした長篇「破戒」を、どうにか書きこなした藤村は、あたりまえなら、それ等と同じ経路を辿った長短の新作を次ぎから次ぎへと製作したであろうと想像されるが、文壇の動揺は、沈重な彼の心をも刺戟して、態度を新たならしめるようになった。

数年前「独歩集」が出版されて、それまでは軽視されていた独歩の真価が認められるようになっていたが、それはまだ、自然主義の作品として批評されてはいなかった。私が社に寄贈されたこの短篇集を偶然手にして、興味をもって読み終り、感想を紙上に掲げた時も、小説らしくない、新味ある、気の利いた作品として推讃しただけであった。藤村も、珍しく独歩に関する感想を読売に寄稿したのであったが、それには、独歩の小説には消極的な人間がよく描かれていると批判してあった。これ等の批評は。独歩を文壇に紹介する役を勤めたもののよう

であったが、自然主義には関係がなかった。しかし、「破戒」の出た頃から、誰れ云うとなく自然主義の名が文壇に現われだした。いつ誰れが最初の発言者であったか、私も知らないのであるが、これは時代の声であったのだろう。天に口無し、人をして云わしむると云ってもいいのであろう。自然主義的人生観自然主義的表現法がちらほら唱えられるようになった。そうしているうちに、田山花袋がその主義を提げて、熱烈に唱道するようになり、それに同意し、それに雷同して、口にし、筆にするものが続出した。こんな急速に、力つよく文壇を席捲(せっけん)したも

のは、今までに無かったのであった。藤村と雖(いえど)も、それに感化されたのだ。かねて漠然考えていた文学観に生気が与えられたのだ。かねて暗中摸索していたものを見つけたようであったのだ。それで、「破戒」後の長篇「春」は面目を一新した形で現われたのであった。

その頃の二三年は、すさまじい自然主義勃興時代であった。花袋の「蒲団」がこの時代の代表的作品として史上に残ることになったのだが、これは自然主義のためには賀すべき事ではなかった。詩は云うまでもなく、小説でも戯曲でも、新気運の萌した時の代表作には、何時に

なっても人の心をときめかすような魅力があるものだが、「蒲団」には、その対人生態度や創作態度に劃期的のものがあったに関わらず、作品そのものは甚だしくお粗末なのだ。今思うと、こんなものをとさげすまれるが、しかし、あの時代にこういう暴露小説を敢然として書いたのは、馬鹿正直の花袋であったればこそだ。「破戒」と「蒲団」との、自然主義初期の二つの代表作発表後の世評を回顧すると、甚だ面白い。妻子を犠牲にして作り上げたような作品、社会的に意味ある題材を取扱った作品として、敬意を寄せた批評と、好感を持たれたり面白

がられたりするとともに、嗤(わら)われたり馬鹿にされたりする批評と、両者に対する批評は甚だ趣きを異にしていた。私は田村松魚に聞いたのだが、彼が米国で苦学していた時分、「蒲団」の掲載されている「新小説」を読んだ友人が、二階から笑いころげて下りて来て、「オイ見ろ、田山がこんな馬鹿なことを書いてる」と云って、雑誌を突きつけたそうだ。異郷で故国のこんな小説を読んだら、左様に感ぜられたであろうと想像される。日本に於ても、若しこれを死せる紅葉が読んだなら、或は生ける露伴が読んだなら、嘲笑冷罵したかも知れなかった。数年前に

発表されていたら、一般の文壇がさして問題にしなかったかも知れなかった。しかし、日露戦役後のあの頃は、心ある者は自我に目醒めんとしていたのだ。「汝自身を知れ」という、ギリシアのデルフォイの神殿の教訓を真面目に服膺(ふくよう)せんとした知識人も多くなったのである。それで「蒲団」に現わされている気持に一概に笑えなくって、むしろ共鳴を覚えたのであろう。家庭生活に倦怠を覚え頻りに欠伸を洩らしていた抱月の如きも、花袋などの所論や作品に於て自己の心の影を見つけたのであって、進んでこの自然主義を哲学的道徳的或は審美的理論

で裏付けることに努力した。そして理論を押詰めて行った揚句に、「現下の私は一定の人生観論を立てるに堪えない。今はむしろ疑惑不定の有りのままを懺悔するに適している。そこまでが真実であって、その先は造り物になる恐れがある。而してこの私を標準にして世間を見渡すと、世間の人生観を論ずる人々も、皆私と似たり寄ったりの辺にいるのではないかと猜(さい)せられる。若しそうなら、世を挙げて懺悔の時代になるかも知れぬ。虚偽を去り矯飾(きょうしょく)を忘れて、痛切に自家の現状を見よ。見て而してこれを真摯に告白せよ。これ以上適当な題言は今の世

に無いのではないか。この意味で今は懺悔の時代である。或は人間は永久に亘って懺悔の時代以上に超越するを得ないものかも知れぬ」と、感慨を洩らしている。これ等の感想は、沙翁の故郷訪問記やヴェルサイユ宮殿礼讃録などに優って、筆者の心裡の声として、我々には感銘が深いのである。後年の抱月の行動は、こういうところから発生したのであろう。

長谷川天渓の自然主義論は、旧套を打破して人生の真実を見詰めんとする意気盛んで、当時の評論中で異彩を放っていたのであったが、それ等の論文は今日埋没され

ていて、私はそれを読みたいと思いながら、書物が手に入らないのである。「幻滅時代の芸術」「論理的遊戯を排す」「現実暴露の悲哀」など、当時は賛否さまざまであったが、重要な問題になったのであった。幻滅とか現実暴露とかいう流行語は、天渓などによって流布されたのであった。そして、わが自然主義もいよいよ堂に入ったのであった。花袋も「露骨なる描写」を唱え、文章の上の技巧を排し、有りのままの描写を試みんとしたのであった。天渓は常識人で、人生に幻滅を感じたり、現実暴露に悩んだりする人らしく思われなかったが、博文館

編輯局内の同僚として、花袋に接近していたためにそういう気持になったのか。私の作品に虚無主義というレッテルをつけたのも天渓であった。

平家にあらざれば人に非ずと云ったように、自然主義にあらざれば文学に非ずと云ったような時代が文壇に出現した。雑多紛々の文壇人が自然主義派に加入せんとしたのであった。しかし、一般世間からはひどく攻撃されたものだ。擯斥（ひんせき）されたものだ。以前ニーチェ主義が遊蕩主義であるように誤解されていたように、自然主義も、低調卑俗のものと見做されていた。上田敏が京都の大学

の教室で、「文学は不良少年の手に落ちました」と云って歎息したことを、菊池寛が、学生時代の追懐文章のなかに書いていた。芸術至上主義者の上田がそう感じるのも当然であり、在野の哲学者田中王堂が、「我国に於ける自然主義を論ず」と題する長論文を発表して、この主義の誤謬を正そうとしたのは、とに角堂々たる態度であったが、花袋をはじめ自然派文人に対する人身攻撃なども、盛んにあちらこちらの雑誌に現われていた。盛名ある人間や団体が世人に嫉視され、悪声を放たれるのは有りがちの事であるが、私が回顧して興味を覚えるのは、

あの頃の官学の学者的態度である。田中王堂に対しても、「なぜ、あんな人間を相手に議論するのだ」と、忠告した大学教授もあったそうだ。あんな人間とは、田山岩野のような、学位も有(も)たず大した学歴もない人間を指して云ったのだ。自然主義なんか、下等な文学者の信奉することと、学者的人物には思われていた。そればかりではない、学者的人物が多少好意でもあるらしい態度を見せると、それを特に喜ぶらしいのが、文学者通有の傾向であったことを、私は自分の目で見、耳で聞き、心で感じていたのである。「鷗外さんは中将相当官だそうだ」

と、敬意をもって、そのために鷗外さんの偉さが一層光をましたように噂していたのが、「幻滅」の自然主義者であったり、「現実暴露」の青年文学者であったりした。そういう事も、自然主義文学者が現実の人生として凝視しなければならぬ事なのだ。

これは少し後の事だが、次手(ついで)に書いて置こうと思う。幸徳事件のあとで、人心を緩和するために、「済生会」というものが出来たのだが、それと同時に、「文芸審査会」というものが設立された。桂内閣時代で、その時には平田東助が内務大臣であり、小松原英太郎が文部大臣

であった。与謝野晶子をして、「東助や英太郎は文学を知らず、あわれなるかな」と云ったような和歌を作らせたほどの、平田や小松原が権勢を揮っていた時に、為政者が文芸興隆を企てるのは、甚だ不似合なように世間では思って我々も不思議な感じに打たれたのであった。鷗外抱月をはじめ、新聞社内の文学関係者、塚原渋柿園（しぶしえん）、伊原青々園など十数人が審査員に任命されていた。新進作家の傑出した作品に賞金を与えるとか、有能の青年を洋行させるとか、いろいろな計画が提出されたが、どれも実行されなかった。抱月は、この会を意義ある者とす

べく努力したらしく、時々の会合の消息を私などに洩したこともあったが、つまり彼の進歩的の意見などは通用しなかったのであった。それで、最初の年では、坪内逍遙の「ハムレット」の翻訳に賞金を贈るだけの事が決定した。逍遙は、自分の自由にその賞金を使用し得るという条件の下に受賞を承諾し、与えられた千円あまりの金を、二葉亭独歩などの遺族に分配したのであった。そして、二三年続いたこの会の業績は、ダンテ、ゲーテ、シェークスピア、セルヴァンテスなどの西洋古典の翻訳をすることだけに留まったのだ。掛け声ほどでなく、日本

現在の文学に何等貢献するところなかったのであった。それは当り前なので、政府の意図は現在の作家を引立てる事でなくって、むしろ取締ることであったのだ。自然主義文学なんて、日本古来の国風に背いた、けしからん小説が流行しているのだから、これを監視しこれを弾圧しなければならんと思っていたのだ。文学奨励の仮面を被って、新興の文学の進路を阻止せんとしたようなものだ。それで撰ばれた審査員の多数は、政府と心を同うするような旧思想の人々であった。政府が文学に対して誠意ある態度を執って、その進歩を計ることなどは、有り

得べからざる事なので、そう思った者は世事にうとく、人間心理の観察があまかったのである。

花袋は「蒲団」によって意外な人気を得、急に新時代の先頭に立った作家のようになり、今までの懐疑逡巡の態度とはちがって、自信をもって、続々新作を発表した。自分の行動や心境、身辺の人と事件とを、有りのままに描写しだしたのだ。最初の新聞小説「生」は読売新聞に連載された。自分を取巻いた身内の事を書いたのであった。「生」と前後して、藤村も、最初の新聞小説「春」を朝日に寄稿したのであったが、藤村も、自分の生涯を

小説の形で現わすという作風の第一歩を踏みだしたのであった。こういう創作態度は、その後の多数の作家の常套手段となったので、今では陳腐平凡になっているが、花袋藤村があの時見本を示したようなもので、「生」も「春」もその点で、文学史上に特記すべきものである。どちらも新聞の読者には受けなかったにちがいない。若い小説家の身の上話なんか一般の読者に面白い筈はない。興味をもって読んだのは文学青年くらいであった。

どちらが面白いかという事が、我々の間によく噂された。夏目漱石は、「生」を評して、「満谷国四郎君の油

絵のようだ」と云ったそうだ。薄汚いという意味なのか。花袋のものには、スッキリしたところも、高雅なところもない。私は小山内に向って、「どちらが面白いか」と訊いたが、彼は「それは春だ」と答えた。「春」だって面白くはない筈だが、詩人藤村に対する多年の尊敬心から、この作家のものなら何でも愛読するようなくせがついていたのであろう。「春」のはじめの方は、ツルゲーネフの「処女地」に倣(なら)った書き方であった。いろいろな青年が会談するところからはじめられていた。

私は、「春」執筆中の藤村が代々木の花袋邸を訪問し

ていた時にそこに居合せたので、二人の製作苦心談を聞取ることが出来た。花袋が他人を書くことの困難を語ると、藤村は、「いや自分の事を書くのは他人を書くよりも六ケしいようです」と述べた。彼は現在「春」のために、悩まされていたので、そう感じたのかも知れなかったが、傍聴者の私は、他人の事を書くのが、自分の事を書くよりもたやすい訳は無いとひそかに思っていた。自分の事を書くのがたやすいという気持、こういうイージーゴーイングの気持が「蒲団」以来若い作家の心に起ったのは、文学のために喜ぶべきことか、悲しむべきこと

か。自分のした事を、何でも、臆面なく書けば、それが新時代の小説であると思うのは浅はかな文学観であるにちがいないが、しかし、こういう浅はかな文学観が起らなかったら、近松秋江の面白い小説も、岩野泡鳴の面白い小説も出なかったにちがいない。彼等に傍若無人の創作熱意があったにしても、田山花袋が敢然として、衆人環視のうちで自己の行動と心理を暴露した、「蒲団」の如き作品を世に示さなかったら、彼等の作品がああいう形を取っては現われなかったにちがいない。「田山が範を示したから、君なんかも随(つ)いて行ったのだろう」と、

私は一度泡鳴に訊き糺したが、泡鳴も、「それはそうだ」と、首肯した。

自然主義幹部のうちでも、花袋が最も平凡人であったのだ。その平凡人が文壇に新しい作風を提出して、続々と模倣者が現われるようになったのは、私には興味の多い事なのである。今度「生」「妻」「縁」の三部作をところどころ読んで、この平凡な人生記録の小説の面白さを新たに感じた。あの頃の世の有様がおのずからそこに現われているだけでも面白い。文学青年的感想、勤め先での苦労、新家庭の楽しみと悩み、それ等が極めて有振

れた、凡庸な事件であるのだが、それが本当の人生なのだから、今日の翫賞(がんしょう)にも堪えられるのである。

ところが、今度これらの小説を読みながら、新たに感じたのは、モデル問題である。藤村は早くからモデル問題で累(わずら)わされていたが、花袋となると、自分の生活を有るがままに描くにつれて、自然に、妻子兄弟友人などをも、有るがままに描かねばならなくなった。自分の事周囲の事を題材とした作品は、どの国のどの時代の文壇にもあったに違いないが、それは異例であり、且つ取扱いぶりが小説化され、作り物語化されていたのであった。

ところが、花袋などは、自己とその周囲を題材としてそのままに描くことが、小説の常道であると確信して筆を採るのだから、書かれる方ではたまらない訳だ。容易ならぬ習慣が文壇に構成された訳で、これは世界古今東西の文学史上特種の習慣なのだ。それを花袋藤村以後の日本の文壇人は気にしないで、それが小説作法の常例の如く見倣して、誰れも怪しまず今日に至っている。「生」や「妻」を読んでも、そこに肉身のことが細かに如実に描かれているのみならず、柳田国男、国木田独歩、太田玉茗（ぎょくめい）にちがいない、主人公の知友が、有るがままに描

きだされている。知名人が作中に出ているから、我々には一層面白く読まれるのだが、書かれる方では多少の不快を感ずるのではあるまいか。「蒲団」のなかの若い男女などは随分迷惑したにちがいない。作家は周囲の者に迷惑させることなんか顧慮しないでいいのであろうか。他人の思惑を顧慮するようでは、真に徹した文学は産出されないと云われるかも知れないが、自分が作家の作中に取入れられて、その作家の好みのままに書かれることを想像して見るといい。花袋は周囲の人々を悪しざまに書くことはなく、好意を以て描いているのだが、それで

も、柳田国男は或宴会の席で、花袋に向って激烈に不平を洩らしたのを、私は聞いて、その気持に同感したのであった。よく書かれるとか、悪く書かれるとか云うよりも、たびたび作中に取入れられて、大役か端役かを勤めさされるのは小うるさく思われるだろうと推察された。「自然主義の力は偉なるかな」「田山花袋の力は偉なるかな」田山花袋なかりせば、「蒲団」のような作品が現われざりせば、自分の性慾行為なんかをあけすけと書放した純文学作品が、綿々と絶ゆることなく、末長く文壇に出現することはないであろうし、周囲の人間を無遠慮

に材料とすることはなかったであろう。誰れかをモデルにすると云っても、花袋藤村のモデル使用ぶりは漱石などとは甚だしく異っていた。「吾輩は猫である」のなかには、作者の多くの知人がモデルに使われているのだそうだが、それと、「生」や「春」に於けるモデル使用ぶりとは著るしく異っているようだ。現実に徹せんとする態度と、芸術化せんとする態度との相違である。自然主義側から、漱石文学を「遊び」として非難したのも、そういう相違に基くのだ。しかし、いずれが芸術の正道であるかは別として、花袋系統の文学によって、人間の真

実が明らかにされるようになり、人間の仮面が剥ぎ取られて真相が次第に分るようになったのは事実である。

乗りかかった舟である。藤村も花袋も、「春」や「生」から踏み出した道を進んだ。自然主義初期の三尊の一人であった国木田独歩は、この派の幹部に推されたのを、自分では腑に落ちないような顔していた。実際彼は他の二人とは作風が全く異っていた。花袋流の有るがままの描写法なんかに影響されず、独自の道を進んだ。彼は自然主義と云っても、ワーズワースの感化影響を受けた程度の自然主義者であった。「悠久にして不思議なる、生

死を吐呑する此大宇宙、爾が如何にもがき飛出さんとするも能わざる此大自然、事実中の大事実、当面の真現象については何等の感想をも懐かない文人が、如何に巧みに人間の事実を直写したからとて、それは一芸当たるに過ぎない。かくて文芸何の値いぞ、所謂自然主義何の値いぞ」と、自己の文芸観を述べている。片上伸の評している如く、独歩は一種の運命論者であり、神秘主義者であり、而してまた同時に物質的機械的世界観の圧迫を感じていた人であった。

彼は正統的自然主義者ではなく、文壇に及ぼした感化

も藤村花袋のようではなかった。

三

「早稲田文学」と「文章世界」には、自然主義推讃の評論や感想随筆が毎号掲載されていて、この派の機関誌のように見倣されていた。読売の月曜附録号もそれ等と同種類のものと思われていた。「早稲田文学」は、抱月主宰の下に、相馬御風片上伸中村星湖などが、自然主義を奉じて活躍したのであった。「文章世界」は、博文館が

あり振れた投書雑誌として刊行したものであったが、主任の田山花袋が、それを普通の文章雑誌として編輯するに飽足りないで、時代の潮に乗って新味ある文学雑誌にしたのであった。「卓上語」とか「インキ壺」といったような題目の下で、人生と文学に関するその時々の感想を率直に述べていた。これは抱月の評論のような理路整然たるものではなかったが、あの頃での新味ある感想として面白く読まれた。欧洲近代文学の影響がそこによく見られたが、桂園派の和歌に共鳴しているようなところもあった。素直に有るがままの心を歌った熊谷直好の和

歌などを愛好しているのであった。藤村が芭蕉などに影響されたのと似ている。近松や西鶴、坂田藤十郎の芸術を讃美していた抱月と云い、日本自然主義の首領達は、西洋近代の文学や思想に感化されたにしても、心の底には日本芸術の伝統を宿していたのであった。鷗外漱石二葉亭などの心魂に武士道の影が濃厚に残っていたのと同様である。

私は自分の編輯していた読売の文芸附録号に於て、自然主義を鼓吹しようとは毛頭思っていなかった。秋江の「文壇無駄話」が毎週掲載され、泡鳴の評論も大抵毎

週この紙上で発表されていたが、私は彼等の所説に感心していた訳ではなかった。ただ惰力で、飽きもせずに、彼等の持って来る原稿を採用しただけであった。雷同的に自然主義を讃美した論文も、穴埋めによく用いた。「文章世界」や「早稲田文学」は、まだしも原稿料をよく払っていたのであろうが、読売では毎週二ページ大の文芸附録号の原稿料が一ケ月僅かに三十五円くらいに規定されていた。（今考えると、あまりに少いので、或は一週間分ではなかったかと、記憶違いにしかけたが、考え直して見ると、やはり一ケ月がそれだけであったのだ）私

はいつも規定を破って、多少、多額の支払いをしていたとは云え、そんな事でろくな原稿が集まるものではなかった。過半は投書の無代原稿でページをふさいでいた有様であった。それに関わらず、あの頃の読売の文芸面は文壇に勢力があったようだから不思議だ。そしてあの頃の私は、抱月や花袋のように自然主義論をしたことはなかった。自然主義とは何ぞやが、まだ私には分っていなかった。

花袋は、その頃新年小説を一通り読んだ後の感想として云っている。「痛切に感じたことは、矢張り想像は駄

目だと云うことである。想像で書いた作品に、権威のある、心から人を動かすような力を持っているものは一つもなかった。想像で書いた作品のうちにも、此処がちょっと光っていると思うと、それは想像で書いたところでないのが直ぐ知れた。矢張りナチュラリズムもそうした突詰(つきつ)めたところまで行っている」また「私達はその突詰めたところから新しい泉の滾々(こんこん)と湧き出して来るのを知っている。想像でない真実、いかに貧しい真実でも、それを書くということが、むしろそれを書き得る気分になり得たということが、新しい泉の湧き出して来る源であ

るということだけは確かだ」

この想像を蔑視し、瑣末な真実でも、それが真実であるが故に尊重すると云うのは、花袋式の自然主義文学態度であって、その説をそのままに受入れた青年作家が、凡庸無気力な日常生活小説を書くような癖がついたのであった。これに反して、独歩は、早くから「不思議なる宇宙を驚きたい」とか、「死という事実に驚きたい」とか、そういう感激的な驚きから、真正な文学が出現するように思っていたらしい。凡人型と天才型との相違があった。しかし、独歩は花袋ほどに文壇に影響を及ぼさな

かった。ところで、独歩が自然主義作家の仲間入りをするにいたったのは、花袋と親交があったためではなかったかと私は思っている。独歩が若し漱石と親しかったら、寺田寅彦などと同じく、あの団体の一人となって、自然派以外の作家として、批評家や文学史家に取りあつかわれていたかも知れなかった。文学の党派は政党とはちがって、自分から進んで加入するのではなく、傍から何とか云って党派区別をすることが多くて、必ずしも本質に拠(もとづ)くのではないのである。

自然主義作家の素質を備え、また新時代的勢力のある

その党派の仲間入りを望みながら、達せられなかった作家は小栗風葉であった。私は、この作家の作品や文学的地位や生活振りを、かねて面白いと思っていた。彼は紅葉門下のうちでは師の衣鉢（いはつ）を襲（つ）いだ技巧家であって、早くから新進作家として認められていた。「亀甲鶴（きつこうづる）」とか、「恋慕流し」とか、趣向を凝らした小説らしい小説を続々と発表していたが、この作者は、時代の風潮におくれざらんとする心掛けもあって、高山樗牛などの宣伝したニーチェの本能満足説を、世間同様浅はかに解釈して、「さめたる女」「覚醒」など、その頃の知識階級の悩み見た

いなものを書いたりしていた。自然主義勃興期となると、この派の新文学と調子を合すように努め、長篇「青春」をはじめ、「ぐうたら女」「世間師」「耽溺」などを発表した。彼は、馬場孤蝶などの外国文学通によって、新時代の文学知識を獲得せんとしていたそうだ。紅葉の指導によって鍛え上げた技巧を持って新しい作品を製作するのだから、鬼に金棒の訳であったが、思わしい効果を挙げ得なかった。古くさい殻がついているようで新しいものになり切れなかった。「独歩集」が出たり、「破戒」が出たりして文壇に新気運の起りかけた頃、「中央公論」

の名編輯者であった滝田樗蔭は、今の小説では風葉と天外の作品がいいと力説していた。技巧がすぐれていると云うのだ。「破戒の文章はまずいですな。書出しの蓮華寺は下宿を兼ねたなんて、成っていないですよ」と、さげすむように云った。しかし、「破戒」の文章は、旧技巧家から見て成っていないほどにまずいところに新味があったのであろう。風葉の「世間師」を今度改めて読んで見たが、これは自然主義的作品で、これを花袋の作品中に入れたなら傑作の部に属するのである。「耽溺」執筆後、風葉は郷里に隠退したのであったが、それはどう

いう心境であったのか、作品のうちにそれを現わさないから分らなかった。天外にしても風葉にしても、新しい方へ向わんと努めながら、目的を達し得ず、作品が時代的に冴えなかったのは、自己の行動や心境を有りのままに叙述しなかったためではなかったか。日本の自然主義は自分の事をアケスケと書くことで、そこに新しい生命の活躍があったのである。風葉は同門の秋声のように現実の自己を如実に現わし得なかった。努めずして自然主義の大家となった秋声と、努力しながら新時代の大家に成り切れなかった風葉とを比較すると面白い。風葉の「耽

溺」は、泡鳴の「耽溺」と同時に発表されて比較批評されたが、前者が旧時代の耽溺で、後者が新時代の耽溺であると、文壇で噂された。風葉が新開地の早稲田鶴巻町で酒色に耽溺するのが旧式で、泡鳴が日光の曖昧屋で耽溺するのが新式というのは可笑しいと、私など思っていた。自覚があるとか、反省力が動いているとかの点で相違しているのか。兎に角風葉のは自然主義の作品とは見做されず、泡鳴のは、彼の最初の小説であるに関わらず、生気潑剌たる新時代風の作品として推賞された。泡鳴は独創を志す思想家であり文学者であったが、この小説は、

花袋の「蒲団」などに刺戟され、「おれも自分のした事を、むき出しに書いて見よう」と思って、筆を執ったのにちがいなかった。同じく詩人から小説家に転換したにしても、藤村のように重々しく勿体ぶった態度は彼には見られなかった。最初の小説に「耽溺」というような殺風景な題を無雑作につけるのは、藤村とちがった気取らない彼の態度を示しているが、この態度は後年まで変らなかった。この「耽溺」という言葉は、自然主義時代に現われた流行語であった。その以前には、樗牛の唱えた「美的生活」あるいは「ニーチェ主義」という言葉が卑

俗に曲解されて、流行していたが、それ等の系統を追うて露骨になったのが、「耽溺」という用語であって、自然主義は、酒色耽溺主義であるように、世人に曲解されていた。文壇外の世人がそう思うばかりでなく、文壇内部の人々でも、自然派以外の文学者は、自然主義者を特別に放縦で不品行であるように見做していた。反自然主義を標榜（ひょうぼう）していた後藤宙外の編輯していた「新小説」では、その雑録欄に於て、自然派文人に対して人身攻撃を加え、醜悪不徳な人間ででもあるように書立てていた。しかし、こんな攻撃悪罵が施されていた時は、自然主義

全盛期であった訳だ。

以前、抱月の洋行の時に、文壇全体の送別会があったように、二葉亭のロシア行の時にも、文壇的送別会が上野の精養軒で催された。鷗外漱石露伴などは参会しなかったが、逍遙をはじめ、自然派非自然派の別なく、いろいろな方面の文士が出席して、心からの好意を寄せて彼の遠征を送った。二葉亭は文壇から超然としていて、競争範囲に身を置いていなかったので、皆んなに尊敬されこそすれ、憎まれたり嫌われたりはしなかった。二葉亭はロシア的自然主義文学に理解があり、共鳴を覚えてい

たのであろうと想像されるが、自然主義的文学論は唱道しなかった。ツルゲーネフの文章と紅葉の文章が類似しているように云ったりした。実際彼は紅葉の文章に敬服していたらしい。私は、運よく、或青年出版業者に誘われて、一度だけでも二葉亭を訪問したことがあったが、その時の雑談のうちに、彼は、「今の新しい者がいいとしても、過去のいいものを排斥しなくてもいいだろう。つまり紅葉は紅葉としていい」と云う意味の事を云っていた。また「独歩の文集を読んだが、クリスマスの出版ものと云ったような感じがした」と云った。この二つの

評言、それも力説したのでなく、極めて軽く、独言のように云った彼の言葉が、今なお私の頭に残っている。こんな事を二葉亭は雑誌か何かで発表したことはなかったと、私は思っているが、しかし、私の聞きちがいではないと信じている。二葉亭を明治最初の新人、坪内逍遙以上の最初の新人と見るのが、文壇の定評になっているが、新人は新人であっても、あの頃の新人であったのだ。紅葉に於てツルゲーネフを見たりしたのだ。その事を花袋に話すと、「紅葉とツルゲーネフとはまるでちがうだろう」と云って嗤(わら)って取合わなかった。それにつれて私は

考えたのだが、花袋も独歩も、二葉亭訳によって、はじめてツルゲーネフを味読して心酔したのだが、そのツルゲーネフは、二葉亭化したもので、本当のツルゲーネフかどうだかと疑われた。それから、独歩の作品をクリスマスの出版物らしいと云うのは、その作品が道徳的健全性を持っていることを意味していたのではあるまいか。むしろ、純文学として軽蔑していたのではあるまいか。私はその後、二葉亭の独歩評に同感するような気持になった。独歩の「運命論者」なんかには、暗い深刻な影が差しているが、これは作者の空想の産物であると、かね

て思っていたところ、最近或雑誌に掲げられた独歩の生い立を丹念に調査した記事を読むと、彼の父は実は養父であって、実父は秘密の境地に鎖されていて、それが独歩の、人知れぬ悩みであったことが分った。そして、「運命論者」も、彼の真実の悩みの現われではないかと推察せられて、その作品に新たな人生味が感ぜられるようになった。この作品の外に、「女難」にでも、「酒中日記」にでも、人生の苦難が描かれているのだが、これ等の作風は日本の所謂自然主義の作風とは著るしく異っている。彼は早くから西洋文学によって啓発されたが、彼の

愛好した西洋ものは、主にワーズワースだのカーライルだの、英国文学であった。二葉亭を通じてツルゲーネフを知って、情味ゆたかな自然と人生の翫賞にふけるようになったくらいで、その作品は、花袋、泡鳴、或は藤村秋声などの自然主義的作品とは全く異っていたと云ってよかった。

独歩に連関して此処に竜土会の事を書いて置こう。会のはじめはそうでなかったが、いつの間にか、自然主義の空気がこの会に濃厚に漂うようになった。ここには、泡鳴の小説「毒薬を飲む女」のなかの記事を引用して、

その会の趣(おもむ)きを伝えることにするが、当時の自然主義の小説が、如何に露骨に、自分の事を書流していたかと云う事が、これによっても推察し得られるのである。実際の人名をも少しぼかしただけでそのままに用いて、その行動を直写していた自然主義小説の見本としても読み得られるのである。

「竜土会と云うのは、おもに自然主義派と云われる文学者連を中心としての会合で、大抵毎月一回晩餐の例会を開くことになっている。幹事は二名で、この月には田島秋夢と今一人渠(かれ)と同じ新聞社にいる人の名が出ていた。

義雄（泡鳴）はこの会の最も忠実な常連の一人でもあるし、友人どもの顔も暫く見ないし、印刷を終った自著（新自然主義）がいよいよ世間に出た当座の意気込みもあったし、喜んで出席することにした」「中の町から檜町の高台にあがると、麻布の竜土町である。そこの第一聯隊と第三聯隊との間に竜土軒というフランス料理屋がある。そこが竜土会の会場であった」「やがて椅子が定って、日本酒の徳利がまわった。秋夢は幹事だから末席にいる。彼は鋭い皮肉な短篇小説で名を出した人だが、外に、（破戒）を書いた藤庵（藤村）がいる。（生）を書

いた花村（花袋）がいる。劇場のマネジャーを以て任ずる内山（小山内）がいる。また外国新作物の愛読者で、司法省の参事官をしている西（柳田国男）がいる。その西が紹介した農商務省の山本（江木翼）という法学士がいる。株屋の番頭（平塚篤）がいる。工学士の中里（中沢臨川）がいる。麹町の詩人（蒲原有明）がいる。琴の師匠の笛村（鈴木鼓村）がいる。漫画で知られるようになった杉田（小杉未醒）がいる。或出版店の顧問、雑誌の編者等もいる。こう云う人々の中にあって、いつも彼等の談話を賑わすのは田辺独歩（国木田）であったが、

今年の六月に肺病で死んでしまった。あまり出席はしなかったが、やはり会員であった眉山は、独歩の死ぬ前に自殺した。眉山の自殺してから間もなく、茅ケ崎海岸の独歩の病室で、（この竜土会の会員の中で、誰れが眉山の次ぎに死ぬだろう）という話が出た。（無論田村（泡鳴）の狂死さ）と、毒舌家の病人は笑って、（あいつが生きているうちに、おれは死にたくない）

そう言われるほど、義雄（泡鳴）も随分毒舌の方であるし、それをあとで聴いた彼は、かつての独歩の思想をまだ旧式だと批評したことのあるのを思出したりした。

花村は、（鳥の腹わた）というのを文芸倶楽部に出した男（生田葵山（いくたきざん））を捕えて、あの小説は描写でない、下手な説明だ、きわどいところのあるのは構わないが、説明的だから、それを人に強いるようになっている。挑発的だと云って発売禁止になったのも止むを得まいなどといじめていた。藤庵は或新聞記者に向って、謙遜らしく、人生の形式的方面はどう処分していればいいのだろうと云うような事を質問していた。西は内山や中里と共に頻りにイブセンやメタリンクやストリンドベルヒの脚本を批評し合っていた。こういう別々な話が、いつまでも別々

になっていないで、互いに相まじわり、長い食卓のあちらからも、こちらからも、機(はた)の梭(ひ)が行きかう様になった時、義雄はその意味を取りちがえたり、ただやかましい噪音(そうおん)が聴えたりする瞬間もあった」

こういう風に、竜土会では、新文学新思潮が語られていたが、各人各様で、酔った独歩は、泡鳴を罵って、「世道人心に害がある」と叫んだりした。泡鳴は、不徳漢のように思われて、外部から非難攻撃されたばかりでなく、内部からも何とか難癖(なんくせ)をつけられていたが、しかし、表裏のない、率直な、快活な男性であった。「耽溺」で味

を占めて、それから小説の製作に身を入れるかと思っていると、樺太に於て、蟹の罐詰製造業をはじめることになった。その頃大倉鉄道学校教師の職を止めさされて、定収入の道が杜絶していたので、彼は生活の不安を感じていたのであろう。そして、少しくらいの評判では、文筆で妻子を養うことの困難であるのを、彼とても切実に感じていたにちがいなかった。ところが樺太の事業は、資本の貧弱な彼の持続し得るところではなかったので、樺太の土地を見ただけで、直ちに引返したのであった。北海道に滞在して、さまざまな苦難の経験をしたのが、

彼にとっての絶好の題材となって、異色ある作品が産出されるようになったのであった。「放浪」「発展」「断橋」「毒薬を飲む女」など純然たる自己描写の長篇小説が続出して、泡鳴文学が樹立したのであった。自分の事を臆面もなく書くのが、文学の正道であると信じた上は、彼の筆鋒が常規を逸したところまで行くのは、さもあるべき事であった。いつも貧乏で生活苦を経験し、貧乏なために女に不自由するので、頑健な彼が食と色とを得んがために奮闘する有様が、彼の作品には露骨に出ているのである。他の同類の作家のよりも、露骨に、色も香もな

く出ているのだが、それが彼一流の人生哲学で裏付けられているところに異色があるのだ。近松秋江の女性追求小説に新内情調があるとすれば、泡鳴のには浪花節の趣きがあると云っていい。めそめそした、泣言だらけの秋江のに比べると、泡鳴のは男性的であると云ってもよかろうが、しかし、今度二三彼の作品を読直して、甚だしい蕪雑さを感じた。最近流行のエロチックな小説に比べると、泡鳴のにはいやらしさがないだけ気持よく読めるのだが、自己のむき出しも、たびたび見ていると興が醒めるのである。

彼の「半獣主義論」にしても、「古神道論」にしても、「新日本主義論」にしても、文壇ではむしろ嘲笑していたのであったが、当時の自然主義のうちで、兎に角独自の哲学を持っていたところに、彼の価値を認めてやらなければなるまい。「刹那哲学の建設」という論文は、最も要を得て、内容も充実している。チグハグなところが少い。「僕等は作品が永久に亘り生命であっても、なくっても、そんなことには頓着しない。その日その場その刹那に於て、人生全体の幻影が特殊の描写に現われなければならない」というのは、荒削りの泡鳴の文章に似合

わず、含蓄のある文学観である。後日、花袋式平面描写論や、傍観的態度を排斥して、霊肉合致の心熱主義や、実行即芸術を主唱し、「作家の態度は、僕の所謂(いわゆる)、心熱的全人格的実行でなければ、真剣ではない。真剣な作家の主観を離れて、真剣な人生描写はない。作家の主観が、内存的に深刻であればあるだけ、偉大であればあるだけ、表面的技巧や小経験を内部から破壊して、それに相当する深刻若(もし)くは偉大な文芸が出現する。そういう主観こそ、むしろ、客観的態度などより重大で、僕はこれを破壊的主観と呼ぶのである」と云っているのも含蓄ある文学観

である。ややもすると凡庸化し、その凡庸化が自然主義の本領のように云われだした時に、破壊的主観を唱えたのも偉とするに足るのだが、しかし、彼の作品そのものが、彼の勢い込んだ議論を恥かしめないほどの出来栄えを見せていたのであろうか。彼の得意時代の長篇「征服被征服」なんか、今読むと、冗漫な、だらしのないもので、破壊的主観の表現は何処にも見られないのである。

泡鳴の勇敢な自己暴露振りに、坪内逍遙が感心したという話を誰れかに聞いた私は、それを泡鳴に伝えると、彼はそれをひどく喜んだらしかった。そして、逍遙もお

れの小説に同感していると吹聴していた。そういう所に、褒められても悦(うれ)しそうな顔をしない藤村とちがった無邪気さがあった。

私は彼の文壇生活の後半期については、直接に親しくしなかったので、よく知らなかったのだが、相手の女が変ったり、最初の本妻がヒステリー的行動をしたりしたため、彼の家庭は混乱をつづけ、寧日(ねいじつ)無しと云ったような有様であったことが、彼の作品によって窺われるのである。世の哲学者や文学者や政治論者などと議論を闘わしながら、一方では、家庭混乱小説を連作していたのだ

が、その奮闘振りが文壇からは冷笑の目で見られていたのだ。真実の描写であって、藤村花袋が家庭を題材とした小説に比べると、泡鳴の書き振りが一層多く自然主義的であるようにも思われるが、それは、いい意味でそうであるとは云えない。彼は「小説表現の四階段」と題した論文に於て、小説表現を四つに分類して、「説明的説明」「説明的描写」「描写的説明」「描写的描写」としているのは、一つの見解であるが、彼は藤村の表現法を、説明的描写として、そこに旧派の手法を認め、花袋の表現法を、描写的説明として、新旧両派の橋渡しとするの

は必しも当を得てはいない。そして、泡鳴自身の表現法を描写的描写という最新の自然主義的表現と思っていたのであろうが、これは無論当を得ていない。今度私は彼の後半期の作品の幾つかを読んで、そのガサガサした乾いた描写に物足らぬ思いをしつづけたのである。物足らぬ思いはしつづけたが、こういうゴッタ返した家庭生活を続けた文壇人の真相がそこに見られるのは、事実を事実として無遠慮に書くことの力によるのである。

「日本主義は生々主義だ」「死ぬる奴は馬鹿だ」「おれは頭が働かなくなったら舌を噛んで死ぬる」などと景気

のいい事を云っていた彼は、生きていた間は、身体一杯で生きていたようなものだが、彼がもっと生きのびて、時勢の変遷につれて、体当りで当っていたなら、どんな目ざましい光景を呈したであろうか。生きている間には、熱烈な日本主義や半獣主義を振翳(ふりかざ)して奮闘していたが、誰れにも重きを置かれず、むしろ冷笑されていたことは、我々はよく知っている。若し彼が戦時中まで生延びていたなら、どんな態度を取っていたであろうか。若し敗戦後の今日までも生延びていたなら、どんな態度を取っていたであろうか。彼とてもあの時の強権者に追随し、こ

の時の強権者に追随するのではなかろうか。或は今日のような時世には、彼なんかはみじめな境地に陥ったかも知れない。彼生存の時分には、ドンキホーテのように見傚され、真面目に取合われなかったからこそ、無事でよかったのである。自然主義思想だって、強権者が徹底的に取締らんとしたら、勃興当時にも戦時中にも迫害されたであろう。日本主義の泡鳴は、戦時中は強権者に左袒（さたん）して世界主義的自然主義者を排斥したにちがいない。

私が最初に泡鳴に会ったのは、彼がまだ小説を書かなかった頃、「闇の盃盤」という詩集を出版して、デカダ

ン趣味を発揮していた時分であった。私がおりおり当時の新体詩を非難し冷罵していたのを、泡鳴は憤慨して、私に抗議を申出るべく、読売新聞社に来訪したのであった。その頃、石川啄木も来訪したが、これは新聞に何か寄稿したくって、様子を見に来たのであった。私はこの田舎出の若い無名詩人には何の興味もなかったので、極めて無愛想にあしらって、相手をして取りつく島のないような思いをさせたのであったが、泡鳴とは一見旧知の如く、打解けて文壇詩壇の話をしたのであった。そして、「書きたいことがあるのなら新聞に寄稿しろ」と、私が

勧めたので、意見の発表場所の無かった彼は大に喜んだ。そして、直ちに長い論文を持って来た。それを縁に、まだ下宿住いの独身であった私は、家庭生活に飽いていた彼と、親しく交ることになり、私が読売を退社するまで、頻繁に往来した。彼の人生観や文学論には殆んど感心したことはなかったが、彼との交際に於て不快な感じを抱かされたことは殆んど無かった。彼と囲碁や玉突もよくやった。二人とも下手であったが、泡鳴は兎に角熱心であり、私は不熱心であった。文学に対しても同様であったようだ。

私は、泡鳴の本妻とか情婦とか、二度目の夫人とかにも時々会ったことがあるし、彼が父から相続したという下宿屋へも行ったことがあって、実際の彼女等から受ける印象と、作中に現わされている彼女等から受ける印象との類似と相違とを心に留めていて、花袋や秋声の女性描写振りをも思出して、泡鳴のと比較することもあるのである。泡鳴のは、実際の男女間の闘争が露骨であるためでもあるが、描写が荒っぽいし、女性の心理の観測がいかにも自分勝手である。作者自身の一方的解釈であると云っていい。知名の作家は、観察力がすぐれている訳

だが、私の経験によると、私自身の事、或は私自身の知っていることを、泡鳴や花袋や秋声などが書いている場合に、必しも真相を得ていないのを感じている。「こんな事を云っている」と、可笑しくなる事がある。しかし、文学はそれでいいのだ。作者好みの解釈でいいのである。そこに作者それぞれの真実が現われている訳だ。泡鳴の小説には泡鳴的真実が表現されていて面白いのだが、如何にも独断的描写であるのが、泡鳴の特色なのだ。

或小説のなかに、自分の妹の事を書いたところがあったが、その妹が兄をえらい人間として尊敬しているよう

に書いていた。果して彼の妹が兄をそんな風に見ていたであろうか。彼は私が彼の説に賛成したように云っていたこともあったが、これも彼の独断であった。彼は自分の空想した事を事実として議論し、或は小説に書いたりしたことがよくあったように私は思っているが、私以外にも、そう思っていた人があった。泡鳴はよく独り角力を取っていたのだ。自然主義文学者としての巨豪の人生の真に徹する程度も、これによって想像し得られるのである。

自然主義者が偶像破壊をやっていた時分、ダンテでも

ゲーテでもシェークスピアでも、生命のない黴の生えた文学のように見做(みな)す風習が流行していて、泡鳴は無論そういう見解の保持者であった。私もその会員の一人であった「イブセン研究会」でも、早稲田の文芸協会がシェークスピアのハムレットを上演するのを嗤ったものだ。そして、小山内と左団次協同の自由劇場で、イブセンの「ボークマン」を演じたのも、その脚本の選択についてはそのイブセン会が与(あずか)って力があったのであった。しかし、他の連中の多くは、シェークスピアをもゲーテをも棄てきれず、いつか偶像崇拝に戻ったようだが、泡鳴

はもっと徹底していて、しまいまで彼等を蔑視していたらしい。「マーローはシェークスピアのようなボンクラではない」と云ったり、「近松は沙翁より偉大なり」と云ったりしていた。これなんか可笑しなことなので、沙翁を凡庸視するのはいいとしても、マーローを推讃するのは訳の分らぬ話であった。西洋の古典が詰らないものなら、日本の古典だって詰らない筈なのに、そう云わないのは、彼もまだ不徹底であると云っていい。

泡鳴は、おくれ馳(ば)せに詩から散文に移ったのであったが、初期自然主義の主な作家は、藤村をはじめ、独歩も

花袋も、まず詩人として世に出たのであった。詩だけでは創作慾を満足させられなくなったのであろうが、詩だけでは生活出来ないことも、小説に転じた主な原因であったのであろう。此等先輩が詩人出であったのと異り、その後から出た真山青果や私などは、詩や歌には門外漢の無風流な作家であった。それで、文壇の花形として出現していながら、作品に華やかなところも、情趣ゆたかなところもなかった。本の売行も悪くて出版者を失望させた。

青果の最初の小説「南小泉村」は、東北の農村を描写

したものであったが、これは独得の作品として私の記憶に残っている。農村と農夫の事を、無慈悲にこっぴどく書いているのだ。モウパッサンがノルマンディの農夫を無慈悲にあつかったのと似ている。後年の日本の農民小説に現われているような、人道主義的、或は社会主義的な趣きは全然ないのである。泡鳴が農民小説でも書いたら、こんな物を書きはしなかったかと思われる。私は青果の多数の作品のうちで、この「南小泉村」を第一に推賞するのである。自然主義の作家は、人間の獣性を描くとか、現実を暴露するとか云いながら、心弱いためか、

詩人出身であるためか、描いてなまぬるいところがあった。「南小泉村」の態度を押進めて社会の諸相を描いたら、辛辣な人世作品が続出した筈であったが、青果もそこまでは行かなかった。詩人から小説家に転じた自然主義作家の間で、青果は小説を棄てて脚本に力を入れるようになった。そして、彼の脚本は自然主義の態度の下に製作されたのではなかった。

私や青果は、新進の自然主義作家として、この派の花形作家として、批評されたのであった。私達の直ぐ後に出た花形作者は、谷崎潤一郎と長田幹彦であったが、こ

れ等は花形の名にふさわしい華やかな作者であった。しかし、彼等はもはや自然主義者ではなかった。なんでも自然主義で囃し立てた時代は二三年間に過ぎず、従って、私と青果を、栄えない花形に仕立てただけで、後が続かなかった。

四

「吾輩は猫である」という異様な作品が「ホトトギス」に連載されて、世間の噂になっていた時分には、自然主

義はまだ芽を吹いていなかった。「倫敦塔」「坊っちゃん」「草枕」など、多種多様な作品が続々と発表されて、夏目漱石の名声は文壇の内外に鳴り響くと云った有様であったが、その頃一方に自然主義が唱道されて、次第に文壇を風靡するようになった。そして、自然主義文学から見ると、漱石の文学は一敵国の観があった。自然主義の思想は当然起るべくして起ったので、共鳴者も多かったのだが、この派の作家の作品に優秀なものが出なかったためか、小説の売行は誰れのも漱石に及ばなかった。それは、作品の出来栄えがよくなかったり、面白くなか

ったりしたためでもあったが、漱石が官学出身の学者であり帝大の講師であったのとちがって、独歩、藤村、花袋などは、官学の学歴もなく、官学の教授でも講師でもなかったことが、読者受けのする点で損であったのだ。今日の考えから云うと馬鹿げた事であるが、明治時代には末期に至るまで、官学と私学との価値の軽重についての世間人の感じは動かすべからざるものであった。漱石や鷗外は作品の如何に関わらず、人として重く視られていたのだ。

作風から云って、漱石のは自然主義とは相容れないと

ころがあって、花袋、泡鳴などはたびたび非難していたようであった。しかし、自然主義追随者のすべてが漱石を嫌っていたのではなかった。現実暴露の悲哀や人生の幻滅を強調していた長谷川天渓も「坊っちゃん」を愛読して、好意ある批評を書いた。「草枕」は私なども愛読したのであった。ところが、私の記憶にあやまりがないとすると、島崎藤村は漱石に関しての批評は一度もしたことがなかったと思う。漱石に対する是非の批評を、私は藤村の口から聞かされたことはなかった。藤村の藤村たる所以で、私は甚だ面白いと思っている。「破戒」が

出て間もない頃、上野の精養軒で或会合があって、漱石も藤村もそこへ出席していた。「破戒」を愛読していた漱石は、参会者の誰れかに、「藤村に紹介してくれ」と頼んだので、その人は藤村にその旨を伝えたが。藤村は堅く断ったそうだ。私はその噂を聞いて、藤村の心理を想像したが、こういう作家心理も考えようによっては面白いのである。

誰れが最初に云ったのか、私の記憶では明らかにし難いのだが、漱石の文学は低徊（ていかい）趣味の産物であり、文字の遊戯であるというのが、自然派の意見であって定説とな

ったのだ。鷗外の文学も遊びの文学と云われた。坪内逍遙が文芸協会を創設し、大久保余丁町の自宅に演劇研究所を造った時、その試験場の正面の額に「遊於芸」という文字がしるされてあった。弘法大師の筆蹟を写したものだそうだ。逍遙は、芸に遊ぶのが、演劇の本領であり、正しい芸術観であると思っていたのであろう。しかし、花袋、泡鳴、藤村などには「低徊趣味」や「芸の遊び」が気に入らなかったのだ。花袋はよく、水火の悩みを口にし筆にした。生存の苦悩を、水に溺れ火に焼かれているような苦しみにたとえた。「皮剥ぎ」という事も云っ

た。製作に当って、自分で自分の皮膚を剥ぐような苦しみを感ずるという意味であった。芸の遊びどころではない訳である。泡鳴も頻(しき)りに苦痛の心理や苦悶の哲理を説いた。漱石は「それから」のうちに、「何が気障(きざ)だって、思わせ振りの、涙や煩悶や、真面目や、熱烈ほど気障なものはないと自覚している」と云って、当時の自然主義文学に当てつけているが、自然主義に対する漱石のこんな批判は決して当を得ていないのだ。花袋が「蒲団」や「生」や「妻」を書いた時、藤村が「家」や「新生」を書いた時には漱石などの伺い知らない苦痛を感じていた

のだ。泡鳴や秋江が自分の体験を書く時にもそう云う、人知れぬ苦痛を感じていたのだ。私は彼等に接近していたからよく知っている。そういう苦痛は、漱石や逍遙などの芸術観から云うと、愚かな苦痛であったかも知れない。我と我皮を剥ぐのも愚かである。すき好んで濁水に身を投じて泳いだり、火の中に飛込んだりしないでもよさそうである。「坊っちゃん」や「草枕」のような態度で自己の芸術を展開されたら、いいではないかと、一般の文学者は云うかも知れない。

しかし、彼等自然主義作家は、苦痛を凌いで、ああい

う作品を製作し発表した。それは、日本の文学史にも世界の文学史にも例のないことであった。自分の醜態を暴露して、それを文学の正道のように思う事なんか、謹み深い、鷗外、逍遙、漱石などの為し得るところでなかった。傍観者として彼等を観て阿呆のように感ぜられることもあった。最も真面目くさっていたため阿呆とは見られなかったが、藤村の如き、最も創作の苦痛水火の悩みを感じていたにちがいない。「家」や「新生」は、当時の自然主義文学の狙っていた苦痛の結晶見たいなものであった。創作に際しての苦痛は、古往今来多数の作家の

経験しているところで、紅葉などは一字一句にも骨身を削る思いをしたのであった。才能豊かな漱石にしても、創作のために、安らかな眠りの得られないような苦しみをしていたかも知れなかった。しかし、当時の自然主義者には、それ等通有のものと異った一種特別の苦悩があったのだ。いかに自己の生存苦を内省し、いかにそれを発表すべきかが、自然主義者間に欝陶しく漂っていたのである。「私小説」などと名づけて、今日まで自己告白作品は文壇に跡を絶たないのであるが、この頃のは、あの頃よりも態度がのびのびしている。あの頃は、自作を

読まれることに、多少極りの悪い思いをしたのであった。

近松秋江は、自然主義者ではないと云っていたし、私などよりも少し遅れて作品が認められたのであり、特色として、情緒纏綿（てんめん）の趣きがあったので、批評家も自然派の一員とは見做さない有様であったが、今日から観ても、自然主義作品として彼のものを取り扱っていいと、私は確信している。自己暴露という点では、彼の作品は群を抜いていたのだ。「別れた妻に送る手紙」が彼の出世作であるが、彼はその前に、「食後」という短篇を「早稲田文学」に寄稿していた。これは彼の処女作と云っても

いいのであるが、秋声は、私に向ってこれを称讃した。この小説の内容は、主人公たる作者が、その同棲者たる女から、以前関係していた男子についての思出話を聞きながら、嫉妬の思いに堪えられなくなる心境を描いたもので、秋声のその頃の作品にもそれと似寄った心理が描かれていた。自分と同様の経験の描かれた作品に、我々が共鳴を覚え興味を感ずるのは世間一般の読書心理である。秋江は早くから秋声の小説的技倆を認めていた。個人的にも親しむようになったのだが、彼の本姓は（徳田）であるから、徳田秋江では徳田秋声の縁者であるか、門

人であるか、何かと紛らわしいので、かねて崇拝していた近松を持って来て、自分の雅号の頭にくっ付けることにしたのであった。これは私の推察だが、この推察は断じて間違いないのである。

秋江は、自分では自然主義者ではないと云っていても、この派の重な人々とは親しく交わっていた。訪問好きの彼は、頻繁にあちらこちらの文壇人を訪問する癖があったが、漱石の家へもおりおり出掛けたようであった。そして、或時「漱石の家には、門下生などが寄って和気靄々(あいあい)と談笑している。自然派の人間は寄り合うと、いがみ合

っている」と、何かに書いたことがあった。これを読んだ泡鳴は甚だ不平であった。「漱石の仲間は秋江を他所(よそ)の団体から来たお客様として、遠慮して扱うだろうが、そんな事で両方を比較するのは間違っている」と云っていた。花袋の書いたもののなかに、「緑雨から皮肉を取ったのが秋江であるように思われる」とあったが、緑雨を知らない私も、それによって緑雨の姿を想像裡に浮べることが出来た。緑雨はよく人を訪問し、あちらの噂をこちらに伝え、こちらの噂をあちらに伝えするので、いやがられていたようであったが、秋江にもそういうとこ

ろがあった。私は、非社交的であったにしても、半世紀にも渡る文壇生活の間には、さまざまな人に接触したのであるが、そのうちで、私の最もよく知っている文壇人は、彼近松秋江であると云っていい。私は両親、弟妹、妻、幾人かの親類縁者などによって、辛うじて人間を知っているのだが、文壇の知友としては、秋江によって人間を知らされているようなものだ。彼は学生時代には級友に軽んぜられた。文壇に出て生活の資を得んとアクセクしていた頃も、雑誌の編輯者や友人から安っぽく、軽く扱われていた。彼が熱心に追いまわした女性からも、

つまりは軽く安っぽく扱われていた。憐れなる一生、生きるに甲斐ない生存として、ほそぼそとした彼の姿が私の目に映ずるのであるが、しかし、よく見詰めると、必しもそうではなかったのだ。彼も学生時代から末期まで夢を見つづけていた。事志とたがう思いに悩まされながら、夢を見ていたのは幸福であると云っていい。

「別れた妻」によって幕の開いた、彼の数篇の愛慾小説、「疑惑」でも、「黒髪」でも、しつこい、思切りの悪い彼の本性をよく現わしているのである。このしつこい、思切りの悪いところに彼の文学の特色があるのだが、

しつこい事、思切りの悪い事は、藤村にも花袋にも見られるので、本当は珍らしくない訳だ。ただ秋江のは、他の人々のように思慮をめぐらす事なく、知慧を働かすことなく、しつこさその物を単純に出しっ放しで行くのが、藤村などと異るところなのだ。「疑惑」の材料となった事実談は、話上手の彼からたびたび聞かされたもので、一度は面白かったが、しまいにはいやになった。私ばかりではない。友人仲間でそう云っていた。藤村などは秋江のように、誰れでも摑まえて、そんな醜い打明け話はしなかったにちがいない。私自身を省みても、秋江と同

様の経験があったと仮定しても、あれほどアケスケと書かなかったに違いない。それで、私は、藤村の「家」にでも「新生」にでも、書くべくして書いていないものが隠されているのじゃないかと疑っている。かつて、藤村が、「どんな事でもさらけ出して書きまくるのが必しもいい事ではない」と、泡鳴に当てつけて云った事が思出される。秋江は隠すところなく書いたに違いない。自分の経験事実だけは書きつくしたのだ。藤村の云った如く、何でもさらけ出して書く事が、傑れた小説作法ではないので、下手な作家にそんな態度で書かれたなら、読むに

堪えぬものが出来たであろうが、秋江のは、はたから用捨なく事実談を書流していながら、読者の心を惹くような筆使いを示している。その場その場の光景を描写し、「私」である作中人物の心理の動揺をも微細に叙述している。遊女、その他の女性を描いても、藤村、花袋のような野暮な作家よりもうまいところがあり、荷風、潤一郎などの本格的の女性描写よりも、巧まずして、不用意に女性を生き生きと写し出しているところもあるのである。秋江はよく、秋声の描写のうまさを例に挙げて話していた。

ここで、私は文学鑑賞の上の一つの問題を提出しよう。作家のモデルとなった人物を知っていることは、鑑賞を豊かにするか、或は正しい鑑賞を妨げるであろうか。私は、泡鳴作中の女性、二三人にはたびたび会っているが、私自身は、彼女等から、寸毫（すんごう）の魅力をも感じさされなかった。そして、彼等を知っている事が、泡鳴作品を読む場合に、その作品を一層散文的に、一層無風流に一層殺風景にするのである。

秋江の「別れた妻」にしても、よく知っているために、その人を思出して、作中に、その人の行動言語のよく描

かれているのに興味を覚えるのだが、それとともに、あいう女を執念深く追廻すことのいやらしさが感ぜられるのである。しかし、これは私だけの文学鑑賞法であるのであろうか。

秋江は女性惑溺作品によって文壇に認められたに関わらず、自分はそれを厭うて、馬琴の作品のようなものや、歴史小説を書きたがっていた。人は自分の柄に無いものを好むものなので、秋江が苦労して書いた「水野越前守」なんか、無論云うに足りないのであった。自然主義作家は、私小説に主力を注いでいた訳だが、彼等も作家とし

て、自分や自分の周囲の男女を描写することだけでは、創作慾の満足が得られないらしく、私小説以外のものにも手を着けようとするのであった。花袋も源義朝、その他いくつかの歴史物を書いた。藤村も晩年には「夜明け前」や「東方の門」を書いた。歳を取ると、歴史物を書きたがるのは、日本の作家気質とも云うべく、鷗外、露伴も晩年は歴史物に身を入れた。若し漱石が長生していたなら、彼もまた歴史物に手を出すようになったかも知れない。初期の「倫敦塔」の出来栄えから云っても、彼は歴史物にも一境地を拓(ひら)いたであろう。

元来社交家でなかった漱石も、文名が高まるにつれて、門下生に取捲かれるようになり、さまざまな訪問客に煩わされるようになったらしかったが、彼も礼讃者に接触することによって生存の喜びは感じたにちがいない。秋江が覗き見して報告した如く、漱石一門は師に対する敬愛の情ゆたかで、師弟の交りが和やかであったのであろう。自然主義作家方面では、門下生を集めて太平楽を云っているものはなかった。花袋でも藤村でも、門下生と云うべき種類の青年文学者は、幾人も近づけていないようであった。自然主義全盛期に際しても、この派の幹部

は、陽気な華やかな環境に身を置いていたのではなかった。むしろ、漱石の方が賑やかな派手な芸術境地を楽しんでいたように見られた。

竜土会の事は前回に述べたが、自然主義系統の作家が寄集っていたのは、大抵毎月催されていたこの会であった。同じ主義の作家の会合というのではなく、いろいろな種類の知友が集って雑談に耽るだけであったが、自然主義盛んな時分には、その面影が反映していた。「自然主義は竜土会の灰皿から出た」と、秋江が気取った口を利いたことがあったが、そういう趣きがないでもなかっ

た。小山内薫もこの竜土会の常連であって、新しい時代思潮には関心を持っていて、舶来の新作品について読後感を語ったりすることがよくあった。竜土会のような遊びの会以外に、真面目な研究もやろうと、柳田国男などの思いつきで、神田の学士会館を会場として、イブセン会という研究会を開催したことがあった。花袋、藤村、泡鳴、有明、天渓、のほかに、小山内や私が参会していた。この会は概して自然主義主唱者或は共鳴者の会合であった。それで、その頃発表された露伴の新体詩（出廬の類か）を、後藤宙外が、「はじめて国詩に接す」と題

して極度に讃美したのを、冷笑したり、早稲田の文芸協会で、新しい演劇運動の第一歩に沙翁の「ハムレット」を選んだことを非難したりした。古くさい沙翁物を日本に輸入して何になるか、それよりもイブセンの芝居なんかこそ真面目に取入れるべきであると云うのが、会員一同の考えであった。当時小山内は左団次と結托して自由劇場を計画していたのであったが、最初にイブセン物を上演することになったのは、イブセン研究会があったためである。物質的にも社会的にも無力であったイブセン会々員が無言のうちに後押しをしていたようなものであ

った。「ボークマン」を選んだのは、藤村が、暗示的に小山内の前でその名を挙げたためではなかったか。藤村にしても、他の会員にしても、演劇なんかに口出しするような己惚(うぬぼ)れ気はなかったのだが、雑談のうちに、この晩年の戯曲には、老年と青年との心の暗闘があって面白いくらいな事が、藤村の口から出たのであろう。小山内はそれを採用して、第一回の自由劇場で兎に角成功したのであった。坪内逍遙は、青年俳優の最初の新演劇に、何故イブセンの晩年の作品を選んだか、理解し難いと云っていたが、このボークマン劇は、新時代の若い見物を

感激させたのであった。文壇に自然主義が勃興したのと、劇壇に自由劇場が起って、西洋の翻訳物を主とし、日本の新作も新しい演出振りによって上演されたのと、その揆(き)を一にしていると云っていい。左団次は、その演技に大した妙味はなかったにしろ、旧套を脱した自然主義的演出を試みた訳であった。小山内は或日のイブセン会で、今読んだばかりだと云って、チェーホフの小品「牡蠣(かき)」の話をした。少年が牡蠣料理を振舞われたが、生れてはじめてのたべ物なので、たべ方を知らないで殻ごと食べたというのが、話の筋であった。私達は、清新な感じで、

話上手な小山内の話に耳を傾けた。それから、「桜の園」の話も聞かされた。桜の木が切り倒される音で大詰の幕のしまる有様が、東洋流に余韻があるようで面白かった。新しい芝居と云った感じに打たれた。イブセンよりも新味がありそうに思われた。当時の自然主義系統の作家や評論家が、西洋の近代文学をどんな風に受入れていたかというと、まずツルゲーネフの小説が、二葉亭の翻訳によって早くから読まれていた。後日ガーネットの英訳によって通読した作家も多かった。藤村も小諸で「猟人日記」なんか読んで。自然描写について大いに啓発された

筈であった。赤表紙の粗悪な英訳本によって、モウパッサンの短篇集は、広く読まれていた。小使銭稼ぎの翻訳には便利なので、この短篇集がよく用いられていた。そして、自然主義末流作家の創作のお手本のようにされていた。モウパッサンからもっと進んだ所で、フローベルやゴンクールの作品が重要視され、花袋などはゴンクールの印象的描写を讃美していた。あの頃、バルザックは通俗小説家あつかいされて、あまり読まれなかった。スタンダール、ブールジェなどの心理描写の作品も左程に重んぜられなかった。しかし、ボードレエルとかヴェル

レーヌとかポウとかが、訳も分らずに有難がられていたのは変であった。外国文学の鑑賞は、いつの世でも出鱈目（でたらめ）であると云ってもいいので、ある有力者が讃美すると、多数者が直ぐに雷同するのである。自国の文学でも読む人によってどうにでも味い得られるのだから、外国文学は尚更のことである。ドストエフスキーの「罪と罰」なんかは、早くから日本に紹介され、一部分は明治二十年代に早くも翻訳され、はじめは探偵小説のように取扱われ、後には最も深刻な人生小説として、熟読玩味されるようになった。こうなると「芸に遊ぶ」とか、「有りの

儘に人世を描く」とか云うような小説観は、吹けば飛ぶようなもので、文学の極致、小説の行き留りのように思われるのが「罪と罰」であった。しかし、それにかかわらず、ドストエフスキー物は、誇張された作り物で、真実を離れているのだから、我等の自然主義とは別のものであり、邪道であると、花袋はじめ、当時の自然主義系統の作家には思われていたらしい。漱石だって、ドストエフスキーは好きではなかったのではあるまいか。日本の文学趣味に適しないのであろう。これに反して、トルストイの方は快く受入れられた。「戦争と平和」や「ア

ンナカレニナ」のような厖大な重々しい物も、相当に読まれて、ロシアの青年作家の口吻を真似て、トルストイは偉大なりと感歎の声が放たれたのであったが、彼の特異の短篇「クロイツェルソナタ」や「イワンイリヰッチの死」は、自然主義作品の典型の如くに珍重されていた。愛慾や死について、こんなに簡潔に深く人心に喰い入ったものは、近代文学史のうちに稀少であるように思われていた。秋江の如きも、筆を執るにあたって、「クロイツェルソナタ」をお手本にしたと云っていた。「疑惑」の結末に、「汽車の進行をもどかしく思いながら、私は

窓に顔を向けて、人目を忍んで劇烈にすすり泣きをした」と書いたのは、トルストイの真似をしたのだ。

ところで、あれほど死に瀕(ひん)した凡人の心理を探索し検討して、描写し尽したトルストイでも、結末は彼特有のキリスト教観から光明輝く解決をした。「クロイツェルソナタ」につづくトルストイ流の禁慾的解決も徹底的であった。しかし、あの頃の我自然主義の特色は、人生問題の未解決であった。イブセンの戯曲は多くは未解決のままなので、そこに深い意味があるように尊ばれていたのだ。そういう当時の自然主義者の心境は、島村抱月の

「懐疑と告白」と題した論文に於てよく現わされている。

「どう考えても、今日の自分等が真に人生問題を取り扱い得る程度は、懐疑と告白の外に無いと思う。今迄の人は余りに信じ過ぎた。他人の思想を信じ過ぎたり、自分の思想を信じ過ぎたりした。或は信じて頼りすがるべき思想のあるのが一生の平和の為には仕合せかも知れないが、時勢はそれを出来なくしてしまった。こんな世の中に立って、我々は誰をたよりに、自分の全生活を支配する問題を打ち任せよう。何処に一つ我々を全部服従させるに足る思想があるか。我々はただ現在の自分の心内に

振り返り見て、その紛乱に驚くのみである。口を開いて真実を語ろうとすれば、ただこの紛然たる心内の光景を有りのままに告白する外はない。それ以上の凡ての思想は、我れという真骨髄に徹するには隔たりのあるもの、我れの一部には違いないが、隙のある我れである。充実した我れは、ただ懐疑未解決という点までだと思う。私が他人の説を聞いて、あれまでが真実権威のある部分で、あれから先は造りものだなと感ずる境目は常に此の点である」と云っている。それで、「今の私に取っては、宗教でも哲学でも、生きて血の通っているのは、この懐疑

的方面ばかりだと思う。しかし、懐疑は何時でも終点を意味するものでないから、これに住する限り、必ず何等かの形、何等かの程度で終点を知ろうとする努力若くは要望が残る。その実終点は恐らく知れないものであろうとは、今までの経験が教える所であるが、それにも拘わらず、それを知ろう知ろうとあせる気持は、古今を通じて少しも減じない。又あせらざるを得ない事情が人世の根本に横たわっている。知れないものを知ろうとする。このパラドックスがやがて造化の神秘なのであろう」と、人生問題に対する自分の未解決的結論を述べている。私

など、この抱月の所論には同感であった。トルストイやドストエフスキーの作品には、この知れないものを知ろうとする強烈な努力が見られるのだが、この二巨匠の解決には、日本の自然主義者は共鳴し得られなかったのだ。抱月の所謂「懐疑と告白」此処にあの頃の自然主義の本領が存在していたのである。そういう立場から見ると、秋江の「疑惑」の如きは、作者自身は意識しないのであるが、自然主義作品の一つの見本と云っていいのだ。主人公たる（私）は自分の妻の所行に対する懐疑に襲われながら、その疑問を明らかにせんと渾身の努力を試みて、

その経路を有りのままに告白したのである。人生に対する懐疑、その懐疑を追求し告白する文学、懐疑が深ければ深いほど、その文学は底光りがする訳であった。漱石の初期の作品には、懐疑とか告白とか云ったような陰鬱な、野暮ったい影は差さなかった。しかし、後年、新聞小説を書きだしてからは、有り合せの自然主義者の作品よりも、却って強い懐疑の宿っている作品を発表しだした。国木田独歩は、多感多情の詩人であって、その「病牀録（びょうしょうろく）」に於て、「予は蒼茫極りなき天地に介立して、俯仰（ふぎょう）千古に亘り、大自然と相面して、自己の隻影

を顧みるの時、今更の如く、吾生の孤独と荒涼と不安とに堪えず、何物か神秘の力に頼らんと欲するの情極めて切なり」と云っているのは、感傷的な詩人語であって、唐初の詩人陳子昂（ちんすごう）の山上の詠詩「前に古人を見ず、後に来者を見ず、天地の悠々を思い、独り愴然として涕（なみだ）下る」という、有名な五言の古詩を連想させるのである。それは、あの頃の自然主義の懐疑感孤独感とは異っている。片上伸は、不起の病床に横たわれる独歩の心境を想像して、「心弱き独歩は、大自然の偉力を畏れた。現実の生は微弱にして流転変化極まりない。いずこにか自己

の安心の地を見出したい。しかもその微弱にして流転変化極まりなき現実の生をほかにして、わが一心を寄託すべき安住の地は何処にあるか」と思詰めていたと云っている。独歩の未解決の孤独感が伺えるが、しかし、独歩の作品には、懐疑孤独の感慨が根強く、底深く写し出されてはいないのである。詩人らしく感傷的であり、ロマンチストの夢見たいな趣きがあるのであった。だから、あの頃の正統的自然主義態度から云うと、独歩の多くの作品は別様の感じがするのである。晩年の「疲労」や「二老人」や「竹の木戸」などに於てこそ、ようやく自然主

義の趣きが見られるのである。無論、文学者として、或主義の枠の中に収まる必要はないので、独歩としては、ロマンチストであろうと、ナチュラリストであろうと、どうでもいい訳だ。ただ私は、今自然主義盛衰史を書いているため、こんなことに拘わっているのである。

「要するにみな逝(ゆ)けるなり、在らず、彼等は在らず、――古(いにしえ)も暮れゆきしか今も又、哀し哀し、我こころ哀し」

彼は一生、こういう風に感じ、詠歎し慟哭(どうこく)したのであった。

文学上の党派別は、政党の党派別とはちがって、同じ派に属するように世間から極められていても、各人各様の作風を現わしているのである。独歩花袋藤村など、作風はそれぞれにちがっていたが、漱石門下の青年作家の作品でも、自然主義の作品として取入れていいのもあったのだ。森田草平の「煤煙」の如きも、作家が漱石門下でなかったら、自然主義のものとされて、当人もそれで満足したかも知れなかった。それを思うと、文学の党派別なんか、いい加減なものである。

続々として出ずる乾燥無味な、陰気臭い自然派的作品

に読者が倦(う)んでいた時分に、永井荷風がフランスから帰朝して、色も香もある情味ゆたかな作品を矢つぎ早に発表したので、自然主義者顔色無しといった光景を呈したのだが、荷風とても自然主義を嫌って、その派の作家を敵視していたのではなかった。荷風は、早くからゾラの小説を読んでいて、「地獄の花」のようなゾラを真似た作品を発表していたくらいで、自然主義者の仲間入りしてもよかったのだ。彼は帰朝後、小山内とも交わり、泡鳴にも接し、私の主宰していた読売新聞の文芸欄にも、「西洋音楽界の近況」などの長文を寄稿したりしていた

のだが、坪論家から、荷風のは、自然主義文学とはちがった享楽主義文学だと極められたりして、名声が急速に高揚したため、独自の重い地位に立つことになった。それに鷗外や上田敏の推薦によって新興の三田の文学部の主任になったので、彼は、一躍して、一つの団体の首領となり、それにつれて、自から意識して自然主義反対者らしく振舞うようになったのだ。

ところで、自然主義の一つの根拠地であった「早稲田文学」では、毎年の例にならい、前年度の傑(すぐ)れた作家を推薦するに当って、明治四十二年度の作家と作品のうち

からは、荷風と、その短篇集「歓楽」を選んだのであった。それについて、漱石門下の評論家阿部次郎などは、早稲田の態度を難詰した。自然主義の立場から荷風を称讃するのは不合理であると云うのだ。相馬御風など早稲田派の評論家は、議論大いに努めたのだが、多少たじたじの気味であった。当時は自然主義も世間的には衰運に向っていたので、この派の所論は世に重く迎えられなくなっていたのであった。私も当時そう思っていたのだが、早稲田文学派も、随分へまをやるもので、強いて理窟をつけて荷風を自然主義の方へ引込むようなことをしないで

もよかったのだ。抱月が藤村の短篇「壁」を褒めて、却って藤村の笑いを買ったようなもので、荷風を推薦して却って荷風一派に有難迷惑の思いをさせたかも知れなかったのだ。抱月は聡明であったが、一面馬鹿正直であった。

灰色の自然主義者が文壇の年長者年少者に嫌われれば嫌われるほど、艶のある荷風は讃美されだした。ゾラやモウパッサンには心酔して、西洋の自然主義文学には理解のあった荷風も、日本の自然主義者には全然好意を寄せなくなったようだ。大袈裟に云うと、荷風が一世を風靡し、荷風登場後間もなく、谷崎潤一郎、長田幹彦など

が文壇に現われるにつれて、自然主義はますます色が褪(あ)せるようになった。いつの世にも雷同を事とする文学青年も、自然主義を去って、所謂享楽主義なるものに憧憬するようになった。独歩が茅ケ崎の南湖院で病死したのは明治四十一年の六月であって、あの頃の前後数年間が自然主義の全盛期であって、人気の落ちるのを急転直下の勢いでガラ落ちに落ちたようであった。それでは、自然主義はお祭騒ぎ見たいなものであったのかと云うと、決してそうでなかった。表面的人気が衰え、囂(やかま)しい賛否の議論も鎮まり、雷同者も離れるようになってから、

本当に身の入った自然主義作品が現われるようになったのだ。起るべくして起ったこの派の文学が、そう手軽に消滅する筈はなかった。

藤村が「家」を書き、秋声が「黴」を書き、花袋泡鳴も次第に進境を見せ、秋江小剣、或は加能作次郎のような新作家も、それぞれに独得の自然主義的作品を発表するようになったのであった。そればかりでなく、漱石や鷗外のような自然主義反対者でも、知らず知らずこの派の感化を受けたような作品を綴るようになったのだから面白いのだ。

五

青年の夢を唄い、若い情熱を詠じた詩人藤村は、詩から散文に移って、人生の真相を探究する小説作家になったのである。「若菜集」は柔(やさ)しく清らかで、この作者の後年の小説と同じ系統に属するものとは思えないようだが、藤村の憂鬱な作品が、青年読者にも愛読され尊重されたのは、初期の抒情詩に於て強く読者の心を捉えていたためであった。六人の処女なんかを唄って、「をとめ

ぞ経ぬるおほかたの、われは夢路を越えてけり。わが世の坂にふりかへり、いく山河をながむれば、水静かなる江戸川の、ながれの岸に生れいで、岸の桜の花影に、われはをとめとなりにけり。都鳥浮く大川に、流れてそゝぐ川添ひの、白すみれさく若草に、夢多かりし吾身かな」と云ったような、可憐な詞句を連ねた作者は、あどけない夢をかなぐり棄てて、自分が経過した艱難な現実の生涯を、有るがままに凝視して、有るがままに描写するようになった。自然主義の作家は、花袋をはじめ、泡鳴でも秋江でも、秋声でも、末流の作家でも、みな自分の一

生の経路を作品の形で告白したのであったが、藤村ほど秩序整然として、幼年より晩年までを、遺憾なく叙しつくした者はなかったように思われる。「生立ちの記」「桜の実の熟する時」「春」「家」「新生」などの長篇を続けて読むと、明治大正の時代を背景として、一人の人間の生涯がハッキリ目に映じるのである。「破戒」の次ぎに執筆した最初の自伝的小説には、抒情的風致が漂っているが、その次に書かれた「家」は厳粛なる世相描写である。自己と身辺の微細な現実記録である。自然主義作品の代表作として取上げていいと、私はかねて思っていた

が、今度新たに読直して、殊に感銘が深かった。私はこの長篇によっていろいろなことを考えさされた。

年譜を見ると、明治四十二年に、「家」上巻に着手すと書いてある。下巻は翌年に脱稿した。そして夫人の冬子がその年に逝去している。私はこの長篇に連関して思出すのは、自分が読売新聞記者として、美術文学方面を担任していた時、社命を奉じて、藤村を浅草新片町に訪問して、連載小説の寄稿を依頼したことである。私は例の如くブッキラボウに頼んだのだが、彼も例の如く重ったるい口調で、うれしそうでもなく、いやでもないと云

った態度で、依頼に応じた。「原稿料は？」と私の方から訊くと、「天外氏と同じくらい」と答えられた。当時の読売では、天外に最も高額の稿料を払っていたのであった。一回五円であった。話の極ったあとで、彼は私と一しょに外に出で、近所の小公園へ入って、共同ベンチに腰をおろして、お互いに感興のない世間話をポソポソと取りかわしたのであった。

この時の小説が「家」であったが、挿絵は入れられなかったと、私は記憶している。花袋の「生」にも露伴の「天打つ浪」にも挿絵が用いられたのに、「家」にはそ

れがなかったのは、何故であったか。私は記憶していない。挿絵の有無は別として、この小説は読者受けはしなかった。文壇の注意も惹かなかった。私自身も殆んど読まなかった。社の方では評判のよし悪しを気に掛けてはいないようであったが、この長篇掲載中、老社長が逝去して、新社長が社の改革をするようになったので、この小説も一先ず打切ることになったらしかった。私は免職させられたので、その間の事情は分らなかったが、「家」は前篇だけ新聞に出て、後篇は、「犠牲」という題で中央公論に掲げられたのであった。兎に角、この小説が新

聞読者に受けなかったのは当然であって、私なんかも、この作品のなかに入り込むには可なり努力を要するのであった。

作者は、「破戒」執筆の際の態度とは異って、「家」に於ては、小説的筆法は少しも採用していない。自己の体験を披瀝するに忠実で、読者の思惑を顧慮しない態度である。凡庸人の日常生活を積重ねて進んで行くので、同じような場面が繰返されたり、瑣末な、面白くも可笑しくもない事件がたびたび取入れられたりして、こんな所が「有りのまま」主義の自然派小説の弊害であるかと、

私にも思われるのであるが、しかし、作為のない人生描写は、ところどころ、あまりに事実に即した有らずもがなの叙述があるに関わらず、読者の心に喰入るのである。「家」は、日本の伝統的家族主義の真相を如実に描写したもので、歴史的文献として後世に伝うるに価いしている。主人公三吉は、すなわち、島崎藤村で、新婚の妻を連れて、信州の小都会の私塾に薄給の教師として赴任し、青年期から壮年期にかけての何年かを其処で過し、そういう乏しい田舎の教員生活に、いつまでも安んじていられないので、志を立てて上京して、著述に従事した経路

に、読者は先ず興味を寄せるのである。島崎藤村に何の興味もない、ただの小説愛好者が、三吉を造り物語の人物として読んでいたら、面白味は半減されるであろうと思われる。この青年の三吉の過去は悲惨であったのだが、三吉すなわち、「若菜集」や「落梅集」の作者の若かった頃の生活が悲惨であったことを心に留めて、作者と共に人生の旅に上ろうとするのである。三吉は他の兄弟の知らないような月日を送ったことが多かった。兄の実が一度失敗したために、長い留守を引受けたのも彼が少壮な時からで、その間幾多の艱難を通り越した。ある時は

死んでも足りないと思われる程、心の暗い時すらあった。僅かに夜が明けたかと思う頃は、辛酸を共にした母が亡くなった。この艱難という言葉は、藤村の小説にも感想にも屢々用いられている彼の慣用語であるが、事実藤村の数巻の自伝小説を読み続けると、生きることの艱難が我々の胸にも浸込んで来るのである。あちら向いてもこちら向いても、艱難が人間の形を帯びて待伏せしているのである。多くの人間の生涯は大抵艱難の生涯なので、花袋秋声泡鳴など、人生の真実を描いた自然主義作家の作品のどれもが、人さまざまな艱難の生涯を記録してい

るのであるが、藤村の「家」には、生きる事の煩わしさ、苦しさが、他の作家のよりも、板についているといった感じがする。上っ調子のところもなく、性急なところもなく、生の苦悩を見詰め見詰め、静かに溜息を吐いていると云った感じがする。

三吉は婚期に達していたので、兄弟に勧められ、良縁を得て結婚して、家庭の生活費を得るために田舎教師になったのだが、婚礼のあった翌日、早くも、兄の実は、「三吉、宗蔵はお前の方へ頼む。今度田舎へ行くついでに、是非一しょに連れてってくれ」と云った。宗蔵とい

うのは、三吉の兄の一人で、病人で身内のものの厄介者であった。巣を造るか造らないに、最早こういう難題が持上ろうとは、三吉も思いがけなかった。この病人の世話はどうにか断ったにしても、兄弟縁者との煩わしい交渉は、たえず続いて、日本在来の風習たる家族間の相互扶助と云ったようなものが、人世を明るくするよりも、却って暗くすることを、この小説は私達に感じさせるのである。強請的援助が屢々求められるのである。私なども旧家に生れて「家」というものが、人間の住居している家屋だけではなく、精神的存在で、先祖以来の亡霊が

巣くっているし、家にかかり合いのある現存中の人間の心と心が絡(から)み合う所であると思っているが、藤村の「家」では、そこの関係者が、世間一般よりもしつこくもつれ合っているように感ぜられる。それだから、日本の伝統的の「家」の実景が濃厚にこの一篇に表現された訳だ。

三吉夫婦は、田舎で新婚の生涯をはじめ、借家の裏の、石塊(いしくれ)の多い荒れた地所を、自ら鍬を持って開墾し、野菜畠として、豆や馬鈴薯や葱苗(ねぎなえ)などを植えたりした。裏の畠に播いた莢豌豆(さやえんどう)も貝割葉(かいわりば)を持上げ、馬鈴薯も芽を出す頃は、いくらかずつ新しい家の形を成して行った。夏期

休暇になる頃には、妻のお雪の妹も東京の寄宿舎からやって来て、新家庭は順調になごやかな日々が過されそうであった。ところが、或日、三吉は偶然妻のないしょの手紙を見つけた。以前恋しい思いを寄せていた男への妻の返書を見つけたので、彼は俄かに激しい煩悶をはじめた。「家」は、はじめから読者を面白がらせるような小説的工夫は試みられていないのだが、自然にこんな小説的事件が起って、読者の心を惹くのである。世間に有り勝ちの有り振れた事件であるが、当事者には精神的打撃であるのだ。藤村の化身である三吉は、人知れず悩みだ

した。離縁ということも考えたのだが、「もし出来ることなら、自分が改めて媒妁の労を執って、二人を添わせるように尽力しよう」と考えたりした。こんな事を空想するのが、藤村臭とも云うべきもので、態度や言行が勿体(もったい)ぶっているとか、偽善的であるとか云われた所以である。

彼は、最初の自伝的小説「春」にその一面を描いているように、若かった時、家出、漂泊、或は死の空想などを経験したのであったが、「自分はまだ若い。この世の中には、自分の知らないことが沢山ある」と、こう考えて、一度破って出た旧い家へ死すべき生命も捨てずに戻

って来た。その時から、彼はこの世の艱難を進んで嘗めようとした。ところが、艱難は直ちに来た。「兄の入獄」「家の破産」「姉の病気」「母の死」など、彼は知らなくて可いようなことばかり知った。それで、旧い「家」には絶望して、一縷(いちる)の望みを新しい「家」に置いたのだ。そこで、自分は自分だけの生涯を開こうと思った。ところが、東京を発った時、知人が世帯持の話をして、「面白いのは百日ばかりの間ですよ」と云って聞かせたが、丁度その百日に成るか成らないかの頃、もはや自分の家を壊そうとは三吉も思いがけなかった。しかし、この事

件も、妻の冬子の方に深入りした疚(やま)しい事なんか無かったのだから、つまりは、三吉の方で却って種々と細君の機嫌を取り、機嫌を取りながら悶えるというような形を取っただけだ。事件が発展しないで、小説にも芝居にもならなかったのだから、普通の小説読者には飽足らぬ訳だが、事実がそうであるのなら、如何ともし難い。自然主義作品の自然主義作品たる所以である。

間もなく子供が生まれた。しかし三吉は、女というものを知りたいと思うことが深かったかわりに、失望することも大きかった。どうかすると、往時の漂泊時代の心

に突然帰って、子も置き妻も置いて、自分の家を出てしまおうかと思うこともあった。こういう気持のしているところへ、曽根という、音楽に一生を託しているような婦人が、近所の避暑地、すなわち軽井沢に来ているのを知って、三吉はその知合いの女性に会いたがった。しかし、妻は夫がそういう女性を褒めるのを好まなかった。どうしてこう女同志は友達になれないものか知らんと、三吉は嘆息することもあった。曽根は一二度三吉の家を訪問した。三吉は一度妻にないしょで、曽根を軽井沢に訪ねた。このあたりが、巧まずして自然に小説的になっ

て来るのだ。「水彩画家」という短篇は、この時の事を小説化したものなのだ。ハウプトマンの「寂しき人々」と心境が似寄っている。この「寂しき人々」は、当時の自然派的作家には愛読され共鳴されたのであった。「中年の恋」という事も文壇の流行語となったが、これは、自然主義の重な作家が三十も半ばを過ぎて、凡庸な家庭生活に倦んで、新たな恋を夢みるようになったためである。「水彩画家」にも、家事にのみ捉われている凡庸な妻に飽足りないで、知識や芸術の上で理解のある女性を思慕する気持が現われているのだが、それは小説化され

たもので、「家」には小説化されないで、自然に小説的の味いを有った叙述があって、人生味一層豊かなのである。

三吉が妻に黙って、曽根を軽井沢に訪問したことが妻の心を傷つけ、夫婦間の悶着の種になり、「暇を呉れ」だの、「家を解散する」だのと、もつれた話となったが、こんな事も世間有り勝ちの事である。しかし、女性に対して関心の強い藤村の、女性愛慕の思いが、艱難な生活の間に多少の色彩を施しているのが面白いし、それだからこそ、この長篇を小説として読む人もある訳なのだ。浮世は女の事と、金の事。この小説に於ても、この二つ

が一篇を貫いているのだ。「或日彼は学校の方にいて、下婢が持って来た電報を受取った。差出人は東京の兄の実で、直ぐに金を送れとしてある。しかも田舎教師の三吉としては少なからぬ高である。兄弟とは云いながら、殆んど命令的に金の無心をして寄越した電報の意味を考えつつ三吉は家へ帰った。委(くわ)しいことの分らないだけ、東京の家の方が気遣わしくもある。そして小泉の一族の上に、何となく暗い雲を待設けるような気がした。三吉は断りかねた、と云って、余裕のあるべき彼の境涯でも無かった。お雪もそれを気の毒に思って、万一の急に備

えるようにと父から言われて貰って来た大事な金を送ることに同意した。三吉は電報為替を出しに行った」

ところで、十一月に入って、また兄は電報を打って寄こした。そうそうは三吉も届かないと思った。しかし、弟として出来るかぎりの力を尽さなければならないような気がした。せめて全額でないまでも、送金しようと思った。そのために、三吉は三月ばかり掛ってようやく書き終った原稿も売ることにした。金のための苦労がこの一篇には連続して現わされている。金の苦労、金さえあれば解決されることが、藤村流にじっと見据えられてい

る。彼は兄の一人からの通知によって、長兄の実が、またまた入獄したことを知った。度々実から打って寄こした電報の意味を了解することが出来た。実が残して行った家族、妻や二人の娘、他へ預けている病人の宗蔵などは、こうとなると、三吉と次兄の森彦とで養う外にどうすることも出来なかった。夫婦は一層の艱難を覚悟しなければならなかった。後日、三吉はこの森彦に金の無心を云われた時に、云っている。「私はよく左様思うんですが、貴方にしろ、私にしろ、吾々兄弟の一生、いろいろ人の知らない苦労をして、その骨折が何に成ったかと

いうに、大抵身内のものの為に費されてしまったようなものです」と痛切な述懐をしている。こういう家族制度がいいものであろうか。この一篇は、ふるい家族制度は改革しなければならぬと読者につぶやいているのである。「吾々は何処へ行っても、みな旧(ふる)い家を背負って歩いてるんじゃありませんか」と、三吉は兄に訴えている。日本はいろんな方面でこの旧い家を背負って歩いているのである。

三吉の姉のお種が、この日常生活小説の舞台に登場してからは、局面が一転して、小説的光景が出現するので

ある。お種は、通りがかりに汽車の窓から、三吉の家族を一瞥しただけで山を下り、夫に送られて東京から国府津へ出て、そこから独り汽船で伊東へ行ったのであった。夫が東京の家を出て行方不明になり、お種は余儀なく数ケ月も、伊東の温泉宿に滞在することになったのだが、このあたりは、藤村は三吉を離れて、お種の身辺を描写しているのだ。従ってこのあたりは、自然主義特有の「私小説」ではない。泡鳴が力説した一元描写主義には違背しているのだ。藤村は、兄弟縁者及びお種自身から聞取った材料を空想で按排して、一つの人世図をそこに描出

しているのだが、この辺の叙述描写には苦渋の跡があり、乾涸(ひか)らびているようである。三吉の顔を出しているところほど生々としていない。三吉が出場して、三吉の目であたりを見ているところは、瑣末な平凡な日常生活が書かれていても、真実の光が差している。同じ小説のうちでも、「私小説」分子の方が空想小説風の場合よりも、傑れているのは、この作者に空想の力創作の才能の乏しいことを証明していると云ってもいいし、私小説の強みがそこに見られると云ってもいいのである。一元描写にのみ拘(こだ)わる事は、文学をせせこましくするのだが、自分

の目で直接に見、自分の耳で直接に聞いたことほど確なことはないので、そこを根拠として、人世を描くのが、普通の作家としては、手堅くって間違いも少いのである。天馬空を往くような、空想力豊かな天才は別だが、そんな作家は、近代の日本には出現していないし、また出現しそうでないのだ。私が自然主義作家中の第一人者として推讃する島崎藤村にしても、その空想力のいかに貧弱であることよ。

お種も、三吉の眼界に入って来ると、いきいき活躍しだした。お種の子の正太や嫁の豊世が出て来てから、世

界が少し広くなった。この作中に現われているいろいろな女性のうちでは、お種が年を取っていて、頭の調子が少し外れているためもあって、よく写し出されている。藤村も女性描写の巧みな作家でない。妻の冬子は子を生んで、まめまめしく家事を営む普通の日本女性として一通り書けているに過ぎない。彼女も、艱難を口にし筆にし、艱難に堪え忍ぶ夫に追随して艱難な生涯を過したので、「これが普通の日本の女性の生涯か」と、当人のために物足らぬ気持がされるのである。年譜によると、「家」下巻の完成の年に冬子は逝去している。「新生」

の記述によると、結婚十二年で、七人も子を産み、七人目のお産の時に故障が起って死んだのだそうだ。彼女は多くの日本の女性のように多くの子を産んだ。女は子を産んでそれを育てるだけのものだと云った印象が、この女性からも与えられる。「新生」の記述によると、「父さん、私を信じて下さい。私を信じて下さいと、園子（家のお雪）が彼の腕に顔を埋めて泣いた時の声は、まだ彼の耳の底にありありと残っていた。岸本（家の三吉）はその妻の一言を聞くまでに十二年も掛った。園子は豊かな家に生れた娘のようでもなく、艱難にもよく耐えられ、

働くことも好きで、夫を幸福にするかずかずの好い性質を有(も)っていたが、しかし、激しい嫉妬を夫に味わせるような極く不用意なものを一緒にもって、岸本の許へ嫁(とつ)いで来た。自分はあまりに妻を見つめ過ぎた。と、左様岸本が気づいた時は既に遅かった。彼は十二年もかかって、ようやく自分の妻とほんとうに心の顔を合わせることが出来たように思った。そして、その一言を聞いたと思った頃は、園子はもう亡くなってしまった」と云うのである。気の毒な、当人としては心残りのされるような生涯であったと云っていい。お種は自分を棄てた夫をまだ思

い切れないで、弟などから後家あつかいされるのをいやがり、「後家になって、何の好い事があらず」と力を入れて云った。「そりゃ、若くて後家さんになるほど困ることは無いかも知れません。しかし、年をとってからの後家さんはどうです。重荷をおろして、安心して世を送られるようなものじゃ有りますまいかね。人にもよるかも知れませんが、こう私は、姉さん位の年頃に成って、子のことを考えて行かれる後家さんが一番好かろうと思うんですが」と、三吉が云うと、「まあ、女に成ってみよや」と云って、姉は取合わなかった。これは、彼女の

頭の調子外れになっているための言葉でなく、意味深き言葉である。三吉の藤村は、その後、妻に死なれた時、書斎の壁に向いながら、「あああ重荷を卸した。重荷を卸した」と思ったと、後年の自伝的作品「新生」に於て述べている。「こんな偽りのない溜息が、女のさかりを思わせるような年頃で亡くなった園子を惜しみ哀しむ心と一しょになって、岸本には起きて来たのであった。妻を失った当時、岸本はもう二度と同じような結婚生活を繰返すまいと考えた。両性の相剋するような家庭は彼を懲(こ)りさせた」と述懐しているが、事実はそうは行かな

かった。姉のお種に向って、「後家になって、重荷をおろして、安心して世が送れる」と云った彼も、自分が男やもめになると、重荷をおろした安心は永くつづかないで、自分で重荷を背負うような破目に陥るのであった。「家」の三吉のような、「新生」の岸本のような、考え深い、勿体ぶった、自分の家を修道院にでもしようと空想していた男でも、現実に於てはそうは行かなかった。人間の本能の力は如何ともし難いのである。

「家」の後篇では、お種の子の正太、すなわち三吉の甥が出現して活躍するので、作品がいくらか陽気に派手に

なるのである。自然主義的私小説では、作家の身辺に、何か面白そうな事件が起ったり、面白そうな人物が出て来なければ、小説を面白くしようがないのだから、不便である。藤村は、「破戒」時代とは異り、自己の自伝的作品に面白づくの作り事を挿入して読者を喜ばせようとは毛頭考えていなかったに違いない。それで、甥の正太が出て来てくれなければ、この長篇は甚だくすんだものになり切ったかも知れなかった。正太は甥とは云え、三吉とは年齢が二三歳の相違に過ぎなかった。この男も、父が投出して置いて行った家の後仕末もせねばならぬの

で、「家なぞはどうでもいい」と、よく昔思い思いしたのに関わらず、いざ旧い家が壊れかけて来たと成ると、自分から進んでその波の中へ捲込まれて行ったのだ。藤村はこの一篇に於て、「家」を問題としているので、家と人間との交渉について絶えず目を注いでいる。

正太は金儲けをするために相場師になったりした。相場師になると、直ぐにその社会の風習に倣って芸者遊びなどした。三吉も甥に誘われて、幾度か遊興の社会に身を置いたことはあったが、それは傍観的で、自分から進んで、積極的にこの境地を楽もうとする気持にはならな

かった。それは、金に乏しいためでもあり、性分にも由(よ)るのであった。正太と同業の榊(さかき)は、三吉をある部屋へ案内するとともに、そこの障子を開け払って、「君、こういうところへ来て楽めるというのも矢張――」「金！　金！」と、正太は榊がみんな云わないうちに言った。榊は正太の肩をつかまえて、二度も三度も揺った。「然り然り」という意味を通わせたのである。

この時分には、三吉は、田舎教師を止めて信州の山から東京へ出て、郊外の家で著述に没頭し、三人の子には次から次へと死なれ、完成した著書によって名声を得て

いたのであった。住所も郊外から下町に移転していた。著作家としても三吉は確固たる地位を占めていて、正太は料理屋の女中に向って、「私は何と見えます？」とか「この二人は株屋に成りたてなんです。まだ成りたてのホヤホヤなんです」とか云って、「あれ、兜町の方でいらっしゃいましたか。あちらの方は、よく姐(あね)さん方が大騒ぎをなさいます」と云われて、悦(うれ)しがるような程度のチャチな相場師なのだが、実生活に於ては、この著作家の方が乏しい生活をしなければならなかった。自然主義全盛期であり、その派の文学では一流の地位にあったこ

の作家でも、物質的には恵まれていなかったことは、この小説を読むにつけても、推察されるのである。ある日も三吉は、姪のお俊の結婚費の一部を負担させられたり、病人の兄の扶養料を負担させられたりしたあと、自分の仕事部屋の黄ばんだ壁にあたる光を眺めながら、仕事仕事と云って、彼がアクセクしていることは、唯身内の者のために苦労しているに過ぎないかとも思われたと云っている。

ところで、この一篇のうちで、看過しがたい大切な所は、三吉がまだ郊外生活をしていた頃、妻のお雪が子供

や下婢を連れて、北海道の実家へ暫く行っていた間の心の動揺である。ある晩のことであった。それは草木も青白く煙るような夜であった。彼は姪のお俊を連れて、養鶏所の横手から彼の好きな雑木林の道へ出た。月光を浴びながら、それを楽んで歩いていると、何処で鳴くともなく幽(かす)かな虫の歌が聞えた。不思議な力は、不図(ふと)姪の手を執らせた。それを彼はどうすることも出来なかった。

「こんな風にして歩いちゃ可笑しいだろうか」と、彼が冗談のように言うと、お俊は何処までも頼りにするという風で、「叔父さんのことですもの」と平素の調子で答

えた。その日から、三吉は成べく姪を避けようとした。避けようとすればするほど、余計に巻込まれ、踏みにじられて行くような気もした。彼は最早、苦痛なしに姪の眼を見ることが出来なかった。どうかすると、若い女の髪が蒸されるとも、身体が燃えるともつかないような、今まで気のつかなかった、極(ご)く極く幽かな臭気が、彼の鼻の先へ匂って来る。それを嗅ぐと、我知らず罪もないものの方へ引寄せられるような心地がした。この勢いで押進んで行ったら、自分はつまりどうなると、彼は思って見た。「おれはもう逃げるより外に仕方がない」到頭、

三吉はこんな狂人じみた声を出すようになったのだ。

私などは、読みながらハラハラして、早くお雪が帰って来ればよいがと待設けた。そして、「只今」と、お雪が子供の種夫を抱きながら、車から下りたところで、ホッとした。三吉自身も、子供のウマそうに乳を呑む音を聞きながら、「ああ好いところへ、お雪が帰って来てくれた」と思ったのだ。留守役を勤め終ったお俊は二三日過ぎて自分の家へ帰って行ったのだが、「すっかり私は叔父さんの裏面を見ちゃってよ。三吉叔父さんという人はよく解ってよ」こう骨を刳(えぐ)るような姪の眼の光を、三

吉は忘れることが出来なかった。家の生活で結びつけられた人々の、微妙な、陰影の多い、云うに云われぬ深い関係、左様いうものが重苦しく彼の胸を圧して来た――叔父姪、従兄妹同士、義理ある姉と弟、義理ある兄と妹――

兄弟同士親類同士で、自発的に、或は強請されて、援助し合うのは家族主義の美点か知らないが、しつこたらしい交渉が厭わしい結果を齎(もたら)すこともあるのである。家族縁者同士で、狭い世界で纏(まつ)わり合って互いに苦しい思いをし合っているように、この小説を読みながら感ぜ

られる。正太の相場師業なんか幼稚なもので、折角の志も遂げられなくて、三吉に借金の判を捺して貰いたいと云出すような有様であった。この正太はついに名古屋で病死した。この親しかった甥の死の知らせに接した真夏の蒸暑い晩、三十三の厄年で七度日の懐妊をしているお雪は、横に成りながら、夫といろいろな話に耽った。自分達のこれまでの事も話し合った。「お雪、何時だろう。そろそろ夜が明けやしないか」と云いながら、三吉は雨戸を一枚ばかり開けて見た。屋外はまだ暗かった。

「屋外はまだ暗かった」で、藤村最大の長篇は完結して

いるのだが、「家」を読み終ると、そこには、何の晴々した解決があるのではなく、憂鬱な思いに読者の心は包まれるのである。「どうかして生きたい」と、みんながそれぞれの苦しい生き方をしているのだ。そういう意味で、私は感銘深くこの一篇を読んだ。作中に、宗蔵という病人の兄があって、周囲の者に迷惑を掛け、死ねがしに扱われているが、これも今の世の一つの標本的人物として私などの心を惹くのである。「ほんとに、宗蔵の奴は困り者だよ。人間だから、ああして生きていられるんだ。これが若し、獣物(けもの)で御覧、あんな奴は疾(と)っくに食わ

れてしまってるんだ」「生きたくないと思ったって、生きるだけは生きなけりゃなりません。宗さんも苦しい生活ですね」「いえ、第一、彼奴の心得方が間違ってるさ、廃人なら廃人らしく神妙にして、みんなの云う事に従わんけりゃならん。どうかすると、彼奴は逆捩(さかねじ)を食わせる奴だ。だから世話の仕手も無いようなことになってしまう」「一体吾々がこうして、殆んど一生掛って、身内のものを助けているのは、それが果していい事か悪い事か、私には解らなくなって来ました」

生きるだけは生きなければならん。そのための悩みで

ある。木曽山中に生れた一家族が、世間へ匍(は)い出して、如何に生きんかと悩んだ有様がこの一巻にねばり強く写し出されているのである。面白く読まれる小説ではないが、感銘の深い作品である。自然主義にも弊害は多いであろうが、「家」の如きは、明治時代の自然主義作品として、後世に伝うるに価いしているのではあるまいか。藤村の知己であった中沢臨川は、「家」の序文に於て、「著者を外国の作家に較べて、風格の似た人を索(もと)めるならば、第一にツルゲーネフであろう」と云い、生活の状態から感情の発露までよく似ている。両者ともリアリス

トでありながら、心底は詩人であると云っているが、少くも「家」は、決してツルゲーネフ張りの小説ではない。ツルゲーネフのどの小説よりも「家」は、より多くの真実に富んでいる。小説は読者を楽しませるものであるとすると、「家」などは、優秀なる作品とは云えないのであろうが、人生を如実に写した作品は、兎に角尊重すべきである。世界古来の大作の側に並べて置くと、「家」なんかは、小さく慎ましやかに息をしている存在に過ぎないようであるが、小さいながらも、末永く存在して、腐ることのない作品であると思う。

藤村は、自伝的作品としては、「家」の次に、少青年時代を回顧した「桜の実の熟する時」を書き、それから、「新生」を書いた。藤村がフランスへ向って出発したのは、夫人の逝去後三年、大正二年の三月であったが、彼の洋行は文壇では大変な噂になった。「破戒」の執筆が大変な噂であったが、洋行はそれにもまして噂に上ったのだ。彼自身甚だ心苦しかったことであろう。藤村は平生寡黙な人であるが時々突飛な事をやると、その突飛な事に驚歎した者もあった。花袋は感激して、藤村と別れ難い思いをして箱根までも随いて行った。藤村は知人か

ら逃げよう離れようとしながら、いろいろな人が付纏った。彼は作品の価値を別にしても、明治以来の文学者中で、最も人望のあった作家であった。後日「新生」が出ずるに及んで、化けの皮が剥がれて、洋行は責任逃避のためであったのかと、あの時、一杯喰わされたのをいまいましく思うものもあったが、しかし作品「新生」は彼を救った。昔山田美妙は、女性に対する不徳行為が祟って文壇から落伍したが、しかし落伍した真因は、才能が衰頽したためであった。「新生」の自己告白は、「破戒」主人公の告白のような作られものではなかった。花袋の

「蒲団」のようなあまいものではなかった。

私は、自然主義文学の最好の代表作として「家」の解説を試みたのである。

六

自然主義の初期には徳田秋声はこの派の作家とは見られていなかった。紅葉の門下では、鏡花風葉秋声春葉の四人が四天王と云ったような地位にあったが、秋声ははじめから地味でくすんでいたので、風葉や鏡花ほどに注

意を惹かず、あまり批評に上らなかった。読売新聞に「雲のゆくえ」を掲げて、多少評判がよかったが、その頃の彼は通俗小説の範囲で筆を採っていたのであった。鏡花は特異の作家で、時代の新しい思潮に動かされるところはなかったのであろうが、風葉は、新に起った自然主義には関心を持っていた。秋声は積極的にこの派の文学に心を寄せていたようではなかった。その仲間に加わろうともしなかったようだ。しかし、彼の生れながらの素質が、自然主義文学に適していたので、努めずして時代の流れに乗じて、その方面の文学を製作するようになった

のであった。明治四十一年に、国民新聞の文芸方面の担当者高浜虚子に勧められて寄稿した「新世帯」には、秋声の小説として面目一新の趣きがあったのだ。「徽」は、漱石の推薦で朝日新聞に掲載され、これによって、この作者は小説家として一流の地位を占めるようになったのである。この小説は、漱石門下の人々にも讃美された。花袋や泡鳴の作品には反感を有っていた彼等も、論争なんかはしない秋声には好意を寄せていたらしく、淡々たる写実の妙味を褒めたたえていた。鏡花は別として、紅葉及びその門下の作家と作品は、次第に新時代の文壇人

や読者に見棄てられ、はじめ影の薄かった秋声が、独り世に重んぜられるようになったので、時勢の推移は計り難いものである。

秋声は勤勉努力の士ではなかったが、生活のために多量の新聞小説を書続けていた。読者受けのする小説は書けなかったようだが、しかし、寂しい地味な書振りのうちに、人生味は漂っていたので、可なりの掲載価値はあったのであろう。私が読売の文芸面を担任していた頃、彼の「凋落」と題する小説が連載されだした。秋江がそれを批評して、「書きはじめから凋落の有様ばかり出て

いるので面白くない」と云って、その論旨を新聞に寄せて来たので、私は、「自分の新聞に出している小説の悪評を、自分の新聞に出す法はない」と云って拒絶したのであったが、秋声は、「徽」だの「凋落」だのと、不景気な題をつけたがるのであった。当時の自然主義作家の作品は、陰鬱でじめじめしているのが多かったが、秋声のも大体鬱陶しいものであった。独歩は茅ケ崎の病院で、「僕等病人は、秋声君の小説のような陰気なものは読む気になれない」と云っていたが、自然主義作家のものは、文壇での評判はよくっても、多数の読者に喜ばれないの

は当然であった。藤村の作品には、思想的の傾向もあり、劇的分子もあって、退屈し勝ちな読者の心を惹き立てるところもあるが、秋声の小説は、凡庸人の凡庸な日常生活をそのままに書いて、それっきりのものが多い。当て気のない作家であり、当て気のない作品である。当て気のないのはいいとしても、時としては無気力に終始して、読みながら張合いのない思いのされることがないでもない。

「足迹」は、作者がまだ自然主義作家として認められなかった時分に読売新聞に掲げられたもので、無論読者受

けはしなかった。文壇の注意も惹かなかった。しかし、淡々たる客観的描写の妙は、秋声作中でもこの小説に最もよく現われていると云っていいのかも知れない。描かれたる人間は凡庸な女性である。描かれたる社会は凡庸な社会である。世の小説好きは、こんな小説を愛好しないにちがいない。花袋は、彼の主張していた平面描写の実現をこの小説に於て認めたらしく、「徽」以上の傑作であると、推讃していたようだが、この「足迹」とか、鷗外の晩年の史伝小説「渋江抽斎」その他幾多の同じ種類の作品とかは、自然主義作品としての模範的なもので

あると云っていいかも知れない。秋声は改造社の円本の、あと書きに於て、「自分はひどい無性ものである」と告白し、「自分はみずからの仕事を後から振返ることが出来ないほど、自分の仕事に自信がもてない。従って自分は作品を読みかえすのが、いかにも厭なのである」と云い、「原稿紙に書きおろした時も、自分は読みかえすということをした事がない」と云っている。自己嫌悪の感、これは一部の自然主義作家の心に存在していたのである。私などもこういう気持をもっていた。書きたくないけれど、生活のため、或は自己発展のために、努めて筆

を執るといった気持を私はたびたび経験している。インスピレーションに刺戟されて書くことなんかなかった。秋声の作品にもインスピレーションの産物らしいものは殆んど無かったと云っていい。花袋の作品は凡庸で、神来の興に駆られたらしいところは、何処にも見られないようだが、それでも、感傷気分に耽り、涙を流すようなところは、芸術感興に乗って筆が動いていると云っていい。秋声にはそれがない。私は彼の作品の全部を読んでいる訳ではないから、確かなことは云えないのだが、天来の興に乗り、陶酔気分で筆を走らせたことはなさそう

に推察される。

「足迹」のほかにも、「爛（ただれ）」「あらくれ」「奔流」など、市井の庶民生活を描叙した客観的作品で、秋声特有の小説分野が此処に存在しているのであるが、しかし、幾多の作品が、各種各様の趣きを鮮かに示しているとは云えないので、人物の表現、会話のやり取りに類似しているのが多い。世相を淡然たる筆で有るがままに活写しているとばかりは云えないので、秋声にでも描写の型があるのである。古今の作家の多くは、それぞれの型によって自己の作品を創製しているので、一々型を破って千変万

化の妙を尽している訳ではないのだ。それ故に、秋声は、「足迹」や「爛」などの本格小説に於て、自己の分野を確保しているに関わらず、「黴」を最初の試みとした自己の経験記録小説を、彼自身の本領とするようになったのだ。遅れ馳せに出て、元祖の花袋などを乗越して、「私小説」の本山見たいになった。次第に作者自身「私小説」に安んじるようになった。自から無性ものと認めている彼は、自分の日常生活を、ほそぼそと書いているのが、気骨が折れなくていいと、イージーゴーイングの気持から、そういう態度を採るようになったのかと、私は思っ

ていたが、「自然主義の荘厳」などと云うことを強調したのによると、「私小説」の極致に彼は荘厳を認めたのであろうか。無性な秋声がそんな心境に達したのは甚だ面白いのである。彼は、「私小説」以外のものは通俗小説であるかのような口吻を洩らしていた。

実際、いかに傑れていても「足迹」などは、「徽」をはじめとした自己小説ほどに、我々に感銘を与えない。「未解決のままに」とか、「風呂桶」とか「歯痛」とか云ったような、自己の悩ましい経験や、おりに触れての作者自身の心境を描叙したものの方に、痛切な人生味が

生き生きと現われていて面白い。ところで、秋声の「私小説」にも、私小説の弱点や欠点はところどころに現われているのだ。独合点（ひとりがてん）のところがある。K氏だのA氏だのと、知人の名前の頭文字を用いて、それが誰れであるかを読者に想像させるのも、本当は、渾然たる芸術翫賞を妨げる所行である。「私小説」を徹底させるのなら、みんな実名を採用したらよさそうである。実名を出して書くと、筆に遠慮があって、芸術の独立が妨げられる訳だが、そう云うと、K氏にでもA氏にでも遠慮がある訳である。実際、秋声にしても、藤村にしても、彼等の所

謂K氏やA氏に遠慮しているのである。

こういう事から思い当るのは、小説のモデル問題である。藤村は、早くから、「旧主人」や「水彩画家」や「並木」などによって、モデル問題を惹起したが、作家は、知人の行動をアケスケと小説に取入れていいのであろうか。日本では自然主義勃興以来、自分の事をそのままに書くとともに、身辺の知人の事をも、何かにつけて作中に取入れるのが常例となった。これも世界文学史上の特異の現象である。西洋でも、知人をモデルにした作品は少くないのであるが、大抵取扱い振りが日本とは異って

いるようだ。日本のようにこまごまと知人日常の言語行動を作中に取入れて、これを小説作法の常例として、作家も読者も評家も怪まないのは珍らしい。また、西洋では、モデルにされて、侮蔑的取扱いを受けたことに憤慨して、作家に対して決闘を申込んだものもあるのだ。日本では、はじめから悪意をもってモデルを取扱っている作品もあるのだが、文壇的にはそれが不徳行為のように見做されていないから不思議だ。

田山花袋は、独歩や柳田国男を屢々作中に取入れている。無論、親しみを持ち好意を持ち、時には敬意を寄せ

て書いているのであるが、それに関わらず、書かれる方では、いい気持はしなかったらしい。何だのかだのと、瑣末な事を書かれるのも、小うるさく思われていたらしい。自然主義盛んであった頃、竜土会の連中が、忘年会を、日本橋の料理屋蔵多家で開いた時、酒間、柳田はふと、例にない昂奮した口調で、「諸君、田山君が僕の話した樺太の事を小説に書いているが、あれは間違いだらけです。それから僕は日常、自由に生活する権利を持っているのに、僕の生活に立入って、何かと書立てられるのは甚だ不愉快です」と、花袋に対しての抗議を述べた。

花袋は首垂(うなだ)れて黙していたが、会衆一同も暫時沈黙を守った。私は柳田の感想には同感であった。志賀直哉は、或随筆に於て、「褒められても、悪く言われても、他人が自分の事を書いた場合には承認しにくいものだ」という意味の感じを述べていたが、人間心理は概してそういうものである。しかし、それだからと云って、モデルを用いず、或はモデルに遠慮してばかりいては、生々した作品は製作されない訳である。自然主義の態度を持した作品は出来ない訳である。自然主義以外の作家にしても、モデルに遠慮するようになったら執筆困難に陥るであろ

う。それで、このモデル問題はいつまで経っても解決されない問題のようである。

秋声の短篇小説には、茶の間文学と云われる種類のものが多かった。庶民の家庭生活が如実にそこに開展されているのであった。自然、同棲者たる夫人が頻繁に作中に出入して、その面目を現わして、一種の世話女房の型を示している。「坪内さんは極くいい意味の通俗作者だと思います」と、私に向って話していた藤村は、それに継いで、「徳田君は、家庭生活をよく書いていて、細君と長い間親しんだことはよく分るが、それにしては、細

君に対する愛情が足りない。愛情がもっと作中に現わされていなければならぬ筈だ」と云った。重に「徽」についての感想らしかったが、この批評は当っていないことはない。秋声は早くから、物分りのいい世間馴れた叔父さん見たいに、文壇では思われていて、熱狂したり惑溺したりする素質を有たぬ作家のように見做されていたが、抱月と云い秋声と云い、人は見掛けによらぬものである。夫人逝去後の晩年の秋声は、婦人に対して熱狂も し惑溺もしたのであった。若し夫人が長命を保ち、終りまで夫妻の同棲が続いていたなら、秋声の女性惑溺文学

は現われないで、秋声文学の一面は失われたのであった。小説作家と実生活の関係は密接しているので、天分と努力とだけで名文学が現われるとは限らない。境遇如何に依ることも多いのである。

紅葉門下の秀才のうち、柳川春葉は通俗小説家として成功していたが、同輩のうちで最も早く逝去し、小栗風葉は何に感じたのか郷里に隠退して、これも老境に達しないうちに逝去し、作風の全く相異っていた泉鏡花と徳田秋声とが文壇に栄えていたのであった。鏡花は一時自然主義に圧迫されて、原稿のはけ口も乏しくなったので

あった。「自然主義者は芸者なら不見転(みずてん)だ。自分達は芸で身を立てる」と云っていたそうだが、いかにも鏡花の云いそうな事だ。「新小説」の主任後藤宙外は、非自然主義を標榜して、鏡花などを仲間に入れて一団体を組織し、自然主義攻撃の演説会をやったりしていた。秋声が春陽堂で宙外に会った時、宙外は、秋声の態度を非難して、「君なぞは自然派の仲間入りをしなくってもいいじゃないか」と、詰問したそうである。秋声は黙って聞いていたが、あとで思出すと、不快の感に堪えられなくなって、手紙で抗議したそうだ。相手が宙外だからよかっ

たが、紅葉山人が早世しないで生延びていたなら、その門下のうち、秋声が最も苦しい立場に立つことになったであろうと想像される。露伴は学者として名声を保ち得られたのだが、紅葉はあくまで純作家として世に立つにちがいないから、時世の変遷に追随し得られない時の悩みを経験しなければならなかったであろう。そして、封建的師弟関係を維持しようとする紅葉は、門下生が師を凌駕して文壇に重んぜられるのを見て平然としていられなかったであろう。文学芸術の世界で、時代に棄てられるのは苦しいことであろうと察せられる。弟子に蹴押さ

れるのは無念であろうと察せられる。花袋は晩年、「落ち目になるのはいやだ」と述懐したそうである。

秋声は、巧まずして、その作品が自然主義の狙い所を摑んでいるように、玄人筋に云われていて、評判はよかったが、一般の読書社会に歓迎されたのでなく、その長かった文壇生活の間に華やかな時代はなかった。自然主義文学者で、豪奢な生活、華やかな生活をしたものは無かった。その道の傑れた作家が出なかったのは、日本の国民性に適しないのか。藤村には心酔者が多かったようだが、それは、新体詩の心酔者なので、小説家としての

藤村の崇拝者は新体詩から系統を引いていたのだ。鏡花はその作風が一種特別であったため、その小説の境地を愛好する読者があり、少数者ながら心酔者があったが、秋声など、自然主義系統の作家には、愛読者はあっても、鏡花に対するような心酔者はなかったようだ。その点では、鏡花は芸術家として幸福であったと云えるであろう。私は、秋声とは長い間親しくしていたので、藤村花袋独歩泡鳴などのような新時代の文学者らしく見られる人々と異った文人気質文人趣味に接触し得られたように記憶している。秋江は云っていた。「風葉や秋声の小説は、

漱石や藤村なんかのように机の上の理窟に捉われないで、世の中の事を書いているから面白い」泡鳴は「秋声にはこれが無い」と云って、指で自分の頭を叩いて見せたことがあった。私は一度徳富蘆花に会ったことがあったが、彼は「秋声君や春葉君は叩き大工から仕上げた人だから巧い」と云う意味の褒め方をしていた。秋声の小説には目標が無い。生存の意図がない。人生観が無い。技巧だけのものであるなどと、自然主義仲間でも云われていた。上べには見えなくても硯友社系統の旧さが心の底に淀んでいるのであろうと思われたりしていた。しか

し、それにかかわらず、他の同輩のように行き詰らず、とぼとぼといつまでも書きつづけられたのは、天賦の才能があったためであろう。彼は同輩の会合に於ても、あまり文学上の意見を述べることはなかった。他人の意見を身を入れて聞いている風でもなかった。彼は読書家ではなく、古今東西の作品をいくらも読んでいなかったようだ。そして、どういう作家に感化され影響されたということもなかったようだ。田山花袋などの、「自分の生活をそのままに書く」自然主義的作風によって世間並に啓発されたことだけが、他の作家から受けた最大の感化

であったのだろう。その作風を取入れては、あとは自分の好みで通って行けたのだ。彼は、青年時代に饗庭篁村(あえばこうそん)の小説を愛読したと云っていた。八犬伝は、犬山道節火遁の術のあたりまで読んで止めたと云っていた。私などの幼少の頃溺愛した伝奇小説に、彼は何等の興味も感じなかったことによっても、彼の文学的趣味好尚が推察されるのである。彼は師紅葉の感化も受けず、西洋のどの作家からも学ぶところはなかったのであった。

秋声は夫人逝去後、生活状態が変るとともに作品の内容も変って来た。「むしろ今までの生活の全部を洗いお

としたような、別の人間に抜けかわろうとした」と、自分でその頃の心境を述べている。「妻の突然の死によってひしがれた彼の生活は、それが幾分彼を家庭の窒息から免れしめる機縁となり得るにしろ、それだけに又、たとい一時であるにしても、翼の片方が折れてしまったか、片足がもげてしまったような生活上の支障を感じた。それよりも先ず第一に人の世のはかなさと、幸福の目の先に横わっている暗い陥穽(かんせい)の恐ろしさに戦(おのの)いた」と云っている。それが新たに遭遇した一女性によって、「彼はへたばろうとした地びたから、いきなり天上界への綱渡

りのような危い芸当へと引張りあげられた」と云い、「底の知れない、暗いとも明るいとも、恐ろしいとも、楽しいともつかない、地獄の口をのぞいて来たような、絶望と安易との孰(いず)れともつかない、黄昏(たそがれ)の寂しい空に懸っているような彼の心は、辛くも一女性によって、萎みがちな生命の衰えを支えていた」と云っている。「元の枝へ」と題する作品は、この転換期の作品で、私はこれを秋声後半期の作品中の代表作であると信じている。女性惑溺の悩みを、洗いさらい書き放った近松秋江の作品と似通ったところがあり、前期の秋声の作品の持ち味であった

平静さを失っているのであるが、そこに、人間の心理の動きに活気があり、行動にも生気があり、「足迹」や「爛」などには見られない面白味があるのである。父と子と新しい女性との交錯した行動の描写、会話のやり取りのうまさは、秋声作品中に於ても無類であると云っていい。しかし、「元の枝へ」を発端として、続々出現したこの系統の作品には、べたつくところ、ふやけたところが多く、読みながら、私は反感を抱かされることもあった。この作者は、若い時分に老人染みていて、老年に入ってから、ダンスなんかもやったり、いろんな女性に接触し

たりするようになり、若やいでいたようであるが、心の底には若い元気があった訳ではあるまい。還暦の祝賀会の時の挨拶に、彼は、「老に処するの難き」を歎じていた。ある感想文のなかに、「老境には老境の悩みもあるが、むしろ楽しみの方が多い」と云い、「それは段々に生活慾望が少くなると同時に、気持で生活を楽しむようになるからだ」と説明しているが、そういう超然たる気持になっていたのであろうか。彼の晩年の作品を読んで、私にはそうは感ぜられない。「老年の不幸は、友人がなくなることと、死の近づくことだが、しかし、大自然の

なかに生きている寂しさを味いつめたものには、それも大した悲しみではない」と云っているが、そういう超凡の境地に彼が達していたであろうか。私は疑いを持っている。秋声には悟りすましたところがない方が彼らしくていいのではあるまいか。花袋も晩年は宗教に帰依するような気分を現わし、藤村も「東方の門」あたりは大分悟った顔をしそうになったが、自然主義もそこらで行詰るのか。

秋声秋江泡鳴などには私は親しく交っていて、その日常生活について可成よく知っていた訳だが、作品を読ん

で、彼等の実生活が一層よく分ってくるのである。彼等は自分の行動や心理をよく小説の材料とした。自分で自分の身を喰って生きていたものである。花袋も藤村も、のこる隈なく、自分の為(し)たことを材料としたらしく見える。殊に彼等自然主義の作家がさまざまな女性関係について、隠すところなく記述したことは、文学史上前例のないことであった。夫婦関係についても、みんながこまごまとよく書いている。ところで、この有りのままに書く事、敢然として真実を記録し描写せんとする事は、何処まで徹底していたであろうか。実際の人物を知ってい

るだけに、小説中の人物と照り合せて、さすがによく描いていると感心することはよくあるが、何処まで真実を語っているかと疑われることもあるのだ。私自身でも、有りのままに自分や身辺の事をよく書いているように云われることがあるが、実は、世間の思っているほど自己告白をやってはいないのだ。そんなにアケスケと自分の所行を描出している訳ではないのだ。故意に本当らしく見せかけて嘘を云っている訳ではないのだが、書きたくないことは書いていないし、また一しょ懸命に本当の事を書いているつもりでも、知らず知らず真実を外れてい

ることが多いのである。

他の作家はどうであろうか。他の自然主義作家達は、私よりも一層深く、有りのままの自己を描き身辺の光景をも叙述しているようであるが、果して彼等の作品が真実に徹しているのであろうか。私は甚だ疑わしく思う。自分に都合の悪いところは除いているであろうし、取扱う人物について知らず知らず勝手な解釈を試みているのではあるまいか。突詰めて見ると、小説は絵空事で、水滸伝もモンテクリストも、藤村の「家」も秋声の「黴」も、絵空事である点で、五十歩百歩であると云えないこ

ともない。嘘のうちにまことが宿り、まことのうちに嘘が潜む、秋声の作品のうちに、たまに小生の事も取入れられているが、それは何でもない事で、柳田国男が花袋の作品に材料にされたとは訳がちがうのだが、そんな瑣末な事でも正確を得ているとは云えない。さすがに秋声の筆だけあって、表面はよく書いていると思われるが、こちらの心理はよく見破ってはいないのだ。花袋は表面も内面もない。随分そそっかしくて、真相を逸している。秋江は私の事を立入って作中に取入れているが、善悪如何に関らずよく間違っている。これによって見ると、相

手の女性が秋江の小説を読んだら、如何に間違いの甚しいのに呆れるだろうと推察されるのである。秋江は相手の女性を自己流に解釈していて、独角力（ひとりずもう）を取っているようなものである。しかし、秋江の小説の面白味はそこにあるのだ。人間通有の愛慾の悩みが、彼の小説には人一倍つよく現われているのに、読者は心を惹かれるのだ。

秋江は、昭和四年頃になって述べた感想のなかに、「今日になって読んで見て、決して作者自身は満足しているものではないが、後の読者は、これを文学史的に一参考として見てもらいたい。というのは、作者がこの作を成

したには、意識的に、当時の文学思想に反抗した意味が強かったのである。当時の文壇は、いうまでもなく、自然主義が風靡していた。作者は当時、そのあまりに極端に走りすぎた自然主義の無情緒主義に飽き足りなかったところから、故意にかかる情緒的のものを書いて見る気になった」と云っているが、これは後でくっつけた理窟で、事実は必しもそうでなかったと、私は観察している。彼の出世作と云っていい「別れた妻に送る手紙」が早稲田文学に発表された時（明治四十三年）は、自然主義文学も稍々飽かれかけていたのだが、秋江の心境はこの主

義に賛同も反対もしていたのではなかった。生活のために何かやらなければならぬと焦慮していた彼は、勿体ぶった本格的小説なんか書く素質も気力もなかったので、自然主義の自己告白的小説が文壇に跋扈(ばっこ)しているのに便乗して、自分の事を何でも書こうという気になったのであった。自然主義に反抗する為に、あんなものを書いたのではなく、むしろ自然主義に指導されて、ああいうものを書く気になったのだ。一たん道を開かれてからは、自己の文学的本領と、実生活上の経験とが合致して、彼独特の情痴文学を産出したのである。

女性関係の事件、情痴行為の描写に於て、自然主義非自然主義の別を見分けるのは六ケしい。自然主義的作法に於て完備しているように云われる秋声の描写と、情緒主義的作風の秋江のとを比べて見ても、主義の相違は分らない。しかし、二人とも情痴行為の描写は、多く類を見ないほどの妙所に達している。二作家の面目がありありと目に映るのである。秋江の「疑惑」は、彼一代の傑作であるが、女の行方をつけつ狙いつして、世上を彷徨する生存行動は、いたましくもあり、ユーモラスでもある。「黒髪」「狂乱」「霜凍る宵」など、女の幻影を追っ

て人生を流浪すると云っていいような作品である。別れた妻に対する疑惑から、わざわざ日光へ行って、一軒々々宿屋を訪ねて宿帳を調べて、最後に、彼の妻が若い男と名前を宿帳に並べているのを見つけて、手ばなしで泣くところなんか、花袋が蒲団を抱いて泣くところよりも、自然主義的筆法にかなっている訳だ。秋声の「元の枝へ」にも女の行方を捜しに行くところがあるが、ここも、彼の作品として、最も描写の冴えているところなのだ。ここでも神田あたりの宿屋を一軒一軒捜して、最後の宿で女の居所を突留めるのだが、それまでの径路を叙する筆

が、淡々として滋味に富んでいる。捜しあぐんで、発作を起して感覚を失ったあたりの行動や、その時分の父子の会話は、シェークスピアの或戯曲にありそうな感じがする。フォールスタッフなんかの出て来る或喜劇を読んでいるような気がする。藤村は、「ユーモアのない日は淋しい」と云うような事を云っていながら、一体に重くるしく、女性関係の描写でもユーモラスなところがない。

世の中のことは、金と女で運転するのは古今の定則で、「有りのままに描く」という自然主義小説の内容は、おのずから金と女によって構成されているのである。藤村

の「家」に関する苦労の重なるものは金のためであるが、若かりし独歩が妻に逃げられたのも、何よりも生活の貧しかったためであり、秋江が最初の妻に逃げられたのも、要するに生活難のためであり、秋声も口や筆で貧乏を訴えていた。私は、さき頃、小宮豊隆の「夏目漱石」伝を読んで、漱石が絶えず胃病や金のために苦んでいたことをいたましく感じた。ロンドン留学も、給与される一年間の学費が千八百円、一日に割ってただの五円では、しかも、そのうちから書籍を購ったというのだから、その余った金でロンドンのような物価の高い都会で、どんな

生活をしていたであろうかと、悲惨に感ぜられる。明治以来の日本の文学者は、第一次世界戦争までは、甚だ乏しい生活を続けていたので、殊に自然主義作品なんか売れるものじゃなかった。秋江が情緒的のものを書いたって、多くの読者の心は惹かなかったのだ。

谷崎潤一郎は、秋江の短篇集「黒髪」の序文に於て、この作品を推讃している。「作者は決して故意に自分の弱点をさらけ出そうとしているのではなく、むしろ自ら恥じてさえいるのであるが、それでいて恋慕の情抑え難きが故にしばしば取り乱し、甚だ節度を失っているので

あるが、人はこの作品を読んで、誰もこの作者の痴愚を嗤(わら)う資格のないことを感じさせられるであろう。ここにあるような人間の痴愚は、いかなる男の胸にも潜んでいるもので、ただこの作者のみがそれを正直に克明に描いているのであることを知らされるであろう。それがこの作品の魅力であって、情痴小説もここまで来れば一つの極致に達したものと云えよう。しかしこういう境はひとりこの作者の擅場(せんじょう)であって、明治以来の所謂大作家の人々、紅葉や露伴や、鷗外や、漱石にはこういうものは書けないのである」と云っている。鷗外や漱石に書けな

いばかりでなく、荷風にも潤一郎にも書けないのである。女性描写に興味を有ち、女性美に陶酔し、女性惑溺情痴生活の光景や心境は、作品の題材として絶えず取扱っていながら、潤一郎も荷風も、自己の実感を、秋江のように、或は秋声のように、むき出しに書こうとはしなかった。いつも芸術化している。情痴行為をも一種の芸術として読者に受け入れさせようとしている。これは古今東西の伝統的の小説家態度である。藤村は、事実を事実としてよく書くことは六ケしい。しかし、そこから進んで創作の域に達することは更に六ケしい。という意味の事

を云っていたが、秋江秋声、或は花袋泡鳴の自己暴露態度よりも、荷風潤一郎の態度の方が、創作の名にふさわしいのであろうか。芸者や売淫婦などを描いても、花袋秋声秋江などのは、「腕くらべ」や「濹東綺譚」に描かれているのとは趣きが異っている。不断着（ふだんぎ）と他所行（よそゆき）との差別がある。それでは、他所行はそらぞらしくて面白くないではないかと云われそうだが、私は必しもそうは思わない。どちらがどうとも概念的に断定されない。

私は、文壇人のうちでは近松秋江を最もよく知っている。読売新聞の編輯局に七年間机を並べていた上司小剣、

偶然知合いになり、住居が同じ町内であったため懇意になった徳田秋声。この三人とは文壇的に一群を成しているように思われているが、今秋声秋江の女性惑溺小説を読直したのを縁に回想すると、いずれも皆現実に於て、女性に悩まされていたことに思い当る。秋江は、あの頃、「馬鹿を尽した男」として見られていたが、それは、ひとりで胸にしまって置くことが出来ないで、自分で自分の醜態をしゃべり散らしていたためであった。口を慎んでいた小剣は、陰性であったが、女性に悩まされていた点では秋江と差別がなかったらしい。女性の種類は異り、

悩まされ振りに、それぞれの相違はあって、小説の色取りも相違するのであるが、女性から超然とした作家は、私の知人のうちに一人もなかったのである。それだからこそ、小説家として立身出世したので、女性から超然とするような人間離れした文学者には、ろくな小説は書けなかったであろうというのは、文壇的常識である。私もこの常識論に捉えられていたのだが、しかし、たまには、女性からも超脱して、人生を観察し人生を描写するような、作家や作品は出現しないものであろうか。超脱を装っているのでなく、真に超脱している作家が、自然主義

の作家のなかに無かった如く、自然主義以外の作家のなかにも無かったのであろうか。

七

自然主義者のグループに入らず、批評家どもにも、この派の作家として取扱われなかったに関らず、この系統の作品として優秀なものを産出した作家の一人は上司小剣である。中年の頃「鱧（はも）の皮」を「ホトトギス」誌上に発表して、俄かに文壇の注意を惹いたのである。私は今

度読直して、これこそ、自然主義作法の真髄を心得たような作品であると感じた。客観的描写が行届いているので世相が目に見えるようである。大阪の繁華街の光景が絵のように描かれ、作中の人物の言語行動が生けるが如く読者の心に映ずるのである。小剣の多数の作品のうちでも、これほど癖のない、醇粋（じゅんすい）な芸術品はないようである。年譜を見ると、「鱧の皮」の発表されたのは、大正三年一月で、自然主義の勢いもやや下火になった時分であるが、実質的には読み応えのする作品が続出するようになっていた。雷同者や末流は亡んで実力ある者が進

出するようになっていたのだ。

小剣は堺枯川などの社会主義者と親しくしていて、その感化を受けたのか、本質的にそういう思想を持っていたのか、「階級闘争」論など、当時の私などには理解し難いようなことを、寡黙な彼に似合わず、時としては熱烈に論じていた。彼の小説にも、社会主義的口吻を弄しているところが、おりおり見られた。無論後年のプロレタリア文学隆盛期の作家のように、ハッキリその態度を現わしていたのではなかったが、その作品のうちに社会問題に触れているところがあった。当時の自然主義者は、

政治問題や社会問題には、冷淡で、田山花袋の所謂「個」に執着して「全」を忘れるという有様であった。そして、木下尚江などのような社会問題を取扱う小説を一図に通俗呼わりしていた。日清戦争の時には、福沢諭吉にしても、内村鑑三にしても戦争を是認していたのであったが、日露戦役の時にも、文学者の気持は概して一般民衆と同様であった。岩野泡鳴は、頑強な日本主義者であり、政治を論じたり政治家を批判していたりしていたが、世間の常識と同様に、伊藤や大隈を偉大な政治家として讃美していた。近松秋江も政治話は好きであった、所謂床屋

政談程度で、仲間うちに冷かされていたくらいなものであった。自然主義文学に好意を持ち、藤村独歩などとも親しかった中沢臨川は、「ドレーフュス事件で奮闘したゾラはえらいと思う。フローベルのように隠遁的なのは物足りない」と云って、日本の文学者にもゾラのような態度を執ることを望んでいた。それから、「幕末維新頃の青年には、生命がけで奮闘する目標があったからいい、今日の青年にはこれがない。生存の張合がない」と云うようなことを云っていた。しかし、間もなく、プロレタリア思想、マルキシズムが勃興して、青年の目標が出来

て、臨川もそれに追随した評論を書くようになった。そして、「私は現代に於ていろいろの形を執って現われつつあるところの、芸術家や文学者の似而非(えせ)高踏主義を憎む」と云うようになった。享楽主義、人道主義が文壇に唱道され、三田派の作品、白樺派の作品が青年に喜ばれ、それに続いて、プロレタリア文学が一時文壇を風靡するようになって、自然主義は過去の残物のように蔑視されるようになった。しかし、打たれても、蹴られても、自然主義が息根を留められることはなかったのである。

自然主義は否定の文学のように、私自身は解釈してい

て、実際そういう傾向が、日本の文壇に於ても看取されていたが、しかし、今度諸家の作品を読返して見ると、彼等の生きんとする努力は強弱如何にかかわらず、そこに存在しているのである。「私のようなものでもどうかして生きたい」と、折に触れては思い詰めていた藤村の気持は諸家の作品のなかにも出没している。現実暴露の結果の懐疑幻滅に悩まされていたにしろ、心の底にはどうかして生きたいという気持が動いていたのである。片上伸が否定の文学と題して、ロシア文学を例として人間の否定の力を説いたことがあった。「否定の力のあらわ

れて来るのは、生命の動いている証拠である。否定は真によく大切なものを生かす。否定は真によく大切なものを育てる、否定することによって、心の泉が流れ動く。否定することによって、真に自ら生きる道を見出す」と云い、ロシアの真の文学が強い否定のなかから生れたことを説いている。日本の自然主義の懐疑幻滅感から、ロシアに見られるような偉大な文学の生れる事はなかったが、「苦しみ悩みつつ生きるという事」は、おのずからこの派の文学に根づよく現われるようになっているのだ。

秋江は情痴物から変化して、「子の愛」についてさま

ざまと書くようになった。花袋は「或僧の奇蹟」や「残雪」など宗教味のあるものを書きだした。藤村は、「新生」に於て、自分の苦悶の生涯を極点まで押し詰めて、それから、歴史小説の「夜明け前」や「東方の門」に心を転じた。秋声は「仮装人物」に於て究極の自己批判を試みるようになった。私は「新生」に於ける藤村の悩みや態度について感銘が深いが、今度読返して見て、この小説の甚だ不愉快であることも感じた。「新生の主人公ほどの老獪（ろうかい）な偽善者はない」と、芥川が云ったのは有名である。「新生」第十三章は、藤村の知人、藤村の愛読

者には、青天の霹靂（へきれき）のように感ぜられたであろう。

「私の様子は、叔父さんには最早よくお解りでしょう」と、姪の節子に云われて、岸本は、避けよう避けようとしたある瞬間が到頭やって来たように、思わず震えたと書いているが、藤村の知人も、仮面を剥いだ彼を見て驚いたのであった。藤村に敬意を持っていた花袋は、「新聞なんかに出される前に、自分で小説に書いて発表した方がいいだろうからね」と、皮肉を云ったそうだが、これは藤村に一杯喰わされたという感じがしたためであろう。藤村の洋行に感激して、新橋で別れるに忍びず、見

送りがてら、一しょに鎌倉へ行き箱根にも行ったりして感傷的気持になったことなんか思出すと、花袋は自分の甘さを歯痒(はがゆ)く思ったのかも知れない。藤村の秘密行為は、昔雇用していた老婢には知られていたのだが、その老婢の口から伝わって世間の噂になり、新聞にでも書かれそうな情勢になったのに、藤村は感づいて、先くぐりして自分の方から芸術的にこれを告白することになったのだと、まことしやかに唱えるものもあった。実際藤村は芸術の力によって救われたのであった。不徳漢として社会に葬られる代りに、賛否さまざまな問題を惹起した作品

を提出したことによって、芸術家としての名声を高めたのであった。性慾描写は自然主義の本領のように云われ、花袋秋江泡鳴秋声のいずれも、自分の性慾の悩みを追究し表現している有様は、文学史上前例のない光景と云ってもいいのであるが、藤村はこの点でも、他の同輩よりも深刻の域に達している。秋江の愛慾行動は類のないほど狂熱的であるが、藤村のはその狂熱が内部に沈潜しているので、表面的に立騒いでいる秋江よりも、もっと凄惨なのである。秋江の作品を読んで、よくもかく醜態を呈していると思うものもあろうが、藤村のは、見かけは

落着いていても、実質的には秋江以上の醜態なのだ。ああいう不倫行為があったにしても、世俗の強者は、いい減に処置していたであろう。世を恐れてフランスまで逃避したり、見苦しい煩悶苦悩はしなかったであろう。そして、「新生」の主人公は、あれほど後悔懺悔の気持を味わいながら、帰朝後はまた不徳行為を続けることになったのである。浅間しい次第である。見下げ果てた根性と云われそうである。しかし、人間はかかるものと云ったような感じがして、我々を長大息せしむる趣きがある。性慾を取扱う自然主義の行留りであるとも思われる。「復

活」のネフリュードフが堕落したカチューシアを見て、自分の昔日の罪過を思出し、人生の栄華を放棄して、彼女と艱難を共にし、贖罪（しょくざい）の道を歩むのに比べて、「新生」の主人公の行為は自分勝手である。徹底的な悔悟堕罪の行動はないのである。しかし、トルストイと藤村との素質の相違がここに見られるのではなくって、「復活」は作り物語であり、「新生」は事実の記録であるからだ。私はトルストイが理想化した人物ネフリュードフの崇高な精神に感歎するとともに、「新生」の愚かな所行に人間通有の心境を見て苦笑するのである。「真実の曝露と

いうことは弟の方から進んで受けようとした勘当ぐらいの程度に止まらないで、兄の方から宣告でも下したような義絶にまで導いた。それはまた、親の計画を齟齬(そご)させ、娘を親から反(そむ)かせ、混雑と狼狽とを親戚の間に蒔き散した」と云ってるが、イブセンの「野鴨」に現わされているように、真実の曝露は、この通りに周囲に迷惑を及ぼすのである。「しかし、岸本はもっと広い自由な世界を目がけて脇目もふらずに急ごうとした」と云っている。自己の身辺のものをして混乱狼狽させながら、自分の世界へ突進しようとするところに、自然主義者の本領があ

り意気込みがあるのであろうか。いろいろな意味で、日本のあの頃の自然主義は、「新生」に於てどん詰りまで達しているように思われる。どうかして生きようとした藤村は、このどん詰りの苦しい瀬戸を乗越して、兎に角生き抜いたのであった。

ところで、彼等自然主義作家を悩ました女性が、どれもどれも凡庸であり、知性に於て思想に於て感情に於て、冴えたところも光ったところも、豊かなところもなさそうに私には思われた。女性というものは普通こういうものなのか。男子の見た女性というものはこのくらいのも

のなのか。人間は身辺の手近い有りふれた女性のうちから、愛慾の相手を見つけて一喜一憂するのが常例なので、彼等自然主義作家と雖も自分の心魂をあれほどに悩ます力を持っている女性を撰ぶにも無雑作に撰んだのに過ぎないのであるか。「新生」の節子にしても、作家の観察が貧弱なのか、描写が薄弱なのか、身心ともに鮮明に現わされていない。熱烈な恋心なんか殆んど表現されていない。どの作家も自分にかまけて、客観的に相手の女性心理を洞察し、姿態行動の描写を巧妙に為し得なかったと云っていい。そして、どれもどれも或種の西洋の名作

に現われている「永遠の女性」と云ったような尊い、理想的の風趣を持っていないのである。どれもどれも薄汚い下界の女性に過ぎないように印象されるが、それだから真実性が豊富だと云えば云えるのである。

「若菜集」などの新体詩に於て、若い男女の感傷的情緒を歌った藤村も、自伝的小説に於ては、詩に現わされていたような空想的女性は表現されず、「新生」に取入れられたる重要な女性節子にしても、現実の彼女が凡庸であったように、作者のこの女性の心理の取扱い振りも、凡庸である。叔父のために、女としての一生を誤まされ

た節子の気持も作者たる叔父に取って都合のいいように書かれているに過ぎない感じがする。泡鳴の「征服被征服」を読むと、性慾に餓えた男が、どんな女性でも手に入れようとアクセクしている有様が、露骨に、しかし多少の滑稽味をもって叙せられているのに苦笑されるが、藤村は同じ心境行動をも勿体ぶって、考え深く叙述している。そして、藤村のは泡鳴のように汚らしい感じはしない。性慾を取扱う日本的自然主義作品の二つの種類として研究すべきである。泡鳴は、資本力の欠乏していたため、樺太の蟹の罐詰製造業に、はじめから失敗し、帰

り途に北海道をうろつき、無一物で、辛うじて東京に帰って来て、早速生活費獲得を志し、それと同時に女性に目を注いだ。後日「征服被征服」という題で書かれて、文壇で笑い話の材料にされた小説の書出しの所は、樺太の失敗で打ちのめされて帰って来た当時の、自己の身辺描写なのだ。（明治四十二年の冬の頃）

泡鳴の最も窮迫していた時分の自己告白なのだが「征服被征服」に筆を執ったのは、殆んど十年も後の事で、彼の生活も幾らか安定していた頃なので、筆力がふやけているようにも思われる。「放浪」「断橋」「発展」など

のような、窮迫時代に書いた窮迫小説の方に泡鳴一流の迫力が筆端からほと走るように感ぜられる。泡鳴が無飾無技巧で女を口説く有様、御機嫌を取る有様に、彼の人間性は出ているのだが、「征服被征服」に於ける彼の人間批判はふやけたもの、甘いものであるように、私などには印象される。彼は、文章などはどうでもいいように思っていそうに思われたが、見掛けに依らず、描写などを重んじ、藤村の説明的描写、花袋の描写的説明に比し、自分のは描写的描写であると思っていたらしいのは、一つの創作態度として是認すべきであろうが、泡鳴が自説

を具体化しているのではなかった。藤村は、自分の「性」の餓えにつき、本能の盲目的の迫力につき、泡鳴の所謂「説明的描写」を試みているのだが、これを泡鳴の描写に比べて、優劣よりも、作者の人柄の相違を見ることに興味が寄せられるのであろう。

「これは荒びたパッションだ。静かな愛の光を浴びたものとは違う。どうかしてこんなところを通越してしまいたい」と願った「新生」の主人公岸本は、その激しいパッションが稍々沈まって行った後では、それと反対な冷やかな気持が来て彼の胸の中で戦ったと云っている。そ

れで、相手の女性たる節子は、岸本の激しいパッションと冷やかな気持との犠牲になったのである。泡鳴も、幾人かの女性に対して、激しいパッションと冷やかな気持とを経験して、彼相応に処置しているのだが、内面の苦しみは藤村の方であるが、外面では泡鳴がボロを出して、藤村は体裁のいい収まりをつけるのである。

「岸本は自分の部屋を見廻した。声が来て独り仕事に親しもうとする彼を試みようとした。その声は大きな打消しの声というのでもなく、寧ろ細々とした小さな耳の底にささやくような声ではあったけれども、その

小さな声に幻滅的な心持を誘われるものがあった。その声は彼に訊いた。学問や芸術と女の愛とが両立するものだろうか。二人の結びつきは要するに三年孤独の境涯に置かれた互いの性の餓えに過ぎなかったのではないか。愛の舞台に登って馬鹿らしい役割を演ずるのは何時でも男だ。男は常に与える。世には与えられることばかり知って、全く与える事を知らないような女すらある。それほど女の冷静で居られるのに比べたら、男の焦りに焦るのを腹立しくは考えないか」

「征服被征服」の泡鳴にしろ、「新生」の藤村にしろ、

その行動態度に異同があったにしろ、「互いの性の餓え」に過ぎなかったので、人生の悲劇も喜劇もここから起ることを、藤村泡鳴も秋江も秋声も花袋も、読者に向ってよく示した。「女の冷静で居られるのに、男は焦りに焦る」というのも、藤村が、ここで代表的に批判しているようなもので、泡鳴秋江その他の自然主義作家の自己告白的小説には、みなその趣きが存在しているのである。泰然悠然としていそうに思われる藤村が実は焦りに焦っていたのだ。

それで、藤村の「エトランゼエ」は、類を絶した外国

旅行記であると私は思って、幾度も熟読して感慨を催したのである。愛する女性を伴って異郷に逃げたのなら、情趣豊かで自分で慰むるところが少くないだろうが、仮面を被って一人で貧しい異郷生活をするのは常人に倍した苦痛を味わわなければならなかったであろう。殊に日常日本趣味の生活振りを愛好していたらしい藤村にはフランス的文化生活も身にふさわしくなかったであろうと推察される。何のために巴里に滞在しているか。巴里で何を学ばんとしているか。年少の日本の画家などに取囲まれて何を楽んでいるか。傍人には不思議に思われてい

たであろう。

表面は、あたり前のフランス滞在記なのだが、「新生」に叙せられた作者の心境を想像しながら、この滞在記を読むと、とぼとぼとパリの町を歩いている筆者の淋しい影が見えるそうである。「フランス旅行者の群」と題して、「旅で逢った同胞の旅行者のことに成るべく自分の筆を限ろうとした。あの遠い空を渡る鳥の群のように、互に手を引き合って異郷を旅する海外旅行者の消息をいくらかでもここに伝えることが出来れば、それで私は満足する」と云っているが、私はそういう鳥の群のなかに、

この作者のような異分子がまじっているのに興味を持ち、作者の影の動揺に目を注ぐのである。

外国の旅行をしても、何年か外国に滞在しても、外人その者の内面の心理や外面の行動を、小説の材料紀行の材料として重く取扱うことは甚だ困難なことなのだ。自分の接触した一面を軽く書く程度ならいいが、西洋の社会を深刻に、或は豊富に描くのは不可能の事であると私は確信している。藤村がフランス旅行の日本人を題材として、「エトランゼエ」一篇を作り上げたのは賢明な考えなので、「旅で知合になったフランス人の家庭、そこ

で逢った人達、そこで聞いた言葉」などは、書いたって書き栄えはしないに極っている。こんなことは、書いて見たって、ちょっとしたお愛嬌になるだけだ。そんな現実の外国人や外国人の家庭なんかよりも、空想の外国人を作り上げて、それを相手にする気持ちになったところに、私は好感を抱き共鳴を覚えるのである。「エトランゼエ」の終りの方にこういうことが書かれている。「誰か部屋の扉を叩く音がする。何時から懇意にするともなく私の許へ来るようになった一人の外国人がある。日がな一日寂寞（せきばく）に閉される思いをしたり、訪れて来るものも

少い旅の窓に、国の方のことを案じ暮したりして、煤(すす)けた壁も慰みの一つに独りで時を送るような折には、きまりでその外国人が扉を叩きに来る。そして、私の前に肱掛け椅子を引よせ、そこに腰掛けて、しみじみした調子で私の話相手になってくれる」

筆者藤村は、いつの間にか、こういう空想のエトランゼエを相手にして、旅の朝夕を慰めるようになった。「慰め難い無聊(ぶりょう)と、信じ難いほどの無刺戟とから、私は全く外界に縁故もなければ関係もない自分を見つけることがあった。そして、寝る道具から顔を洗う道具から、便器

まで具えつけてあるような室内で、どうかすると、物食うことと、眠ることより外に自分を慰める方法もなくなって、昼飯が済めば夕飯の時の来るのを思い、夕飯が済めば早く寝台に上る時の来るのを思うような、そんな自分を見つけることすらもあった。そういう私の側へは、あのエトランゼエがやって来ていて、否でも応でも、私はその話相手にならねばならないような気がした」

外へ出て何か見て何か感じて下宿に帰ってから、独言でも云っていると、それをよく聴いてくれるのも、そのエトランゼエだ。幼稚な子供くさい事のようであるが、

分別盛りの四十代の藤村が異郷に於て、こういう心境に陥っているところに、私は自然主義の究極を見るような感じがするのである。現実に徹底せんとした果てが、空想に堕し、空想に慰藉(いしゃ)を求めるようになるのであるか。現実の恋愛を味い得ない男女は、空想の愛人を捏造(ねつぞう)して、それと起臥して慰めとすることもあり勝ちのことらしいが、異郷に於ける寂寥(せきりょう)の極は、作者好みのエトランゼエを空想裡につくり上げて、それによって自己慰藉を試みるのも一興である。藤村のフランス旅行記は、日本自然主義作品中の異色ある作品で、「家」と「新生」と、

この旅行記とに、最も濃厚に藤村の面影が現われていると思われる。日本人の外国旅行記は沢山あって、外国の風物、文化、人間などをよく観察し、研究したものも多いようだが、異郷に於ける自己を見詰めて、その真実の生活を描叙したものは少い。荷風の「フランス物語」は、青春の情熱をもって、フランスの生活を讃美した、傑れた旅行記であるが、藤村のは、中年者の苦渋に染みた生活記録見たいなものだ。文学者芸術家の外国旅行記になぜもっと面白いものが出ないかと、私はかねて思っていた。「外国へ行ったって、外国人を小説のモデルにする

訳には行かないだろうし、画家のようには、旅行も役に立たないだろう」と、花袋が云ったことがあったが、そういう意味の、材料取りに役立たないにしても、異郷に於て自分を見ることは、自分の真相を知る上に役に立ったろうと思われる。「世界を旅するのは、自分等を見つけに行くようなものだ。私はこの旅に上るそもそもの日から、それまで深く意識もせずにいた自分の髪を見つけ、自分の皮膚を見つけ、自分の眸を見つけた。そればかりでなく異郷に送る月日の多ければ多いほど、私は旅の空でめぐりあった多くの同胞から、それまで気づかずにい

たいろいろな性質のあることを学んだ」と藤村も云っている。皮膚の色や髪の色の差別から、東西相容れざるのは、はじめから分っていて、物々しく云うほどのことではないのだが、異郷の住みよさと、住みづらさは、人生の住みよさと住みづらさと連関して我々の心に印象されるのである。自国との煩瑣な繋累（けいるい）を切り離った異郷の生活は、気楽で、のびのびしていそうに想像されるが、実際はそうでないのか。日本人は他国で安んじて生活し得られないのであるか。兎に角藤村のフランス生活は苦役のようなものであったらしい。自分で自分に罪を科して

国外で苦役に服しているようなものだ。何かにつけて淋しがったり悲しがったりしているのは腑甲斐ないようだが、こういう境地に追いやられた一作家の存在を心に置きながら、「エトランゼエ」一巻を読んでいると、興味津々(しんしん)たるものがある。演劇見学のためシベリア経由でモスコウに来て、有名な芸術座を観た小山内薫は、ベルリンとロンドンの演劇をも一瞥して、帰朝を急ぐ短い時日を割いて、パリにも立寄って、藤村の下宿に泊ったのであったが、この二人の日本文学者は、ロシアの舞踏家ニジンスキーの舞踊を観た夜、火鉢も鉄瓶もない下宿の部

屋で、水を呑み呑み舞踊の話をしたのであった。当時の小山内は、新時代の演劇を創設せんと志して意気盛んな時であったので、憂鬱な藤村はどんな気持で彼に対していたことか。石原純河上肇などの新進の学者も、通りすがりに、このパリに立寄って、藤村の下宿で食事を取ることにしていたので、西洋対日本の批判が食後に盛んに取りかわされることもあって、河上は、「なあに六十人や七十人ぐらいのハイカラ者流がいたって、日本の国民がビクともするものですか」とか「まあ、五十年の後を見て下さい。なかなか日本もやりますぜ」とか、「愛国

心というものを忘れないで下さい」とか、青年気鋭の感想を洩らしていたが、憂鬱な思いを胸に宿していた藤村は、上べでは彼等の気焔の聞き役となり、お相手となって気を紛らせていたのであった。下宿の食堂で、藤村は、或独逸入とオペラの噂をして、自分には左程興味がないと云うようなことを云ったので、その独逸人は、欧洲第一とも云うべきパリのオペラを東洋人がケナしたと食卓の上で皆なに吹聴したので、藤村は左右から非難の鉾(ほこ)を向けられた。分らず屋だと云うことになった。うっかりした事を云うと、口の上で袋叩きに会わされるようなも

のだ。そして、藤村は成べく黙って暮すようにした。こういう時に、空想でつくり出したエトランゼエが唯一の慰め相手になるのであった。自分の云おうと思う事をよく聴いてくれるのは、このパリに於て空想裡のエトランゼエ一人なのであった。淋しい生涯である。暗澹たる生活のようである。そして、藤村の三年間のフランス生活は、その後の彼の作品の上にどれほどの影響を与えているであろうか。画家などとちがって、洋行前の作風や文章が洋行後に変化しているところは全く無いようである。「桜の実の熟する時」という、「春」以前の自己の

生涯を題材とした小説は、パリ滞在中に書かれたものだが、外国で書かれたという趣きは些しも見られない。小説家としての藤村は、洋行によって小説の領域が深まったのでも広まったのでもなかった。

小説修業としては、洋行は何の効果もなかったにしても、藤村も逃避行として西洋へ行ったのは、よかった訳だ。日本の文学者は一流の大家でも外国で生活費を獲得する方法がないから、長く外国に滞在して、気儘にくらすことは出来ないのである。いくら自国がいやになっても一生を他郷で生きることは出来ないのである。藤村も

はじめは、漠然一生を外国で過さんかと妄想したこともあったのであろうが、無目的な、貧乏な暮しに、いつまでも我慢し得られる筈はなかった。帰国の旅費にも窮するような有様で、日本の友人にそれとなく援助を依頼するようなみじめな気持になっていたらしかった。その援助は実現されたかどうだったか、よく分らないが、その話の伝えられた時に、或若い文学者が、「我々が望んでも実行の出来ない洋行をしている人のために我々の乏しい財布から、帰朝の旅費の援助をすることなんか、有るべき事か」と放言したそうである。しかし藤村の洋行は

ただの洋行ではなかった。「自分で自分の手錠を解き腰縄を解く思いをして、佗しい自責の生活から離れようとしていた」と云い、「還るのを赦されるのだ」と、自分で自分に云って見たりした。すべて、みじめであり、陰惨である。社会運動の闘士が、時世の変遷によって、大手を振って故国に帰るような壮快な心境とはちがっている。脱走していた殺人者が受刑を覚悟して帰朝する時には多少の悲壮の感じがありそうだが、藤村の場合は、すごすごと仮面をかぶったまま帰って来たのだ。海外にての三年間の苦行で刑期が満ちたように自分勝手に極めて

いるのは、傍観的には児戯に類するようだが、戦時以来旅の方法も尽きて、どうにも落着いていられなくなったのだ。それで自分で自分を許すような口実を設けて、三年前には神戸の港も見納めかと思ったりして出掛けた故国へおめおめと足を向ける気になったのだ。それから帰国後の冴えない愚図々々した生活が続いたので、「新生」は、東西の傑れた小説に見られるような小説的風趣は具えていないで、結末に至ると、歯切れの悪い結末振りを示しているだけだ。「小説でない小説」として、この作品は、是非如何を問わず、古今独得のもののように私は

思っている。懺悔録として読まれていたが、作者は懺悔録ではないようなことを云っていた。自己の人生経験を有りのままに、隠すところなく書くのが作家の本領であると信じて、そういう純粋の作家気質でこの一篇を完成したかというに、必しもそうではなさそうだ。黙っていては、いつまでも後めたい思いがされるから、芸術に托して自己告白をしたのであろう。密室で神に対すると云ったような気持ではなく、世間へ向って自己を投出して、どうにでもしてくれと云ったような態度をいく分持っていたようである。自然主義は作者を救ったようなもので、

こういう日本的自然主義の極致と云ったような「私小説」の作風で自己を現わし、読者がそれを受入れて呉れたので、世間的道徳の厳しい批判を免かれたことになったのである。

「新生」は、日本に起った自然主義文学の功罪を具体化した小説である。吉江喬松は、この小説をレアリスムの究極結晶であるとし、「日本に於ける現実自然主義の文芸は、この新生を得てはじめて睛（ひとみ）を点じ得たのである」と、激賞しているが、或点で、この小説は、日本的自然主義文学の究極であると私も思っている。「家」のよう

に作品として完成しているのではなく、ここには、日本的自然主義の弱点も弊害も現われているが、行くところまで行っている。藤村は身を以って日本的自然主義文学を押進めて行ったのである。

藤村はフランスに於ける忍苦三年の修業によって文学に一進境を示したのではない。彼は大作「新生」によって、生涯の彼の文学は一段落をつけ、その後の「夜明け前」や「東方の門」は余業のようなものであった。彼は「桜の実の熟する時」から、欧洲の思想や芸術の感化を受け、彼のいろいろな作品は、その感化の下に産出され

たのであったが、「夜明け前」にあるような、日本の伝統の思想や芸術は心の底に持っていて、歳を取るにつれて、日本的なるものが心のうちに豊かに流れるようになったらしい。花袋も西洋文学の感化により、新文学に志したとは云え、日本伝統の芸術観に指導されていたのであった。自分でそう云っていた。フローベルやゴンクールなどに教えられたところがあったにしろ、それよりも、自然主義的心境は、香川景樹系統の作歌態度と一脈相通じるところがあったらしい。花袋は、景樹の高弟、熊谷直好の歌風を推賞していた。自然の感じを、素直に有り

のままに歌うのに共鳴していたらしい。直好の和歌などは、文飾なく快く受入れられるのであったが、稍々(やや)もすると、「ただ言」歌になったようである。何の味いもない凡庸語を並べたに過ぎないのが多い。花袋などの小説に、凡庸な有りのまま主義の作品の多いのも、直好などと芸術境地を同じくしているためであるかも知れない。

自然主義と云っても、フランスの作品は、ゾラ、フローベル、ゴンクール、モオパッサンなど、絢爛(けんらん)であり、濶達(かったつ)であり、文学史上に華やかな光彩を放っているので、憂鬱だの陰惨だのと云っても、日本のそれのように、じ

めじめした薄汚さはない。「蒲団」「徽」「家」「毒薬を飲む女」「黒髪」などをフランス物に比べると、同類のものとは思われない。しかし、そこに日本の真実がある のであろう。薄汚くても、みじめでも、あの頃の実生活がそこに写されているのだから、止むを得ないのであろう。そして、私は、今度改めて日本の知人の作品を読直して、フランスの作品などとの甚だしい相違を痛感した。あの頃の東京と巴里との甚だしい相違のようなものであろう。河上肇が藤村などと、巴里の宿で雑感を吐露し合っていた間に、「まあ、五十年の後を見て下さい。なか

なか日本も遣りますぜ」と云った言葉は、私には藤村の紀行文中での感銘の深い言葉として心に残っている。今から三十五六年前に吐露された言葉である。あれから日本がどういう道を辿ったか。「なかなか遣りますぜ」と望みを嘱された日本は、どういうことを遣り出したか。あの時の一座の人々の予想もしないことが、続々と遣りだされたのであった。

文学の方ではどうであろうか。「五十年の後を見て下さい。なかなか日本も遣りますぜ」という程の進歩を続けたであろうか。

八

岩野泡鳴は、「君なんかもよく田舎の事を書いているが、作家は都会を書かなくちゃいけないよ」と云っていた。これに反して、小杉天外は、「小説は田舎の事を書くのがいい。田舎だと、或人物や或家庭を材料とする時に、その人物や家庭の先祖以来の経歴がよく分っているから、真相が書けるのだ。肉体上の遺伝でも精神上の遺伝でも分っているからいい」と、私に云ったことがあっ

た。私自身は趣味として、田舎を嫌い田舎言葉を嫌っていたが、何と云っても、生れ故郷の事は身についているので、たびたび小説の材料とした。そして、都会生活を取扱った作品よりも、田舎種の方が却って評判がよかった。言葉も子供の時分の印象はいつになっても抜け切らないもので、私の作中の人物には、私の故郷の田舎なまりが言葉のはしばしに附纏っている。如何ともし難いのである。

自然主義の作家には田舎者が多いと云われていたが、その通りであろう。紅葉露伴をはじめ、明治初期の作家

には江戸生れ東京生れが多く、従ってその人柄も意気であり洒脱(しゃだつ)であり、通人らしくもあった。そして、明治維新の大業が薩長などの田舎武士によって成遂げられたように、旧文学打破の文壇的大事業も、田舎出の文学者によって成遂げられたのか。

しかし、自然主義作家だって、特に田舎小説を書いた訳ではなく、たとえ、田舎の事を書いたって、紀行文的に山水の美を讃美したり、純朴な田舎者を画中の人物のように描いたりするのが多かった。農民や漁民の実生活を有るがままに観察して、その真相を深刻に描写するこ

とはあまりなかった。ロシアにでもフランスにでも農民小説は多い。古来農業によって国を立てていた日本では、文学の方面でも農村や農民生活には、早くからもっと関心を持つべきであった。自然主義的観察は農民生活の上にも向けらるべきであった。私など、田舎の小地主階級の出身であるが、現実の百姓の生活についてはよく知らなかったし、興味は無論無かったし、好意を寄せてもいなかったので、そういう事を材料として書きたいと思ったことはなかった。周囲の事に注意して考え込む藤村でも、信州の百姓については、断片的に書いている程度で

ある。「百姓」という言葉そのものが、今度の戦争以前までは、侮蔑的に扱われて、落語などでは農村人は滑稽の材料にされるに極まっていた。

それで、農民小説は、長塚節の「土」を、明治大正に亘っての第一の作品として推薦しなければならぬのである。この作者は、子規の門下であって、写生を重じ客観的に事物を描写することを心掛けていたらしい。「土」の作風こそ自然主義の骨法を心得たものと云うべく、この作者は当然、自然主義団体に属すべきものなのだが、子規の門下であり、「土」も漱石に推薦されて朝日新聞

に掲載されたので、自然主義とは別派のように見做されていたし、当人もそのつもりであったのであろう。文壇の党派別なんかいい加減なものである。節には、幾篇かの写生文的小品があって、文才を認められていたようだが、「土」は彼の全力を尽した堂々たる本格小説である。私は、藤村の「家」に於て、重くるしい陰鬱な人間生活を見たのであるが、「土」に於ても、重苦しい陰惨な人間生活を見るのである。救いのない人生がここに見られるのである。作者は描かんとする者についてよく観察し検討しているが、描かれたる世界に於て、希望をも光明

をも神をも見つけていないのである。見つけようともしないのである。この頃の農村は空前の変化を現わして、「土」の主人物たる勘次のような水呑百姓でも、豊かな暮しをするようになっているし、大正末期から昭和初期にかけてプロレタリア文学が出現してからは、農民小説に於ても、地主排斥小作人激励の調子を帯び、勘次なんかの貧苦は地主搾取の所為であると極めて、農地改革の気運を起さんとするのが常識となっているのだが、「土」にはそんな気振りはちっともないのである。この作者は、文壇の自然主義とは共通のところがあるが、社会主義に

はちんぷんかんぷんであったようだ。彼は大地主だか小地主だか兎に角土地所有者であって、額に汗せずして、他人の作った粒々辛苦の米穀を飽食していたのだから、小作人に対して同情なく理解なく、陰惨なる生活をただ陰惨なる生活として描くに止ったのであろうと、一理窟捻(ひね)る者もあるだろうが、私はあの頃の現実の農民をかくも客観的に、有るがままに描いた作者の態度を是とするのである。バルザックやゾラ、或はロシアのいろいろな作家の農村小説にあるような、狂暴な人物や狂暴な事件が出現しているのではなく、異常な事件や滑稽な事件で、

読者の興味をそそるのでもなく、有り振れた貧しき百姓が、生きづらい世の中を藻掻いて生きる有様を、律義な筆でねちねちと書いているのだ。「私のような者でもどうかして生きたい」と、「家」の藤村は溜息を吐いているが、「土」の勘次は、無意識のうちに、どうかして生きようと努力している。どうかして生きようとして、彼の妻は夫の黙認の下に、自分の手で堕胎を決行して、そのために自分の身も亡ぼすことになった。無知の所行であるが、こういう事は、日本の農村では古来有り勝ちの事ではなかったであろうか。私の幼少の頃には、故郷で

は、生れたばかりの嬰児を闇に葬ることが、旧幕時代からの習わしとして、無造作に実行されていた。死者の葬式には近所の男女が手伝いに来るのだが、それは、「たとい他人のためには悲しい日でも、その一日だけは自己の生活から離れて若干の人々と一しょに集合すること」が、彼等にはむしろ愉快な一日でなければならぬ。間断なく消耗して行く肉体の欠損を補給するために摂取する食料は、一椀と雖(いえど)も悉(ことごと)く自己の惨憺たる労力の一部を割いているのである。しかし他人を悼む一日はそこに自己のためには、何等の損失もなくて十分に口腹の慾を

満足せしめることが出来る。他人の悲哀はどれ程痛切でも、それは自己当面の問題ではない。かくの如くにして彼等の集る処には常に笑声を絶たないのである」

こういう風に農民の心理を洞察し検討することからこの小説は出発しているので、ここに描かれたる農村は住みいい土地ではないのだ。この農村に於ける人間生活から押して、一般の人生の住みいい土地でないことも類推されるのである。神の恵みと云ったようなものは何処にも見つからないのだ。陰惨な世界にも人類愛とか相互扶助の精神とかが活躍している光景を写した小説も存在し

て、読者の心を和やかにすることがあるが、「土」には、そんな所は殆んどない。この作者はそういう風に人生を見ていたのであるか。そういう風に人生を見たがらなくっても、自分の日常接触している村の人々の実際がそうなのだから、為方(しかた)がなかったのであろう。作者は実際の農村を美化しようとしなかった。夢の世界のように作り上げて、読者を悦(うれ)しがらせようともしなかった。

この作者だって、新聞小説に筆を採るにあたって、全然読者受けを考慮しない筈はなく、読者に面白がられ批評家に褒められもしたかったであろうが、材料の性質と、

作者の素質が、その作品を快く読まれるように完成し得なかった。「土」だの「家」だのは、作者が創作力乏しく小説的技倆を縦横に発揮しなかったために、真実が現わされたと云ってもいいのである。生きんとする悩み、生きんとする努力は、知識人にはかくの如く現われ、無知な野人にはこの如くに現われるのである。そして、無知人の世界も知識人の世界も、本質的には同じじゃないかと、私は読みながら感じた。作者は、自分の描かんとする貧しき百姓に、自分達とは人間性の異っているほどの獣性を認めてそれを剔抉(てきけつ)しているらしく思われるが、

私は本質的には彼も此も同じであると思いながら、「土」を読んで、勘次とその周囲の人々の上に人生を観るのである。

「僅かな彼に幸いした事柄でも、幾らか他人の嫉妬を招いた。他の百姓にももがいて居る者は幾らもある。そういう仲間の間には僅に五円の金でもそれが懐（ふところ）に入ったとなれば、直ぐに世間の目に立つ。彼等は幾らずつでも自分の為になることを見出そうということの外に、目を峙（そばだ）てて周囲に注意しているのである。彼等は他人が自分と同等以下に苦んでいると思っている間は、相互に苦

んでいることに一種の安心を感ずるのである。しかしその一人で懐のいいのが目につけば、自分は後へ捨てられたようなひどく切ないような妙な心持になって、そこに嫉妬の念が起るのである。それだから彼等は他の蹉跌(さてつ)を見ると、その僻(ひが)んだ心の中にひそかに痛快を感ぜざるを得ないのである」と、作者は悪質の人間性をそこに見ているが、こんなことは古今東西に亘り、いろいろな社会に亘っての通有性であって、珍らしいことではなく、特に、「僻んだ心」と云うほどの事ではないのである。作者はこの農村小説に於て悪質の人間性を見つけようとす

るばかりで、農民に存在する美質を見つけようとはしないのである。農民に味方をして地主を悪者にしようとする気持は毛頭持っていない。

勘次と娘との間、卯平と二人の孫との間には、普通の人情が微かに動いているが、勘次と卯平との間、すなわち、婿(むこ)と舅(しゅうと)との間の頑(かたくな)な、ぎごちない、冷かな対立は、表面に争闘も喧嘩もないだけに、却って陰惨である。読んでいても退屈であるが、実際の彼等二人の対立的存在は、どちらに取っても、さぞ息苦しく懶(ものう)く、いまいましかったであろうと想像される。こういう人世――作

者は意識して書いたかどうか知らないが、こういう味気ない人世には、我々も面を背(そむ)けたくなるのである。面を背けても、こういう風な人間同士の対立は厳として実在しているのだから如何ともし難い。勘次のような宿命的貧民でも多年の努力で、生命だけはつないで行ける程度の稀薄な光明に向きかけていた訳だが、それが、子供の火遊びと、卯平爺さんの不注意から、家も家財も丸焼けにされてしまったのである。丸焼けで一篇の小説の世界は一先ず結末になるので、作者は彼等を窮地に陥れたきりで、平然としているのである。この作者見掛けに依ら

ず、創作態度が冷酷である。黙々とした無愛想な勘次の態度に似ているところもありそうだ。

未解決であり、救いのない人生であると云う。ロシアやフランスの農民小説では、作中の無知な人物が、心底に動かしがたい宗教心を宿しているのを見ることが多いが、「土」の中の人物は、巫女の口寄せなどを妄信していても、不安な生存に手頼(たよ)りとなるような信仰心は少しも有っていないのである。ところが、晩年の田山花袋は、「ある僧の奇蹟」や「残雪」を発表して、宗教への心の動きを見せた。前田晃執筆の年譜によると、これ等の作

品は、四十七歳の時に出来たので、「明かに自然主義を逸脱して、宗教的哲学的なものとなっていた」のだそうだ。私は今手許にある花袋集を披(ひら)いて、「ある僧の奇蹟」を読んだ。或僧侶の自我没却、献身的衆生済度(しゅじょうさいど)の態度に、民衆は随喜渇仰して、その僧侶が托鉢に出ると、その背後にいつも大勢の信者が集って随いて行くのだそうだ。苦しみを持った女、恋にもだえた女、若いのも老いたのも、皆なぞろぞろとかれの後について、合掌しながら歩いた。貧しき者は富み、乏しき者は得、病める者は癒え、弱き者は力を恢復したというような不思議な光景

も現出した。「求めざるものは得、欲するものは失う」というような彼の悟りは、かれの日夜の行と共にますます生気を帯びて来たそうだ。信者の浄財によって改築された本堂には、隙間がない位に一杯に信者が集って、異口同音に誦経（ずきょう）するようになり、そのうちにまじって、その僧侶の誦経の声は、一段高く崇厳に高い天井に響いて聞えたという。

作者はこういう光景を実際に見て描いたのではなくって、空想に浮べて書いたのではないだろうか。私は花袋の作として面白く読んだものの、ここに神秘的魅力があ

るとも、宗教の光が差しているとも思わなかった。作者は批判もなく、ただ気休めに宗教的妄想を描いて見たのに過ぎないと思われた。「蒲団」を書いた時には、筆も思想も幼稚であっても、文壇に刺戟を与え、新気運の起る動機になったのであったが、宗教染みた作品には共鳴者はなかった。歳を取ってから仏心を起したり、神信心をしだしたりするのは、人間通有の現象なので、通り一ぺんの常套では人を動かす力はないのである。宗教にとって晩年の心の平和を得るのは結構な事であるが、そこでは自然主義はおしまいになっているのである。現実暴

露の悲哀、未解決の人生も、詰りは神仏に帰依することによって収まりがつくのは、西洋の作品に於てよく見られるのであるが、日本の近代文学はそういう所へは落ち て行かなかったし、宗教らしさは、日本の近代文学には如何にも不似合らしく見られた。

「桜の実の熟する時」に述べられている時分の若き藤村は、多少外来の宗教に感化されたのであったが、信仰生活に深く入るようなことはなかったようだ。青年男女の交際場と云ったような意味で教会の集りを楽んだらしい趣きもあった。ところで、この作者も、最後の、未完の

作品「東方の門」に於ては、日本好みの、勿体振った高僧型の僧侶を出して、これに好意を寄せ、作者自身の気持をもそれに托してあらわしているようである。花袋が或僧に好意を寄せ敬意を寄せているのと同様である。

一芸に傑(すぐ)れた者は、人間としても鍛えられていて、死生に処する心構えも出来ているように、世間から思われている。私なども幼い頃から左程に思わされていたが、今考えると必しもそうでないようだ。先頃逝去された明治の文豪幸田露伴の晩年の心境はどんなであったかと、私はよく想像することがあるが、人間は文学修業によっ

てどれほど精神が鍛錬されるのであろうか。ところで、自然主義的人生観から云うと、生死に超脱したり、日常毅然たる態度を保ったりすることは、我等の志すべきことではないので、泣きたい時には手放しで泣くがいいし、怒りたい時には血相変えて怒ればいい。聖人型や英雄型の鋳型に嵌(はま)ったような人間にならなくっていい。花袋などもそういう意味の事を云っていたようである。達人型天才型の人間にも敬意や親しみは寄せられないように私は思っていた。しかし、長い間文学修業をして、文学の立場から長い間人間研究を続けて来た文学者の心はどう

いう風に発達するのであろうか。それぞれの作家相応に、人間の本体を知得するのであろうから、その結果、人間としての作家自身の性根も据(すわ)るようになるのではあるまいか。谷崎潤一郎は、熊谷直実が浄土のある西方に背を向けるのを憚(はばか)って、逆さまに馬上に跨(またが)って歩を運んでいたその敬虔なる心構えに感服し、自分にはそういう宗教心はないが、芸術の美に没頭して安んじているという意味の感想を若い時分に述べたことがあったが、美に没頭して他を忘れるという境地に達し得られれば幸なりと云っていいのであろう。私は、文壇関係の先輩や知友を

回顧して、彼等の処世態度がどんな風であったか、日常の精神状態がどんな風であったかとよく考えて見ることがある。それを自分の処世態度の参考にしようと心掛けてもいるが、それよりも、彼等の生き方がどんなだったかを知ることが、何かしら意義ある事のように思われるのである。作家の事は作品を読めばよく分る訳だが、作品の上に作家の本体がそのままに現われているとは限らない。作家は作家、作品は作品と、両者の相違している場合も少くないようだ。自己を隠すところなく、有りのままに描写している筈の自然主義作家の作品でさえ、真実記

録としてそのままには受入れられぬこともありそうだ。

芸術家の生活振りは普通人とは異っているように世間から思われる事もある。芸術家自身も普通人とは異った生存を続けているように思う者がある。芸術家に限らず、職業が異ると生活振りも異るのであろうが、優劣高下の別は容易につけられないのであろう。

ここまで書いた時に、私は真山青果逝去の記事を読んだ。（昭和二十三年三月二十七日）彼と私とは、相並んで文壇に出たのであった。二人の作家が対立して世間の噂にのぼり、優劣是非の批判を下されることは、常例の

ようになっていて、自然主義のはじめて興った頃には、独歩と藤村とが並んで唱えられ、独歩死後には、花袋藤村と云われた。それに継いで、青果と私とが競争者のように噂された。谷崎潤一郎長田幹彦。武者小路志賀直哉。横光利一川端康成。この頃では、石川達三丹羽文雄と云ったように、当時の人気者が対立させられるのが文壇の習わしのようであった。私は青果と親しく交わったことはなかったが、彼の生活行動については絶えず聞かされていた。私は小心翼々、貸借無しの生活を送っていたのだが、青果は奔放不羈（ふき）の生活態度を続けていたようであっ

た。彼ははじめ風葉の代作をしていると云う噂があったが、その時代には、大家が門下生に代作させる事は普通の事であった。昔は、無名作家の新作を世に出すために知名の作家が名を貸すことは有りがちの事で、二葉亭四迷の「浮雲」の上巻は、春廼舎（はるのや）主人の名で出版されたのであったが、代作の流行は次第に悪質になって、大家が労を厭うて門下生の物で間に合せると云うような有様となった。知名作家の顔を揃えた或年の「新小説」新年号の作品は、過半代作であると噂されたこともあった。既成大家の作品よりも新進作家の代作の方が新味があって

いいことも、たまにはあったようだ。青果は健筆で、或年、「中央公論」の一年間に九度も彼の小説を掲載したこともあったほどに栄えていたのに不規律な生活を営んで浪費が過ぎたための窮余の所業か、原稿の二重売りをしたりした。それも一時の金策のためで、後で新に執筆して取替えるつもりであったのが、期限におくれて果せなかったのであった。兎に角、「太陽」と「新小説」との二大雑誌に、同じ月に、同じ作品が、題名がちがっただけで掲載されたのだから、問題にならぬ訳には行かなかった。雑誌編輯者の責任でもあり、彼等は共同して、

青果の原稿は今後一切拒絶することに決定したそうだ。それで、さすがの青果も意気沮喪(そそう)したらしかったが、才能すぐれた彼は、新派の脚本なんかを書いて身を立てていたようであった。文壇に恋々としないで、新派劇を書いたり、講談社向きの小説を書いたりしていたようだが、時世は目まぐるしく変遷した。ところが、或年、ふと「中央公論」誌上に、「玄朴と長英」という新戯曲が青果の作品として現われたので、旧知人たる私などは驚かされたのであった。聞くところによると、彼の子息が学校の同級生から、「講談社の雑誌なんかに書くのは駄目だ」

と云われて軽蔑されるから、もっと高等ないい雑誌に書いてくれと父にねだったので、青果も子供の名誉のために奮発して、新戯曲に筆を執ったのだそうだ。原稿を持込まれた「中央公論」編輯長滝田樗陰は取捨に迷ったそうだが、ついに掲載すると、力作として文壇に認められ、青果復活の観があった。しかし、彼は文壇人の仲間入りをしようとはしなかった。主として、劇壇に於ける実演用の脚本に力を注いでいたらしかった。そして、一生を掛けての事業として西鶴の研究に努力していたそうである。西鶴のためには資材を投じ心を労し、徹底的に検討

していたそうである。若い頃あんなにズボラであった彼の、そういう慾得離れた研究的態度や好学心は、私には不思議に思われる。私などの遠く及ばぬところである。

青果のような生き方も、一つの文学的生き方である。彼は自分の創作には飽き足りないで、西鶴研究によって心を慰めていたのであろう。これだけは一生の意義ある仕事であると心に安んじていたのであろうか。彼の出世作とも云うべき「南小泉村」は、「土」以上に残酷に農民を描写したものだが、彼の戯曲の多くは、手きびしく人間を叩きつけている。態度が荒っぽい。ああいう芝居

を観て見物は喜ぶのであろうか。

新進作家として、私は青果と一しょに文壇に出たのだが、接触する機会は稀れであった。私が早くから最も親しく接していた文壇の知友は近松秋江であった。同郷で同窓で、我等二人だけが卒業後文筆で立つような境遇に置かれていた。それ故、私はあらゆる文壇人のうちで秋江を最もよく知っている訳だ。彼は現実曝露的態度で、自分の事をアケスケと書くことに於ては、どの自然主義作家にも譲らなかったのであったが、それでも自分の事を書き尽している訳ではない。まともに間違いなく書い

ている訳ではない。それで、彼自身の描いた彼とはちがった彼を、私は自分の心に描いていた。花袋は、「秋江は緑雨から皮肉を抜いた男のように思える」と云っていた。緑雨を知らない私は、その評語によってその面影を想像しているが、しかし、秋江は緑雨のあずかり知らない近代的憂鬱といったようなものを心に宿していたのではあるまいか。彼は内村鑑三の講演などをもおりおり聴きに行っていた。その作品に現わされているように、女性に対する執着は激しかったが、その他の事には、何事にも飽き易く、身を入れて、全力を尽して為さんとする

様子は見えなかった。青果のような根気や凝り性は秋江には見られなかった。近松などの浄瑠璃は心から愛好してよく口ずさんでいたが、西洋の文学を英語で読みつづけることなんか出来なかったのだ。アミイルの日記とかサンタヤナの美学とか、サントブーブの評論とかを愛好するようなことを云っているが、ところどころ二三行読んだだけで空想的に感激するくらいなものだったと、私は思っている。しかし、二三行読んだだけでも直観で彼らしい感想に耽るところに面白味はあった。私は秋江をよく知っているからそう思うのだが、他の作家論客をも、

秋江の事から類推して、その真相に空想を走らせるのである。青果の西鶴研究の態度は、一つの型であり、秋江の芸術翫賞態度も、一つの型である。泡鳴でも花袋でも或は藤村でも彼等の西洋文学翫賞は秋江と比べて五十歩百歩の差に止まっていたのかも知れない。藤村はフランスの宿で、うっかりオペラを軽視するような言葉を辷(すべ)らせたので、周囲の青年から袋叩きでもされるような目に会わされたが、これが日本に於て、藤村特有の沈重な口吻で述べられたら、適切な批判として左右の聴衆に耳を傾けさせたであろう。

秋江は腹の底からのなまけものであった。責任感の極めて薄弱な男であった。忍耐力の乏しい男であった。しかし、恥も外聞もかまわずに自分の醜態をさらけ出すことによって文壇に地位を得て、乏しい生活でも営むことが出来た。臆面なき自己告白によって食を得るというと、憐れむべき事のようで、緑雨の所謂、「まぐろの土手の夕あらし。身を切り売りの皿の中」と云ったような、薄ら寒い警句が思出されるが、ああいう自己曝露の描写が読者の心を動かすのは、彼独得の筆の綾によるので、藤村の「新生」などが、藤村独得の芸術の力で読者の心に

感銘を与えているのと同様である。今度、私は秋江の作品の幾篇かを読返しているうちに、感動したのは、彼が乏しい懐中から京都の遊女に月々の仕送りをしたことである。半歳も一年も訪ねて行かず、会いもしないのに、ただ将来、彼女の借金が抜けて自由の身になった時には、同棲し得られるという彼女の約束を信じて、それを楽みに落寞（らくばく）たる現在の生活に堪えていたのであった。あちらこちらの雑誌社や本屋から零細な金を集るのにアクセクしてた彼を、私は知っているので、それ等を投資して、将来の幸福を期待していた彼の心境をいたましくも思

い、滑稽にも感ずるのである。おしゃべりの彼も、この事だけは秘密にしていた。そして、秘密の悦楽に耽っていた。相手の遊女に対しては、秋江得意の綿々たる情緒を述べ立てた手紙を絶えず送っていたにちがいない。彼のような行動は世に珍らしくはない、有り勝ちの事ではないかと、人は云うであろうが、私は本物の秋江を知っている上に、作品をよく読んでいるのだから、両者相照らして、人間の真相を観察し得られるので、有りがちの事ではないのである。モウパッサンやチェーホフの小説の中には、こういう心境、すなわち他日同棲し得られる

幸福を空想しながら、或女性に、会いもしないで、ただ金だけ仕送る男の心が書かれているかも知れない、そして、そういうものは夢の話のように面白く読まれるであろうが、秋江のは夢の話のようでもあり、いきいきとした現実味をもって私の心に迫って来る。チェーホフやモウパッサンなら、普通の女性と契約の上で送金することに作意を極めそうであるが。秋江は上方の遊女に――しかも甚だ低級らしい遊女に、惰心に鞭打って辛うじて獲得した尊い金銭を支給したのである。低級な上方の遊女であるところに日本伝統的の味わいがあり、外ならぬ秋

江が送金するところが、私に取っては真実味の感じさされる所以なのだ。やがておあつらえ通り幻滅を感じささるような事態となり、作者も作中人物も七顛八倒の悩みをして、小説が小説としての効果を充分に奏するのであるが、私は、「血の出るような金」を送りつづけながら、他日の幸福を夢見ている一人の人間の心境だけにでも、作者が私の熟知している秋江であるため、心惹かれるのである。秋江らしい生き方なのである。人間の幸福は畢竟そういうものなので、本願寺やローマ法王の信者が、浄財か不浄財かを捧げて、来世の幸福を夢見るのも、

根柢は同じ事なのだ。自然主義者の文学を、現実曝露の幻滅文学であるとするのは、定説のようであったが、しかし、自然主義者自身、実際は秋江の夢見たような幸福を夢見ていたのである。「芸術家の心は普通の人には理解されざる心であると思う。冷かなる心、残忍なる心、真心なき心。普通の人には屹度(きっと)そう思われるに違いない」と、花袋は云っている。

フローベルなんかも、これに類似したことを云っていたようだが、自分の事が臆面なく書けると云う度胸が一度据(すわ)った以上、日本に於ける我等の自然主義作家は、真

心をもって何でも書けたので、その書いていた気持は理解されないことはないのである。私は今度諸氏の作品を次から次へと読んでそう思った。秋江のものを読んで、殊にそう思った。彼は幸福の夢の醒めた時、「これまでは、自分の熱愛する女がそうせよというなら、もう一生京都に住んで京の土になっても厭いはせぬとまで懐かしく思っていたその京都を、それ以来私はいかに憎悪して呪ったであろう。出来ることなら、薄情な京都の人間の住んでいるこの土地を人ぐるみ焦土となるまで焼き尽してやりたいとまで思っているのである」と云っているが、

我が意に背き我が心を悩ます人類の住んでいるこの世界を、爆弾でも投げつけて破壊したい、と思うような人間も出現しそうに空想される。私の今取扱っているどの作家も生存の悩みは書いているのだが、生存の喜びは、案外書きづらいものか、書くに価いしないのか、誰れの作品にもハッキリ現われてはいない。生存の喜びが目ざましく写されていれば、生存の悩みも一層引立つのであろうが、そうでないために、みんなの作品がくすんで見えるのであるか。

藤村は死に近づいた花袋に向って、「死ぬる気持はど

んなか」と訊ねたと噂されている。真偽は分らないが、藤村の云いそうなことである。絶えず人生の真相を知らんと心掛けていた花袋は、目が見えず耳も聞えなくなったら、皮膚によってでも人生を知りたいと、何かに書いていた。死に臨んでは、死に臨んだ時の人間の気持を味得すべき筈である。それで、藤村が訊ね花袋が語ったら、自然主義的人生記録として尊重すべきものとなったであろうが、それは普通の人情として実現されないことであろう。生体解剖見たいなものである。秋声は「自然主義の荘厳」と云ったことがあったそうだ。徹底的真実の表

現を荘厳と感じたのか。秋声の或種の作品、秋江の「疑惑」「黒髪」などは、作者相応の真実の表現なのだが、それを荘厳とは云えそうでない。「荘厳」の美は、古典的なもので、自然主義的人生観から言うと、荘厳というような言葉は空虚な形容詞で、人間の日常の実生活は荘厳視すべきものではないだろう。

独歩は早世したが、秋声藤村花袋秋江小剣はみな長寿を保って、自分の持っているものをそれぞれに出し切った。読者は彼等の作品をよく読めば、人世に於ける生き方について何か教えられるであろう。どこまで行っても

これっきりかと、未解決の物足りなさを感じさされるかも知れないが、それだけでも感じさされるのは一つの修業である。彼等以後の日本の作家は、彼等とちがった意味で読者を啓発するところがあるのであろうか。彼等の描いた時代の「生きるための悩み」は、敗戦後の今日の、生きるための悩みとは趣きが異っていた。今日の作家は、彼等よりももっと深刻な生ける悩みを作品の上に現わしている筈である。果してそうであろうか。先頃逝去した菊池寛は、第一次世界戦後の日本の富み栄えた時代に文壇に進出して、ある期間は一世を風靡したのであったが、

彼の作品は時代を反映して、明るみがあって爽かであった。しかし、今日から回顧すると、あの時代の日本が上辷りの浅はかな世であった如く、菊池の作品も上辷りの浅はかなものであったようにも思われる。今後の文学は、時世が時世だから、菊池風の朗らかな系統のものが盛んになりそうには思われない。時世の悩みはおのずから作家の心に宿って、その作品にしみ出るようになるのではあるまいか。

九

「本格小説」と「私小説」とが対立して論ぜられるようになったのは近年の事である。全体「私小説」という名称は誰れが言出したのか。この名の流布しだしたのも近年の事で、自然主義の盛んな時分には、無論、私小説という言葉は活用されていなかった。私は年少の頃西洋の小説のうちで、「私」という立場から書かれたのを読むと、その「私」は作者自身の事であろうと推察していた。しかし、少し物が分るようになると、その「私」は、

"Poetical I" と云われるもので、空想裡の私で、必しも作家自身の表現であるとは限らないことが分った。日本でも第一人称小説が早くからあるにはあったが、小説中の私と作者とを同一視するようになったのは、自然主義以来の事であり、「私小説」が文学中の一種として分類されるようになったのは、大正期以後であると云っていい。

私小説の書き振りもさまざまであって、はじめから「私」として書くのもあれば、第三人称としての仮名を用いるのもあり、「私」である作中の作者だけには仮名を用い、他の作中の人物には実名を用いるような変則の

もある。（秋声の「光を追うて」はその一例である）独歩の第一人称小説は、ツルゲーネフなどを真似た小説作風であって、後年の文壇の「私小説」とは異っていた。秋江の、書翰体その他の情痴小説は、純然たる私小説である。武者小路などの白樺派の作家、菊池芥川などの新進の作家によって、截然（せつぜん）とした「私小説」が出現したのであった。菊池の幾多の「啓吉」物語は、啓吉という仮名の下に書かれた私小説であったのだ。私小説、すなわち、自分の経験した事をそのままに書くのは、自然主義の本領のように云われていたが、白樺派の作品、菊池芥

川の作品中の「私小説」は、自然主義の作品とは云われなかった。作家自身もそう思っていなかった。むしろ、自然主義の反対者を以って自から任じていたかも知れなかった。同じく私小説でありながら、自然主義者の私振りと、彼等の私振りとは、どうちがうのであろう？　自然派の作品には、性慾が露骨に叙述されている。情味に乏しく、詩趣が無く乾燥無味である。陰欝であると非難されるが通則であった。白樺派以後の「私小説」は、明朗であり爽快であり、ひねくれた所意地悪い所がないように思われていた。しかし、そういう区別は六ケしいの

である。一つ一つを取出して見ると、或作家のが特に明朗であり情趣豊かであるとも云い切れない。

私は明治大正の知名の作家の作品は、おりに触れ、繰返し読んでいるのであるが、自然主義の重な作家は、創作家としての天分が概して豊かではなかったと、屢々感ぜられるのである。明治以後どの方面に於ても、非凡な天分豊富な才能を具えた人々は甚だ稀れであり、芸術界に於ても、そういう非凡人は見つけ難いと思われるが、小説家としての自然主義作家には、豊かな創作能力を有していた人はなかった。これ等に比べると、夏目漱石は

たっぷりした創作能力を生れながらにして有っていたと云っていい。谷崎潤一郎も創作能力は豊かである。漱石は、「猫」をはじめ、「坊っちゃん」「草枕」など、類例のない特殊の作品を続々と産出したので、しかも楽々と作られたのであるから、驚嘆に価いしている。その点我(わが)自然主義の頭領島崎藤村などの及ぶところでない。しかし、或立場から批判すると、「坊っちゃん」も「草枕」も、浅薄な作品、座興的芸術品と云えないこともない。現実の中学に於ける教師生活は、決して「坊っちゃん」にあるようなものではない。今日は無論の事、あの時代

にだって、実際の中学はあの作品に描かれているようなものではなかったに違いない。鷗外の歴史小説は高等講談と云われていたが、「坊っちゃん」は高等落語と云ってもいい。講談や落語も社会芸術として存在価値があるので、敢て卑下するには当らないが、鷗外の歴史物や漱石の「坊っちゃん」に含まれている思想、人生観、道徳観は、時代並に凡庸なのである。「坊っちゃん」の正義観は卑俗であり大衆向きたるに止っている。芸術は芸術だから、そんなことはどうでもいいので、芸術としての面白味があれば、それでいいのだが、この頃のように、

鷗外論や漱石論が頻繁に出現して、彼等の思想が他の作家よりも深刻であるらしく、物々しく論ぜられるのに、私は同意し得られないのである。

花袋泡鳴をはじめ、藤村でも秋声でも創作的才能は豊かでなかった。それ故、コツコツと現実の生活の悩みを書いて、人生の真実がおのずからそこに現われるようになったとも云えるであろう。漱石の如く、才にまかせて面白づくで書流したるのは、却って真実を逸することがありそうである。花袋は筆の早い作家で、全盛時の或新年には、依頼の原稿をすべて引受けて十二種も一度に発

表したそうであったが、晩年には、自分の文壇的地位を心細く感じていたらしかった。花袋全集が出版されたが売行はよくなかった。「落ち目になるのはいやだ」と云っていたそうだが、感傷的に正直な彼の云いそうなことである。「源義朝」が上梓（じょうし）された時（大正十三年）それを機会に、私など知友が彼の慰労会のような会合を、田端の自笑軒で開催したのであったが、その時、彼は「僕が駄目になったのを憐れんで、君達がこんな会をしてくれたのであろう」と、酔余に、感傷的感慨を洩らした。それを聞いて、私などは意外に感じた。晩年の花袋は、

どういうつもりか、数種の歴史小説を書いたのだが、「源義朝」は可成り面白く読まれたのであった。義朝の愛慾生活を作品の中心としたようなもので、花袋自身の愛慾感をこの史上の英雄に託して現わしたのであった。「木切れ一つなく、裸体のままで浴室で殺された源義朝の悲痛な生涯」は、花袋ならずとも創作慾をそそられる題材である。

花袋は、自己の衰運を悲観していたか知れなかったが、自然主義は衰えたりと雖も、木切れ一つなく、裸体のまで殺されるようなみじめた目に会ったのではなかっ

た。藤村や秋声はますます作品に重味を増し、光彩を放つようになった。泡鳴も次第に世に迎えられるようになり、達者な筆――むしろ悪達者と云うべき筆で盛んに書きなぐるようになった。しかし、自然主義という栄えある名前は、色が褪せて、そんな主義を有難がるものは無くなった。そして、「私小説」という自然主義の生み落したもののような一種の作風が、今なお盛んに問題になっている。

演劇方面では、団十郎が所謂「活歴（かつれき）」を演出して、在来の歌舞伎風の演技を革新した。明治の初年に、団十郎

は伝統的のお芝居に飽足りないで、人間の真実、時代の真相を表現せんと考慮していたのであった。かつて、彼は彦三郎に向って、「鎧武者だって、暑い時には暑いと云うだろう」と云ったそうだ。暑い時には鎧を脱いで汗を拭きたくなるだろうと、彼は思っていたのであろう。彼の演劇改革も大したものではなく、今日から見ると甚だ不徹底であったにしろ、史上の人物を真実に近づかしめたのであった。明治の文学は、坪内逍遙の「小説神髄」などによって、旧套を打破され、人生の写実に向って進むようになったのであるが、硯友社の写実などは、まだ

上面だけのものであった。作家の才能次第で、いつの世にも真実が作中に表現されるのであるが、真実表現の創作態度が真剣になったのは、自然主義以来の事であった。

鷗外は「ヰタ・セクスアリス」と題して、彼自身の性慾経路を書いた小説を発表した時、逍遙は、「鷗外もこんなものを書かなくってもよかろう」と、眉をしかめたそうだ。この時の鷗外の製作態度は真剣ではなく、「自然派の連中が盛んに性慾描写をやるから、おれも書いて見た。どんなもんだい」と、遊び気分で鼻うごめかしたのであったと想像される。しかし、鷗外にはこういう事

を敢てするほどあって、逍遙よりも文壇的の若さがあった。大家としても、動脈硬化に罹ってはいなかった。彼は、昔の「舞姫」や「文づかい」などとはちがった新鮮な私小説を続々と書きだした。他人を描いても、客観的態度で人生の真実を描いて、自然主義の骨法を心得たものも尠(すくな)くなかった。

「渋江抽斎」などの考証的作品は、有るがままの人生の描写で、藤村の「夜明け前」などよりも、生地のままの過去を表現したものである。此等は、自然主義の理論を押詰めた極致の作品であると云えないことはない。そし

て、ここまで行けばそれでおしまいだと云った感じがする。露伴は長い文学生涯を過したが、この作家は、自然主義の影響を毫末も受けていないのである。純然たる保守的文学者である。鷗外と露伴とは、日本に新文学の起った明治二十年代からの巨匠として、今日に於て、文学的教養のある知識人から敬意を寄せられているが、この二人の芸術的心境は甚だ異っている訳である。鷗外は、逍遙や露伴とちがい、作品に新鮮味が豊かであり、自己の実生活や自己の不断の心境をもよく書いたのである。創作力の乏しい自然主義作家よりも巧みに書きこなした

ものも尠くないのである。しかし、自分では自然主義作家に伍することを好まなかったほど、気位が高かったであろうし、文壇人も彼を以って別種の高貴な作家のように見做していた。それでいいのである。日本の自然主義作家と作品の一むれは、世界文学史に類例のない一種特別のものと云うべく、稚拙な筆、雑駁（ざっぱく）な文章で、凡庸人の艱難苦悶を直写したのが、この派の作品なのだ。人に面白く読ませようと心掛けないのも、この派の特色であった。硯友社の小説は元よりの事、漱石でも新聞小説は読者を喜ばせようとはじめから苦心していたらしい。近

来の新聞小説は、無論面白がらせることを主として製作されているのである。

同じ自然主義作品にしても西洋のそれ等は面白いのに、日本のは面白味が乏しい。それは才能の相違に依るのだが、態度の相違にも依るのだ。誇張して言うと、自然主義の功績と弊害はこんなところにあるのだ。「自然主義が小説を面白くなくした」と、よく云われていたが、面白くなくしたところに、この派の特色があったと云ってもいい。先頃、読売新聞に出ていた馬場恒吾の短い感想のうちに、「この頃アメリカで出版された新しい小説

を数篇読んだが、どれも面白かった、面白過ぎるくらい面白かった。それで、自分は、面白くない小説がなぜ出ないかと考えた」と云っていたのが、私には、空谷(くうこく)の跫音(きょうおん)のように感ぜられた。「ユーゴーの小説、ハーディの小説、或はトルストイの戦争と平和などを読むと、はじめから面白づくめのものではない。随分読みづらい。しかし、それを我慢して読むと、深く心が惹き入れられて、忘れ難い思いがされる。面白く読んで、読んでしまうとそれっきりの小説とは異っている。日本にもそういう面白くない小説が出なければ、文学も詰らない」とい

う意味の感慨を洩らしていた。私は一見識ある議論だと思う。こういう議論が文壇人から出ないで局外者から出たのも考うべき事である。今日の知名の作家はみな、面白い作品を書いて大いに売らんと心掛けているようである。新聞の小説なんか、一日々々が面白くなければ、掲載価値のないものとされている。昔の鷗外の歴史小説や、長塚節の「土」や、藤村の「家」が社の方でいやがられながらも、兎に角連載されていたのとは、時代が違っている。「面白くない小説」の出現が望ましいと云っても、勿論、それは文字通りに受入れるべきものではない。日

本の自然主義の小説には面白くないものが多いのは確実であるが、それを我慢して読んでも、ろくな感銘が後に残らないで、「アア面白くなかった」というのでは何にもならない。しかし、この貧寒な文学が後の文壇に影響したことは無視されまい。日本の自然主義の文学は芝居にならない文学である。外国に翻訳しても好意をもって読まれない文学である。それでも、自国の文学には影響が多かったのだ。漱石でさえ、「道草」を書いた。これは彼の作品のうちでも読み応えのするものである。が、「家」とか「生」とか「徽」とか云ったような自然主義

作品に比べて、遥かに傑出しているものであろうか。必しもそうは云えまい。自然主義者のに比べると、謹み深く、文章もよく整っていて、快よく読まれるのであるが、彼等のほど、漱石は自己を拠り出していないようである。薄汚くはなく、いやらしい所もなく、醜体を呈してはいないで、紳士的に取澄ましているとも云われよう。私は「道草」の創作態度を非難するのではない。あれでいいと思う。芸術品としての価値は、漱石の方が豊かであるかも知れない。しかし、一方に泡鳴の「放浪」や「断橋」のような、傍若無人の自己暴露の小説が、厳として存在

していたことは、日本文学史中の異色として認めねばなるまい。紳士の側に無頼漢がいたようであるが、この無頼漢は、当時の芸術至上主義者に劣らぬほどの芸術熱中であったのだ。

私は、はじめから、自然主義の態度で筆を採ったのではなかった。自から自然主義作家をもって任じたことはなかった。他人にそう極められただけであった。私の知っている限りでは、自分で自然主義を標榜して立った作家は、花袋泡鳴の二人くらいであった。その泡鳴は、一方では日本主義者であり。ファシズムの信者であり、今

日生きていたら、追放令に触れそうな男であった。自然主義は自由主義と相通じていそうに思われるが、あの頃の日本の自然主義者の頭は必しも自由主義的ではなかった。花袋も自由主義というほどではなかったが、しかし、彼は率直であり単純であったため、戦争の恐怖はそのままに認め、兵士についてもその人間性をよく認めていたのだ。独歩は、日清戦争の時に従軍記者となり、「愛弟通信」と題して、勇ましい従軍記を書いたが、日露戦役に従軍した花袋の従軍記は、そんなに景気がよくなかったにちがいない。花袋の従軍記念とも云うべき短篇小説

「一兵卒」は、文章は例の如く粗雑であり、描写が至らぬのであるが、そこには戦場苦が直写されている。病める一兵卒の悩みが正直に書かれている。変な国家主義や忠君主義は影を隠している。「かれは、この病、この脚気、たといこの病は治ったにしても、戦場は大なる牢獄である。いかに藻掻いても焦っても、この大なる牢獄から脱することは出来ぬ」と観念し、「今はじめて、病院を退院したことの愚をひしと胸に思当った。病院から後送されるようにすればよかった」と後悔した。「もう駄目だ、万事休す。遁(のが)れるに路が無い。歩く勇気も何も無

くなってしまった。止め度なく涙が流れた。神がこの世にいますなら、どうか救けて下さい、どうか遁路(にげみち)を教えて下さい。これからはどんな難儀もする。どんな善事もする。どんなことにも背かぬ」と、おいおい声を挙げて泣出した。

「戦友の血に塗(まみ)れた姿に胸を撲ったこともないではないが、これも国の為めだ。名誉だとも思った。けれど、人の血の流れたのは、自分の血の流れたのではない」とも反省している。平凡人の平凡な感じが、粗雑な文章で、そのままに出ているだけで、芸術品としては価値高きも

のかどうか分らないが、ここに日本の自然主義の特色があるのだ。鷗外のように、或は漱石のように、作中に武士道見たいなことをひけらかしていないのが、私の目につくのである。鷗外が武士の子孫であるなら花袋も武士の家に生れていた筈だ。しかし、花袋の作品には武士臭はなかった。彼は晩年に「一兵卒の銃殺」と題する長篇を出しているが、これは、女の故に脱営して、ついに銃殺される経路を書いたもので、これにも花袋式自然主義観がよく示されている。従軍を志す間際に於ても、戦場に於ても、彼は戦意昂揚なんか考えたことはなかった。「時

代も国家も矢張り自分の閲歴や運命と同じく盲目の力に支配せられて、無限から無限に動かされつつあるような気がした。混乱に混乱、紛糾に紛糾、こうして時代も国家も個人も、ある大きな潮流の中に流されて行くのである。平凡なる自己の生活。むしろ平凡なる人間の生活――空しき現象！　その現象のままで時は唯過ぎて行く」これは日露戦争後に書かれた長篇「妻」の結末に於て洩らされている彼の戦争観であるが、感傷的な彼はこんな大戦争に対しても、空しき現象と感じたりしていた。平凡なる生活、平凡なる人生と云った感じが、彼には附

纏っていて、彼の作物をも平凡にした。平凡なる自然主義、無味乾燥で退屈な自然主義文学、一般の小説読者に喜ばれなかったのは当然であった。しかし、数十年を隔てた今日読んで見ると、その退屈ななかに時代の真実がとぐろを捲いているように思われるのである。

花袋は、「ある僧の奇蹟」や「残雪」のような宗教的の作品を発表し、「源義朝」「通盛の妻」その他幾つかの歴史小説も書いたが、しかし、自己の愛慾を直写せんとする態度から超脱はしなかった。やはり、昔ながらの花袋であった。そして、「福岡日日」に連戦された彼の

最後の長篇「百夜」は、彼得意の愛慾小説の集大成と云ってもいいのであった。人間はおりおり宗教的に悟ったような気持になって、文筆の士はそれを世間に向って公言したりするものだが、徹底してそういう気持に成り切れるものではないようだ。花袋はやはり愛慾に悩みながらこの世を去ったのであろう。抱月は、「自然主義の文芸は我等を宗教の門にまで導く。宗教的という所にまで接続させる。創作時の目の据え所はここにあるべきである」と云っている。何故そうなのかと、抱月の論法をたどると、彼は、「自然主義が理想や解決やを放擲したの

は、これを低し浅し狭しとして斥けたのであって、その奥に更に最後絶対のものを求めて、直接これを揣摩(しま)せんとする所に自然主義の新生命は湧くのでないか」と云い、「一番奥深いものを、そのまま衣裳を着せないで、赤裸々に摑み出したい。――極端な写実的表面に、直ちに飛び離れた絶対不可説の本体を裏づける。書いてある事実が、直ちに書いて無い全体としての人生というようなものを暗示する。固より全体の人生であるから、明瞭にそれを捉えることは出来ぬが、成程こんな人生もあるかと思うと共に、それが直ちに人生全体の運命問題を提起して、

限りなくこれを思い廻(めぐ)らさしめる。読み終って巻を伏せると共に、一種の瞑想的情趣は、我を駆って様々の人生問題に回顧せざるを得ざらしめる。しかして色々に想い得て、しかも何れにも満足するを得ず、無限に欣(ごんぐ)求の情を恣(ほしい)ままにする時は、心の活動につれて無限の快味を感ずる。吾人はこれを文芸の末尾としての宗教的情趣とも名づけよう。これが解決に一転すればそこから新宗教なり新道徳なりになるのである」と説明している、人生に関して無解決の態度を持している自然主義が新宗教新道徳に向って解決の道をつけると云うのである。しかし、

これは抱月の夢想であった。日本に於ける自然主義からは、新宗教新道徳は生れ出なかった。藤村の最後の、未完の大作、「東方の門」にしても、我等を宗教の門に導くものではなかったらしい。

秋声の「仮装人物」は、作者晩年の愛慾生活を取扱った幾つかの短篇を、一つに集めた長篇と云っていいもので、彼の作中でも最も評判のよかったものだ。自然主義時代の末期になって、文壇で認められたこの作家が、時代の変遷の目まぐるしい間に、一人だけ、自然主義の化身のような恰好で存在していたのは不思議であった。藤

村は、自己の生活記録は、一先ず止めたらしく、「夜明け前」や「東方の門」のような歴史物を書くようになったが、秋声は、気迷いしないで、何十年相変らずの秋声文学を書き続けた。倦まず飽かず、長い年月、よくも書き続けたものだと、感心させられる。材料に変化のない、同じようなことが書きつづけられたのだ。彼は真宗の盛んな北陸に生れながら、宗教くさいところは無かった。晩年になっても、南無阿弥陀仏を唱うる様子は無かった。

私は、藤村にはあまり近づかなかったし、花袋には先輩として接していたのであり、秋声とは友人として交わ

っていた。彼は「すいも甘いも噛みわけた、分りのいい叔父さん」であるように、早くから文壇人にも思われていたが、本当はそうでもなかったのだ。若い時から、渋い、年寄り染みた顔をしていて、言葉数も少く、世間に乗出して、どの方面ででも活溌に働きそうな人とは、一見したところ思われなかった。作品もはじめから甚だ地味であって、青春の華やかさはなかった。それだけに、交り易かった。私は頻繁に往来して心置きなく交っていたのであったが、しかし、文学談はあまりしなかった。彼の作品をもあまり多くは読まなかった。秋江は、早く

から風葉秋声の小説を愛好していて、私に向って、秋声の技巧をよく褒め立てていて、秋江の批評によって、私も時々は蒙を啓(ひら)かれたのであった。夫人のまだ生存していた秋声の壮年期の作品は、茶の間小説と云われていたほどで、茶の間を中心に普通人の日常生活を描いたものや、茶の間に於ける世間話を種にして市井の生活光景を描いたものが多かった。そして、そこに秋声の渋い持味が含まれていた。それが、夫人に死なれた後の、秋声の老年期には、茶の間に安んじてはいられなくなり、二三の女性との関係が出来たり、ダンス場や花柳界へ出入す

るようになったり、昔の秋声とは別人のような生活をしでかしたのだ。それが作品に影響して、昔の茶の間小説が、派手な愛慾小説や芸者小説となったのである。私などはあの秋声が、かくも一婦人に溺れるかと奇怪に感じたが、それはそう感じた私が世間知らずであったためなのだ。彼が或出版社主催の観劇会に、一婦人を連れて行っていたのを見た花袋は、「ああいう知人の大勢行っているところへ、ああいう女を連れて行くのはいい事じゃないよ」と云っていた。私は、泡鳴の作中の二三の女性には会ったことがあるし、秋声の女性にも一二度会った

ことがあるが、彼等が、彼等の愛している女性を、私など知友が美しく思って、彼等の艶福を嫉妬しているように感じているらしいのに、私は呆れたのであった。上司小剣もそう云って晒(わら)っていた。客観的観察描写に傑れている筈の自然主義者だって、惑溺すると、公平な観察は出来ないのである。秋江の女性観察などは自己本位で、相手の女に云わせたら、間違いだらけであるかも知れない。秋声の女性観察は果してどうだか。

「仮装人物」は、冷静な筆で印象的に書かれている。「自身が実際首を突込んで見て来た自分と、その事件につい

て語ろうとするのは、何もそれが楽しい思出になるからでもなければ、現在の彼の生活環境に差しひびきをもっている訳でもないようだから、そっと抽斗(ひきだし)の隅っこの方に押しこめておくことが望ましいのであるが、正直なところ、それも何か惜しいような気もするのである」と云っているが、私はこの物語を読みながら退屈した。退屈は自然主義文学にはつき物であって、秋声の前期の幾つかの長篇はどれも退屈なのだ。退屈だけではなく、次から次へと印象的に書かれているに拘わらず、この作中のヒロインに対して、私などは少しも親しみが感ぜられな

いのは何故であろうか。ヒロインその物を実際に知っていて、それに反感を抱いているためなのか。読みながらいや味を感じるのは何故であろうか。作者の晩年の愛慾行為に好意を持たないためであろうか。それでは読み方が無私公平でない訳だが、どうもそう感ぜられるのだから仕方がない。私は、茶の間文学時代の淡々たる浮世物語には親しみを覚えていた。

「新興芸術、プロレタリア文学――そういった新しい芸術運動の二つの異った潮流が、澎湃(ほうはい)として文壇に漲(みなぎ)って来たなかに、庸三は満身に創痍を受けながら、何か窃(ひそ)

かにむずむずするようなものを感じていた。――時とすると、生涯の黄昏が既に迫って来て、このまま自滅するのではないかと思われもしたが、今においていくらかの取返しをつけるのに、未だ全く絶望というほどへたばってしまってはならないのだと思うこともあった」と云っているが、この感想には、私なども同感するのである。もはや自然主義文学の没落は遠い昔の事であって、異った潮流が澎湃としている文壇で、どうにか存在を続けているのが、自然主義文学の残党の有様であったのだ。秋声でさえ、秋声援助会が起される必要のあったほどの文

壇状況であったのだ。自滅するしかないかと、ビクビクしているような有様であった。

しかし、秋声は「仮装人物」を書上げたあとで、更に、長篇「縮図」に着手した。戦時中に戦争を度外視したような作品――純芸術態度を崩さない作品を製作したのは壮快である。時局の影響で執筆中止を余儀なくされ、永久に未完のままで残されることになったのである。それでも「縮図」の未完は、まだいい方なので、大体は書かれていると云っていい。「東方の門」は序の口で中絶となったのだから一層遺憾な訳である。終戦前、この未完

の二長篇によって、日本の自然主義文学の幕が閉じたのだから、私などはこの二篇を手にして感慨が深いのである。

「縮図」は、谷崎潤一郎の「細雪」と相並んで、終戦直後の文壇で、盛んに持囃(もてはや)された。後者は咲きほこった春の花の如く、前者は淡泊な秋草の如きか。「縮図」は、芸者の社会を描いたものだが、濃艶でもなければ、大した色気もしゃれ気もなく、秋声一流の平坦な写実小説なのだ。硯友社時代には芸者は小説家が好んで描かんとした題材なので、作家は芸者を特種の女性として興ありげ

に彼等の行動を描いていた。紅葉緑雨鏡花など、それぞれに芸者型女性を描いていた。荷風や弹の描く芸者は、以前の小説中の芸者よりも現実的で、実際の芸者的女性らしくなって来たのだが、それでもまだ芸者々々している。ところで、花袋、秋声或は泡鳴の小説中の芸者となると、芸者が芸者々々した女性でなくなって、普通の女が芸者を稼業としているだけのものとなった。自然主義の特色がここにあるのだ。芸者であっても、有るがままに、特別の色彩を施されないで出現するのだ。生地の人間が出現すれば、それで結構な次第である。

扮装を凝らさない生地の人世、それが有るがままに描かれれば、それは、文学の極致で、言分はない訳であるが、実は生地の人世はなかなか描けないと云う事なのだ。自然主義文学の復習をして来た私は、有るがままの人生が描かれていると思い思い、その筆の巧拙を考え考えしていたのであったが、実は有るがままの人生は、人間わざでなかなか書けることでないことが分って来た。筆先がうまく動いて、文章の綾で何がなしに読者が魅せられる時には、それが人生の真実であり、有るがままの人世であるように思うのだが、しかし、多くのそれは、作者

の世界であり、作者だけの人世であり、正真正銘の人世はどこか別の物であるじゃないかと、私には思われだした。「自然主義の荘厳」と云っていた秋声は、病中に、「小説を書くのは六ケしい」と述懐したそうである。製作にあまり苦心はしないで、楽々と書流していたらしい彼も、晩年に至るまで、小説執筆の困難を感じていたのであるか。彼は生来筆無精でありながら、生活のために余儀なく多作していたらしく、傍目に見られていたが、小説の外に、日記を丹念に連続して書いていたのは不思議である。自分の生活状態を、瑣末な事までも有りのま

まに書くことに於て、誰れにも劣らなかった彼でさえ、小説の形では書き現わし得ない事を、日記に於て自由に書きたくなったのであるか。馬琴は数十年に渡って、細かな日記を書留めていた。幾冊かが残っていて、そのうちの一冊は十余年前に刊行されて、私などは甚だ興味を覚えたのであった。饗庭篁村が「馬琴日記抄」と題して、日記のうちから、馬琴夫妻間の秘事を抄録して発表したこともあって、馬琴研究には重要な材料となったのであった。馬琴は作品の上では、英雄豪傑貞女節婦を盛んに書き立てたのであったが、日常の実際の生活振りは、自

分の心覚えのためか、表現慾のためか、日記に於て記録したのであった。馬琴が自然主義作家であったら、八犬伝や弓張月や美少年録見たいな作り事は書かないで、日記にあるような事実を小説の形に於て書き現わしたであろう。秋声は、馬琴などとは正反対で、日常の自己の生活経験を、アケスケと書き立てたのだから、別に日記に於て日常生活を記録するには及ばない訳だが、しかし、彼のような作家であっても、小説は日記とちがった別の世界であったのか。有りのままを本領とした自然主義作家であっても、小説は、それぞれの作家相応に作られた

る世界であったのか。小説は彼等に於ても「創作」であったのか。たとえ貧寒な頭から産みだされたにしても、兎に角創作は創作であったのか。

私は、近刊の「独歩全集」によって、「欺かざるの記」を一瞥したが、この日記と一葉の日記とは、文学者の日記中の大物であって、どちらも青春記録として面白いのである。一葉のは「私小説」とも云うべく、独歩のは内面的記録とも云うべきものだ。明治時代の青年の心霊の発展の跡を辿ることも出来るようである。

十

二葉亭は紅葉露伴以前に、「浮雲」のような大作を出した旧い作家であるが、早くからロシア文学に接触していたためか、素質がそうであったためか、考え方に自然主義らしいところがあった。「浮雲」にしても、その後の紅葉露伴の小説よりも、自然主義作品と共通したところがあった。花袋も独歩も藤村も、二葉亭の翻訳の感化を受け、先覚者としての彼に敬意を寄せていたのであった。二葉亭が偶然、「文学は男子一代の事業とするに足

らず」と云った言葉は有名になって、よく議論の種になるのであるが、彼も他の多くの日本の作家同様創作力の豊かな文学者ではなかった。そして、或種の文学者のような己惚(うぬぼ)れ気がなくって、自己反省ばかりして、自己の才能を極度に過小に視ていたため、創作に於ては、手も足も出なかったのであろう。しかし、考えに考えて迷っていた彼の文学観は、今日でも、意味深きもののように、私などには思われるのである。「ただ真、故に新なり」と云ったように、今なお新味があるらしいのである。私は、今度、大正初期出版の二葉亭全集のうちの「雑纂」

を読んで、彼の文学観に新たに興味を覚えた。編纂者は「これ等故人の談話で、所謂訪問記者の筆に成るものは、往々訛謬(かびょう)多く、故人の巧妙富贍(ふせん)なる博弁宏辞はこれを髣髴(ほうふつ)するを得ず」と云い、「故人の閲を経たるに非ざれば、以て故人の思想の一臠(いちれん)とし見るべきも、これを以て故人を評するの準繩(じゅんじょう)とする能わず」と断定しているが、しかし、私が今読んだところでは、これ等の談話筆記は可成りよく出来ていて、二葉亭の面目が現われているように思われる。殊に、「私は懐疑派だ」と題された感想は傾聴に価いするのである。自然主義を追求している今、

二葉亭の昔語りは、聞き棄てにならないのである。

自然主義盛んな時分、私は逍遙に向って、「文学はつまり技巧だけのものじゃないでしょうか」と云うと、「そうさ、二葉亭がそう云ってた」と、逍遙は答えられた。モウパッサンは、三十歳になったばかりの頃、人生には何の新しいものもないと見極めをつけたような事を云っていた。僭越の沙汰である。二葉亭は、ああだのこうだのと迷って、文学は、思想でも何でもない、技巧だけだと思ったりしたのであろう。彼は、「私は懐疑派だ」と断定している。そして、「私の伎倆が不足なせいもあろ

うが、しかしどんなに技倆が優れていたからって、真実の事は書ける筈がないよ」と極言している。「よし自分の頭には解っていても、それを口にし文にする時には、どうしても間違って来る。真実の事はなかなか出ない。髣髴として解るのは、各自の一生涯を見たらば、その上に、幾らか現われて来るので、小説の上じゃ到底偽っぱちより外書けんと、こう頭から極めてかかっている所があるから、私にゃいよいよ真剣にゃなれない」と云っているが、小説の上じゃ嘘しか書けんというのが、二葉亭の窮極の文学観なのだ。それで、「自分がそういう心持

で、筆を持っちゃ、どうしても真剣になれんから、なれるという人の心持が想像されない。真剣になれるという人があれば私は疑う。が、単に疑うだけで、決してその心持にゃなれぬと断定するまでの信念を持っている訳でもない。けれどもどう考えても、例えば此間盗賊に白刃を持って追掛けられて怖かったという時にゃ、その人は真実に怖くはないのだ。怖いのは真実に追掛けられている最中なので、追想して話す時にゃ、既に怖さは余程失せている。こりゃ誰でもそうなきゃならんように思う。私も同じ事で、直接の実感でなけりゃ真剣になるわけに

は行かん。ところが、小説を書いたり何かする時にゃ、この直接の実感という奴が起って来ない」と云っている。泡鳴は、机の上で筆を執っている時はその事が実行だと云って力んでいた。彼は実感を持って真剣に小説を書いていたのであろう。ところが、二葉亭は、「私にゃどうしても書きながら実感が起らぬから真剣になれない。古い説かも知らんが、今までの美学者も実感を芸術の真髄とはせず、空想が即ち本態であるとしている。この空想とは、例の賊に追われたことを、後から追懐する奴なんだ。そうすると、小説は第二義のもので、第一義のもの

じゃなくなって来る。否、小説ばかりじゃない。一体に人生観という奴が私にゃそう思えるんだ」

ここから、二葉亭の懐疑的人生論が出て来るのだが、それは別問題として、小説だけについて云うと、小説は、実感を欠いだ第二義のもので、真実その物ではないことになるのだ。二葉亭は、自然主義的態度、有るがままの人生を知ろうという態度で、文学を追求して、その極、小説は真実から外れた作り物であるという事になったのだ。小説は絵空言だという事になったのだ。いろいろと考えた揚句に、詰りは旧い時代の小説の考えと同じこと

になった訳だ。抱月は、「自然主義文芸は我等を宗教の門にまで導く」と云っていたが、二葉亭の考えから推すと、小説は真実から外れていて、宗教の門と云ったような第一義的のものから離れているようになるのである。

私は、数十年前の二葉亭の文学感想にも同感するのであって、文学と人生の真実についても、稍々もすると懐疑に捉われるのであるが、しかし、畢竟作り物語に過ぎないような文学に於て、真実の世界の活躍を、実際界に於てよりも一層いきいきと感得することがあるのだ。これは否定されないのである。日本の自然主義文学に於て

私は特にその気持を体験している。秋声秋江小剣泡鳴花袋、或は藤村などに、深いか浅いか、兎に角数十年間も接触して、その日常の談話や行動や人となりを直接に見聞しているので、その見聞と作品とを照らして、如何に真実が現われているか、真実が見逃されているか、意識的に嘘が入っているか、無意識的に嘘が描叙されているかを想像して、文学と人生とを私は味うのである。傍観者たる私の想像であるから、これも真を逸しているであろうが、彼等の生存の世界が、私にはいきいきと映って来るので、それがうそであれまことであれ、私をして人

生を知得させるのに、他の何物よりも役に立つと云っていいのである。彼等のうちに、もっと傑れた天才があったなら、私も彼等からもっと人生を教えられたかも知れなかったが、しかし、凡庸人であった彼等の苦艱の生涯、華やかでもなく冴えてもいなかった彼等の生涯と、それから生み出した作品は、天才の作品よりも、却ってよく真の人生を私などに示しているのかも知れない。

自然主義時代に、この派の作風を学んで、或はただ浅はかに真似て、やたらに小説らしい物を書いた年少者は多かった。相当の技倆があり、特色もあって文壇に認め

られながら、中途で挫折した作家も少くなかった。今日これ等の作家のを読直したら、そのうちから傑れた作品が発見されるかも知れない。水野葉舟中村星湖加能作次郎など、私の知人であり、優秀な作家であった。加能は、自然主義時代の早稲田出の作家として、殊に異色を具えていた。陰欝、執拗、冷酷な筆法から離れて、ユーモアがあり、筆つきが謙遜であった。

葛西善蔵は、おくれて出たので、自然主義作家としての極印（ごくいん）は打たれなかったようだが、この作家は、私の謂う所の日本的自然主義文学の一つの標本とすべき趣きを

具えている。今度彼の作品の幾篇かを読返して、痛切にそう感じたのだが、この作家こそ千篇一律の「私小説」以外何も無いので、私小説作家のうちでもこんなのは珍らしい。貧乏と病気と飲酒と芸術的精進の告白が何処にも出ている。製作に苦心して寡作であり、そのために貧乏したと云われているが、その実天賦の才能が甚だ乏しいのだ。才能が乏しくて、書けなくって苦悶しているのである。日本の自然主義文学は概して貧寒であるが、葛西の貧寒には一つの風格がある。それが彼の身代なので、この狭隘（きょうあい）な「私小説」が、今なお、案外世に迎えられ

るのは、葛西流の貧寒風格に由るのであろうか。石川啄木に愛好者があるのと、同じ意味の愛好者が多少あるのであろうか。谷崎精二は、改造社発行の円本の葛西善蔵集の序文に於て、この作者の特徴は苛烈であると云っているが、私には左程の苛烈味がありそうには思われない。

私小説一てん張りの作家だから、友人の事も頻りに作中に取入れているのであるが、取扱い振りが無慈悲であって、それ等友人に不快な感じを起させたそうである。花袋や藤村は、友人を描くに当って、いつも態度が穏かで、当人達にいやな思いをさせぬように周到な用意が施

されている。独歩や柳田は花袋作品に、田辺とか西とかいう仮名によって、頻繁に現われ、孤蝶や秋骨その他多くの文壇人が、藤村の作中に出ているのだが、作者の取扱い振りは紳士的であると云っていい。秋声もそうである。私なども秋声作中に二三箇所は断片的に書かれているが、大体は世間づらがいいように書かれている。その点秋江は無遠慮で、作品に於て、日常の鬱憤を晴らそうとするところがある。葛西流もモデル取りあつかいの一つのタイプとして面白いのであろう。

自然主義勃興当時、小説には自分の日常生活をそのま

まに書けばいいと云う事になったので、真山青果の或頃の小説には、「万年筆が原稿紙の上にサラサラと音を立てて」といったような文句が頻繁に出ていた。葛西の小説には、原稿を書いたとか、催促されたとか、原稿料をどれだけ取ったとか云ったようなことが頻繁に書かれていて、いくら小説家の「私小説」にしてもよくもこんなことばかり書いて気にならないものだと、私は不思議に思った。

「湖畔手記」は、彼の短篇のうちでは稍々長いもので、比較的整っていて、彼の心境もよく窺われ、私小説の一

つの標本として見るに価いしているのである。「とうとうここまで逃げて来たと云う訳だが、――それは実際悲鳴を揚げながら――の気持だった。が、さて、これから一体どうなるのだろう。どうするつもりなんだろうと、旅館の二階の椅子から、陰鬱な色の湖面を眺めやって、毎日幾度となく自問自答の溜息をついた」と、いう書出しなのだが、これからどうするつもりなんだろうというのは、彼の小説のどれにもある気持で、読者もどうするつもりだろうと思わせられるのである。それも、彼の身辺に異常の事件が起っているのではなく、貧と病とに悩

まされ、女性との関係がぐずついているくらいな事で、凡人の凡苦なのである。日本の自然主義小説に適当した題材なのだ。ここでも日光の湯本の宿に来るまでに蟇口(がまぐち)が空になっていて、どこに十円の金を頼んでやる宛(あ)てはないのだ。「すべての友人から棄てられ、生活からも棄てられ、結局生ける屍(しかばね)となるか、死せる屍となるか、どちらかなんだろうが、惨めな悲鳴を揚げつつ逃げ廻る愚か者よ。自分は自分のその惨めな姿を凝視するに堪えない」と云っているが、それ等はただ空言を弄しているだけのように、具象的の感じが読者の心を打つのではな

い。花柳界の女性に惑溺して苦悶しているSという友人の事を追想したり、Kという友人の不治の病の悩みを追想したりして、この一篇の大部分が埋められているのだ。他人の恋や病を追想しながら、生きるに苦しい自分の現在の生活や心境を連想している。二葉亭の所謂追想の連続記録で、従って読んでも実感が迫って来ない訳である。「自分は幾日か、喘息(ぜんそく)の発作と神経痛で終日寝床の中で呻(うめ)いた」「一ケ月にもなると、山も湖も温泉も、娘たちも、周囲のすべてが、自分の感興から失せてしまった。やはり彼等のすべてもまた、自分の肉親、妻子、おせい、哀

しき仲間、それらと同じように、結局暗欝と苦痛を吹込む存在に外ならないのだ」「兎に角このぐうたらな手記が、今や宿料に迫られ、そして、一刻も早くKを見舞いたい一心を以ってしても、日に一枚半の平均にしか書けないとは、何と云う情ないことであろう」「結局Kは肺病で命を取られるだろうが、俺は何か知ら？　この分で行ったんでは、どうしたって狂死と云うところかな、しかし、発狂は厭だなあ。気が狂って、死ぬにも死ねず、何年か妻子たちに嘆きを見せる。気狂いだけは厭だ」これだけ並べ立てて見ると、この作家の肉体や心境が一通

りよく分るので、悲惨陰欝な生存が想像されるのであるが、何故か読者に打ちかかって来る力がない。芸術的迫力がない。日記見たいなものでも日に一枚半しか書けないような作家のやきもきしている様子は想像されるが、それだけのことが読者の目に映り心に印象されるに過ぎないのである。苛烈な感じも悲痛な感じも私には覚えられないのである。苛烈な感じよりも凡庸な感じに満ちているようである「世間のことはいろいろとむずかしく出来ているものらしく、僕達には分らないことが多い。自分を本当に信じていてくれるおんな、男なんて、この世

間に幾人いるんだろうか。せい公もどれくらいまでに僕を信じていてくれて、僕のところに居りたいと云っておるのか、僕にはどうにも分りかねる。おんなというものの正体が、僕にはかなり分っていないらしい」と云った種類の、凡庸な何でもないような感想を、勿体ぶった口調で、あちらこちらの作品の中で洩らしているのが、滑稽のようにさえ思われる。葛西に限らず、自然主義の作品には、凡庸な感じを、さも人生の真実であるように珍重して叙述しているのが、よくあるのだ。

自然主義系統の小説は、一般の小説読者には面白くな

いので、概して売行は悪かった。藤村だけは、はじめから詩人として崇拝者があり、小説家としても重味があったので、時代の変遷にかかわらず、名声を持続し、売行もよかったのだが、その他の作家の作品は、雑誌の上での評判はよくっても、単行本としては、再版三版を重ねることは殆んどなかった。自分の事だけはよく分っているが、私の初期の短篇集、「紅塵」「何処へ」「白鳥集」「二家族」など、いずれも八百乃至一千部の出版であったと記憶している。しかも、「二家族」の如きは、残品が多かったそうである。自然主義全盛期にそうだったの

だから、文学の評判なんか、文壇の一部に限られていて、広い世間とは関係のなかったことが察せられる。第一次世界戦争の終りに近づいた頃、日本は成金時代で、出版の景気もよかったのだが、その頃加能作次郎の「世の中へ」の出版祝賀会が、九段の富士見軒で開催された。この時分から、新進作家の最初の出版を知友が祝ってやる催しが流行しだしたのだが、私は、前後を通じて、祝賀会には加能の会に出たっきりであった。私ははじめからこの作家の温和な作品に好意を有っていたのであったが、彼は、自然主義の衰えかけている時分に、その派の

新進作家として見做(みな)されていたため、文壇的に損をしていたのだろうと思われる。引込み思案で、押しが強くなかったために損をしていたのであろうと思う。この会には、花袋も泡鳴も出席していたが、押しの強い泡鳴は、創作界に大分幅を利かせるようになっていた。散会後の帰り途で、泡鳴は花袋に向って、「君は原稿料のことに冷淡だからいけない。一枚二円は請求しなきゃいけない」と云っていた。花袋は笑って答えなかった。加能は、自分の父である能登の漁夫の事を書いた「恭三の父」によって認められて以来、私小説を続け、「世の中へ」は、

自分が世の中へ出た艱苦の経路を書いた、純然たる私小説であったが、陰惨な気持のしない、和やかな人情味のある作品であった。大した物ではないが、加能は他に類のない、自分だけの風格を具えた作家であった。

以上、私は傍観的に知人の盛衰を回顧して来たが、私自身、自然主義のはじめから終りまでその境地にいて、浮沈を体験したのだから、自分の体験によって、自然主義の盛衰はハッキリ分っているのである。明治四十三年の夏、私は七年間の読売新聞記者生活から解放され、その後は独自一箇の自由な執筆を続けることになったので

あるが、あの時も、自から進んで新聞社を退いたのではなかった。諭旨(ゆし)免官と云ったような有様であった。老社長が死んで、その嗣子本野一郎（当時の駐露大使）が相続したのだが、新社長は、当時読売に連載されていた藤村の小説「家」を好まなかった。私が編輯していた月曜毎の文学附録に、泡鳴秋江その他の自然主義的論文の掲げられるのを好まなかった。それで、私が解雇されることになったのだが、これなぞは自然主義が衰運に向っていたことの一つの証明となるのであった。鷗外死後「明星」に発表された彼の書翰の二三を偶然見ると、彼は、

京都在住の上田敏に宛てて、私が本野に嫌われて読売を止めさされ、文学欄は横山健堂が主任としてやることになったと、重要事件のようにわざわざ報告しているのである。鷗外や上田がそんなことを気にしていたのかと、私は不思議に思ったが、兎に角私の読売退社は、文壇の一事件であったのである。泡鳴と同様、頻繁に読売の文学附録号に寄稿していた秋江は、自分は自然主義者でないから、面目を新たにしたこの新聞欄に書き続けてもいいだろうと期待し、意気込んでいたようだったが、彼も社の方からは、自然主義並みに取扱われて、寄稿を断ら

れたのであった。彼は不平であったが為方がなかった。追放令に触れるか触れぬか、その境界がハッキリしないように、ここまでは、自然主義であり、ここまでは非自然主義であると、明瞭には区別され難いのである。それから、二三年後（大正元年の年末）に、田山花袋は博文館編輯を止めさされた。これは自然主義鼓吹者であるがため追放されたのではなかった。博文館編輯局で幹部の地位にいた長谷川天渓に、後で訊くと、「編輯費の関係で、一人だけ人減らしをすることになったのだ。月給の関係から田山君が狙われただけで、何も田山君を止めさ

せなけりゃならんのではなかった」と云っていた。あれほど名声の高まっていた花袋でさえ、執筆一方では生活の不安を覚えてたらしく、その頃発表した「一握りの藁」なんかによると、編輯勤務から解放されたことを、むしろ悲しんでいるようなところがあった。当時の文学者は、一方に定職を持っていることを心強く感じていたのであった。それは兎に角、私が読売の文学欄編輯から退いたと同様に、花袋が「文章世界」編輯から退いた事は、自然主義衰運の一つの現われとしてもいいのであった。

永井荷風の小説は紅葉のと同じじゃないかと、泡鳴は

大ざっぱな批判を下していたが、自然主義の面白くない小説に読者が飽き足らぬ思いをしているところへ、新帰朝の荷風の色も香もある作品が現われたのである。紅葉の盛んな頃だったら荷風のも目立たなかったかも知れなかったが、自然主義の陰欝な無意気な、ガサガサした作品が読者を悩ましたあとだったから、荷風は注意を惹いて得をした。その頃西園寺の文士招待会が雨声会と名付けられて、おりおり開催されていたが、そのうち、会員二人が相つづいて死亡したので、主人役西園寺の希望で、出席会員の選挙によってその補充をすることにした。投

票の結果は、荷風九点、水蔭四点で当選し、私が選外の三点であった。これによっても、当時の荷風が勢いよく世に迎えられていたことが察せられる。江見水蔭は辞退したのであったが、これは、「おれを会員にするのなら、なぜ最初からしなかった？」と、負けぬ気の彼はすねて見たのであった。事実、小波（さざなみ）や眉山や柳浪など硯友社の同輩や、風葉秋声春葉などの後輩が最初から招待されているのに、水蔭が洩れたのは、不公平であったが、これは最初選抜の任に当った者がうっかりしていたためであった。そこで、私に投票をしたのは、花袋秋声、それに

藤村であったと推察されたが、他は殆んどすべて荷風に投票したのであろう。これも自然主義が嫌われ、荷風的文学の迎えられていた文壇状況の現われである。秋声の話に、側に居た鷗外が秋声に向って、「補充投票は荷風白鳥の二人に落ちるだろうな。しかし、僕は小山内に入れなければならない」と云ったそうである。私は落選したため、そんな晴れの場所へ招かれないですんだことを喜んだ。

私ははじめて小説に筆を採った時分、「私小説」を書くつもりではなかった。無論自然主義を信奉してはいな

かった。それが、時代の関係や周囲の事情から、私は自然主義作家の一人である如く見做され、自分もその気になってしまった。次第に「私小説」を書くようにもなったが、純然たる私小説は、私はそんなに多くは書いていない筈だ。

自然主義の特色のように思われている性慾描写なんかは、私の作中にはあまり見出されないだろうと、私は信じている。しかし、私の作品を自然主義の小説と断定するのは当を得ているのかも知れない。そして、私も、特色のある日本自然主義群の一員であるとして、この群中

の重なる作家と作品に対して、他の群中の作家や作品よりも一層好意を寄せて敬意を寄せていたのでもなかった。いろいろな流派の起って栄えるのを見て、興味を覚えたが、私は模倣しようとはしなかった。プロレタリア文学の栄えた時には、新旧文学の差別が殊に目立っているようで、私など過去の文学はすべて没落するだろうと危まれ、覚悟を極めなければならぬような感じがしたが、こういう時には、昔自然主義の起って栄えた時分に、自然派ならぬ作家が除外され無視されたことが思出された。自然主義の起った時とプロ文学の起った時とは、状

景は類似していた。時代の相違で、プロ文学の時は外形が賑やかでかしましく、活動も華々しかったし、自然主義の方は、内面的個人的で陰欝であったが、どちらも天下を取ったような趣きがあった点で似通っていた。附和雷同者の多いことに於て似通っていた。その仲間に入らなければ幅が利かないようなので、猫も杓子もその真似をしたがることが両者相似ていた。無論自然主義時代には雷同者にしても、猫や杓子にしても、微々たるものであった。プロレタリア文学横行に比べると、あの頃の自然主義の力は微々たるものではあったが、それでも、反

対のロマン派の小川未明や泉鏡花は圧迫されて、原稿の売行に支障を来したそうであった。あの頃、「中央公論」にたまたま鏡花の作品を掲載するについて、社長は自然派の作家に気兼ねしたそうである。私が一年間の短かい外遊から帰って来た時はプロ文学全盛期であったらしく、他の文学はすべて影が薄いようであった。「この頃は皆様おひまなようです」と、私の知人たる旧い作家はみな世に迎えられなくなっていることを、ある雑誌編輯者が暗示した。また他の雑誌記者は、小林多喜二や徳永直のような私の知らなかった新進作家の名を挙げて、そ

の作品の非凡さを激賞していた。この場合にも、私は、自然主義勃興時代を回顧した。あの時分にも、こういう風で旧作家が除外され新作家が買被られていたのであろう。そして除外された旧作家が、新興の流派に反感を抱き憎悪を覚えたのであろうと推察された。このプロ文学は往年の自然主義文学以上に芸術を欠き、粗末であったため、没落したようであった。

私は長い間の文壇生活に於て、個人の栄枯盛衰、流派の消長をいろいろに見て来た訳である。私は一般の世間に於て人生を見るよりも、文壇に於て人生を見て来たの

である。エラスムスやヴォルテールは常に脆弱(ぜいじゃく)であったが、七十年も生き続けたそうだ。「彼等は、自分の身体に注意し、これを大切にし、気をつけ、疲労することや過激に亘ることを懼(おそ)れるものである。そうやって結局のところ、彼等を屢々軽蔑乃至哀憐の情を以て眺めていた遙かに壮健な仲間の連中の野辺送りをするようなことにもなってしまうのである」私も長生して、彼等のようになったのである。

私は懇意であった仲間の栄枯盛衰を見たばかりでなく、異った流派に属する文壇人の栄枯盛衰をも見て来た。

この頃も、去年の秋から一年足らずの間に、知人上司小剣をはじめ、幸田露伴横光利一菊池寛などが続々と逝去して、私をして彼等の文学的経路や業績を回顧させた。露伴と菊池とは、自然派以外の文人として、私には印象深きものがあり、自然派の人生観や作風と異る所が考慮に価いしているのである。菊池は自然主義後に文壇に出たので、意識しないうちこの主義の影響を多少受けているにはちがいないが、彼は一つの主義に拘泥していじけてはいなかった。「啓吉物語」ともいうべき私小説を幾つも書いて文壇に歓迎されたが、自然派作家の私小説の

ように陰欝であったり、しつこがったり、めそめそしていたりなんかしなかった。むしろ朗らかであり、気持がさっぱりしていた。通俗向き小説の骨法をよく心得ていた。そして多数の読者に愛好され、一時は文壇切っての人気作家となった。脚本も、アイルランド劇なんかに学ぶところがあり、新味があって一般の見物にもよく理解され、向う受けがよかったようであった。彼は常識的に時代を代表した一人物であって、従って「特殊の自然主義文学」とは風格が全く異っていた。菊池は世間を楽まんとし、また楽み得た男子であった。日本的特種の自然

主義気質とは全く異っていた。快活な泡鳴でも、悲痛な哲学を唱道し、人生苦に思いを潜めていたのであった。花袋は、表面あんな凡庸な作品を出しながら、心は水火の悩み、皮剥ぎの悩みを経験していたつもりであった。或外国文学研究者が、花袋の所謂「皮剥ぎの悩み」について冷笑的批評を下し、何の為めに自分の皮を剥いだりするのか、フランスのモウパッサンなど自然主義作家は、その作品に於て、花袋的皮剥ぎなんかやってはいないのだと云っていたが、それはその通りであろう。しかし、花袋はかかる皮剥ぎを小説の上で行っていることに人生

味を感じていたのだ。菊池寛流の文学観から云ってもこんな事は馬鹿なことにちがいない。それは私は幾度も繰返して云う事だが、日本の自然主義文学は、世界の古今の文学史に例のない文学であったのだ。例のないと云うのは、必しも秀(すぐ)れた意味で例のないのではなく、「自縄自縛でじたばたする愚か物」と、傍観者に見られるような意味で例がないとも云えるのである。「啓吉物語」の如き、成功者の出世物語の如きは、自然主義者の私小説とは全然類を異にしているのである。

幸田露伴は、八十歳を越ゆる迄の長い文壇生活の間に、

些(すこ)しも自然主義の感化を受けず、西洋文学に影響されず、東洋流に「孤高」と云った態度を保った稀有な文人であった。蕪雑な近代の日本文壇に於ては、露伴文学は古典的文学のような趣きがあった。思想も文体も純然たる東洋的現われであった。そのため、早くから西洋の文学や思想を翻訳的に受入れている私などには、露伴文学にはどうしても親しめなかった。今度も彼の早期の傑作「五重塔」「蘆の一ふし」「二日物語」、晩年の「観画談」「幻談」などを読んで、日本伝統の文学味が味わい得られたにしても、私の心の底では彼の作意作風にどうしても親

しみ得ないのである。「五重塔」に出ている棟梁川越の源太の如きは、いい意味の江戸ッ児気質を具えた爽快な人物で、自然主義作品中の人物のように卑小でないと云えるかも知れないが、私には、自然主義発生前の作品として、いかにも作り物語と云った感じがした。「二日物語」は、日本の古文学の如く、「弓張月」や「雨月物語」よりももっと旧い時代の文学の如く、昔の標準で名文と云うべき種類の作品で、文学史上の一つの見本として取扱われるべきものである。しかし、形は標本的名文の趣きを具えていながら、内面は空疎で、我々の心を打つと

ころはないのである。「雨月」には悽惨(せいさん)の気が読者の心を打つのであるが、「二日物語」の「此一日」にはそれもない。西行の心境を描いた「彼一日」も、その理想境が作り物らしく思われるだけである。出家遁世した西行が長谷寺で偶然妻に出合って愁嘆するところ、人間味があるようで、実際は作り事染みているのである。夫を真似て悟りの道に入った妻が、娘を思出して愚痴を云うところは、人間性の発露と見てもよかろうが、西行が少女を説き悟して「既に火宅(かたく)の門を出でて法苑の中に入らしめ終んぬ」なんかと云って、安心しているのは、私には

むしろ滑稽に感ぜられる。そう安々と、少女が浮世を悟り切れるものだろうか。少女曰く、「父上既に世を逃れたまひぬ。おのれ、御後に従はんとこそ思へ。世に百歳の夫婦も無し、なにぞ一期の恩愛を説かん。たとひ思ふこと叶ひ、望むこと足りぬとも、媚(いつくし)みを蒙り羨を惹きて在らんは拙かるべし。もとより女の事なれば、世に栄えん願ひもさまでは深からず、親のおはさねば身を重んずる念もやゝ薄し。あながち御仏を頼みまゐらせて浄土に生れんとにはあらねど、如何なる山の奥にもありて草の庵のその内に、荊棘を簪(しん)とし、粟稗(ぞくはい)を炊(かし)ぎてなりと、

たゞ心清(すが)しく月日経ばや、などゝ思ひたること幾度となく侍り、睦ぶべき兄弟も無し、語らふべき朋友も持たず、何に心の残り留まるところ無し――雲は旧(きう)に依つて白く、山は旧に依つて青からんのみなり、全く世をば思ひ切り侍りぬ」

こんな少女がこんな露伴好みの、ませた、悟った言葉を吐露するのである。私なども日本人の末裔として、この作り物語の少女のような心境を空想することは屢々あるのであるが、それはただ空想としての存在である。こんな空想も一時の慰藉にはなるのであるが、私などの心

にはもはや手応えがしないのである。自然主義文学のような、いつまでも解決のない文学の境地に永遠にさ迷っているのは遺憾であるが、それを如何ともし難いのである。貧寒なる文学、愚かなる迷える文学として、我自然主義文学を回顧する外ないのであるが、そうかと云って、この種の文学を踏みにじって仁王立になっているような、人間救護の、解決ある大文学はまだ何処にも現われていないではないか。「但し欲楽の満足を与へ、栄華の十分を享けしむるは、木葉を与へて児の啼きを賺(す)かす、それにも増して愚かなことなり。世を捨つる人がまこと

に捨つるかは、捨てぬ人こそ捨つるなりけれ、たゞ幾重にも御仏を頼みたまへ。心留むべき世も侍らず」と、露伴作中の西行は云っている。西行はそんな安易な理想派ではなかったであろうと思いながら、自然主義の弔辞として、これ等の詞句を引用した。

（昭和二十三年三月―十二月）

日本文学電子図書館

自然主義盛衰史

著　者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底　本：現代日本文學大系16 正宗白鳥集
筑摩書房
昭和44年７月15日 初版第一刷発行

日本電子文学図書館